大胡西北部遺跡群

堀越西一丁田遺跡
堀越乙関替戸遺跡

「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　　第４集

はじめに

「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」の実施に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集『堀越西一丁田遺跡・堀越乙関替戸遺跡』をお届けいたします。

本報告書は、平成4年度及び平成5年度に実施した発掘調査のうち、堀越地区に所在する2遺跡の成果をまとめたものです。

堀越西一丁田遺跡では、縄文時代後期前葉から中葉にかけての土器を多く出土し、住居址の検出もありました。

堀越乙関替戸遺跡では、狭い調査範囲にもかかわらず平安時代の3軒の住居址の検出がありました。

平成2年度から開始された大胡西北部遺跡群の発掘調査も本年度本報告書及び第5集『横沢向田遺跡・堀越丁二本松遺跡・横沢向山遺跡・茂木二本松遺跡』の刊行をもってすべて終了いたします。長期に及ぶ発掘調査そして資料整理には関係各位をはじめ多くの方々のご協力、ご指導があってのものと思います。

末筆となりましたが調査にご協力いただきました多くの方々、調査にあたられたみなさまに、深く感謝の意を表すとともに、本書が町民をはじめ多くの方々に活用されますことを祈念し、はじめの言葉といたします。

平成10年3月

勢多郡大胡町教育委員会
教育長　劔　持　平三郎

例　　言

1．本書は、「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」の実施に伴い事前に発掘調査された大胡町大字堀越字西一丁田に所在する堀越西一丁田遺跡及び大字堀越字乙関替戸に所在する堀越乙関替戸遺跡の発掘調査報告書である。

なお、事業名称は、当初「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」として開始され、平成6年度から事業内容の変更に伴い「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に改称された。

2．遺跡の名称は、大字名小字名を併記しそれぞれ堀越西一丁田遺跡・堀越乙関替戸遺跡と呼称した。

3．発掘調査は、大胡町教育委員会が直営で実施したものである。

4．「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う発掘調査は平成2年度の次年度工事実施予定地区における試掘確認調査から開始された。本書で報告する堀越西一丁田遺跡は、平成4年度に、堀越乙関替戸遺跡は平成5年度にそれぞれ発掘調査を実施した。

5．調査組織及び本書の作成組織は、次のとおりである。

事務局

教　育　長	剱持平三郎
社会教育課長	井上　敬雄（平成7年5月退任）
	山口　　豊（平成7年6月着任、平成9年5月退任）
事 務 局 長	井上　健児（平成9年6月着任）（機構改編に伴う）
課 長 補 佐	角間　　宏（平成6年5月退任）
	真藤　　孝（平成6年6月着任、平成9年5月退任）
課(局)長補佐	天沼　和男（平成7年4月着任）
局 長 補 佐	小林　行夫（平成9年6月着任）（機構改編に伴う）

文化財担当

係　　長	山下　歳信
主　　任	藤坂　和延
主　　事	小沼　安美（事務担当）

6．本書の作成にあたっては、編集・執筆を藤坂が中心となってあたった。また、以下のものが作成に参加した。（五十音順）

五十嵐文江　　鈴木久美子　　北爪　珠美　　田村志づ江　　内藤　典子
山下　雅江

7．石器石材の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社　五十嵐俊雄氏による。

8．石器実測の一部は、シン技術コンサル株式会社による。

9．発掘調査によって出土した遺物は、大胡町教育委員会文化財事務所に付設する収蔵棟で管理・収蔵されている。

10. 発掘調査の実施および本書を作成するについて、下記の機関・諸氏に御指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　群馬県埋蔵文化財調査センター
株式会社測研　技研測量設計株式会社　須賀工業株式会社　勢多郡社教部会文化財分会の諸氏

11. 発掘調査作業員及び整理作業員は次のとおりである。(五十音順、敬称略)

堀越西一丁田遺跡

阿久沢福造　五十嵐文江　石井　よね　井野ちう子　井上美代子　井上　玲子
大沢あさ江　大原きみ子　大原　とく　大野　京子　奥野　富子　小沢チヅエ
神尾　茂　木村かね子　木村　瑞枝　喜楽　トヨ　小沼　はつ　下山　敏
菅田　ツル　鈴木　梅子　関谷　清治　故高橋充子　滝本　房子　田中善四郎
角田　秀夫　勅使河原幸枝　勅使河原道江　登坂うた子　萩原　秀子　林　みき
藤川　敏枝　松倉　菊枝　松倉　りつ　山下　雅江　横沢　和代　横沢　恵子
和田マツエ

堀越乙関替戸遺跡

阿久沢福造　五十嵐文江　石井　よね　井野ちう子　井上美代子　大沢あさ江
大原きみ子　大野　京子　岡田　誉富　奥野　富子　小沢チヅエ　落合　高男
小保方富次郎　木村かね子　喜楽　トヨ　佐野勝次郎　下山　敏　菅田　ツル
鈴木久美子　須藤か津ゑ　関　トシ子　関口みよ子　関谷　清治　故高橋充子
滝本　房子　角田正次郎　勅使河原幸枝　登坂うた子　中沢しず子　中村新太郎
長岡　徳治　主代　仲治　萩原　秀子　林　みき　福島　逸司　藤川　敏枝
松倉　菊枝　松倉　りつ　村山　ふで　山下　雅江　山田　茂雄　横沢　和代
横沢　恵子　和田マツエ

凡　例

1．本書報告の遺構番号については、発掘調査時のものを使用した。

2．本書挿図の縮尺は次のとおりである．

堀越西一丁田遺跡

全体図　1：300（配置図　1：1200、土層断面図は　1：120）

住居址　1：60　　炉址　1：30　　土坑　1：60　　炭窯　1：60　　道状遺構　1：120

土器　1：2，1：3，1：4

石器　2：3（石鏃・石錐），1：3（石斧・磨石・凹石・スクレーパー），1：4（石皿・多孔石）

堀越乙関替戸遺跡

全体図　1：200（配置図　1：1000）

住居址　1：60　　竈址　1：30

土器・石器　1：3

3．遺構図中に記した断面基準線は標高である。

4．遺構図中に示したN方位は、座標北である。

5．遺物分布図中の遺物に付した番号は実測図番号・遺物観察表番号と一致する。

6．土器については本文中で説明した。石器については下記の記載内容により遺物観察表としてまとめた。

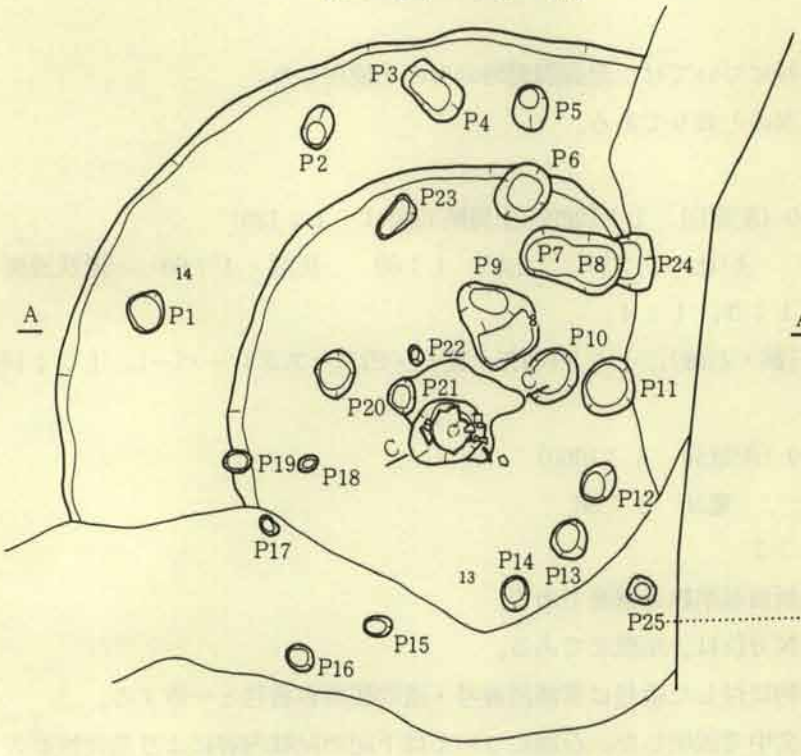
挿図番号	挿図に付した番号
図版番号	写真図版番号
取り上げ番号	遺物取り上げの際に付した番号。また、番号を付さずに取り上げた遺構覆土中出土の遺物は覆土とした。
器種	石器の種類および器形をこの項目に記載した。
遺存状態	遺物の残存程度を記載した。
法量	単位はcm及びｇである。欠損品における現存値には（　）を、復元値には〈　〉を付した。

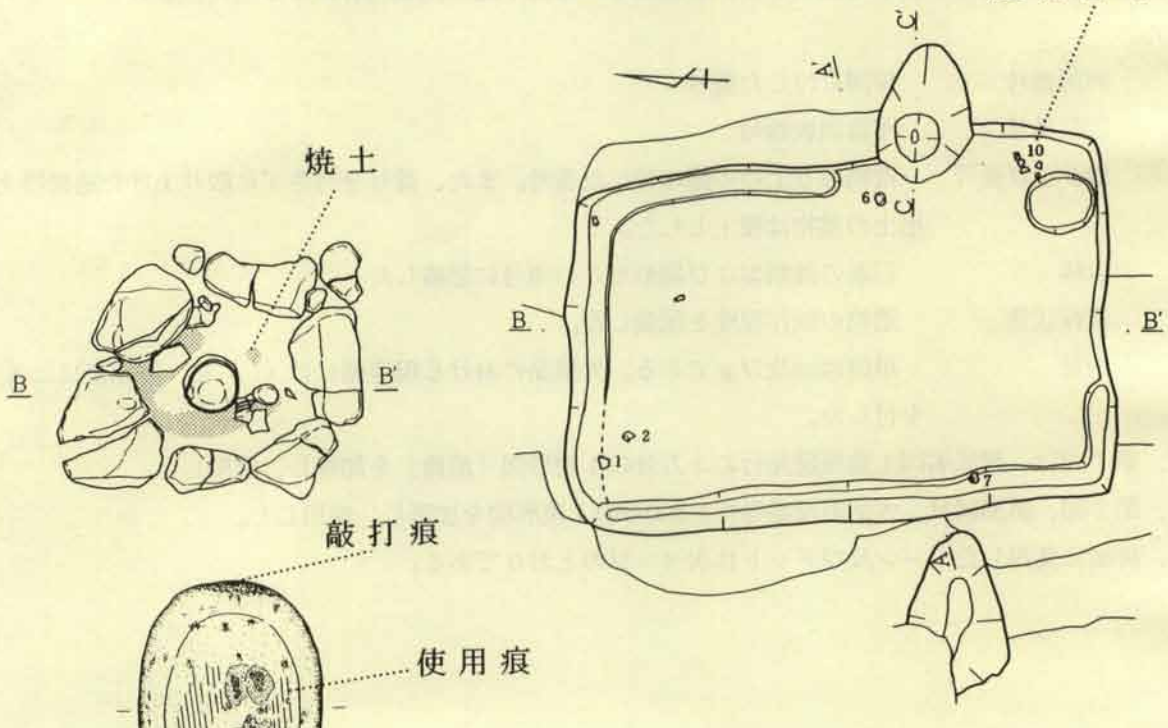
7．第1図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」を加筆し、使用した。

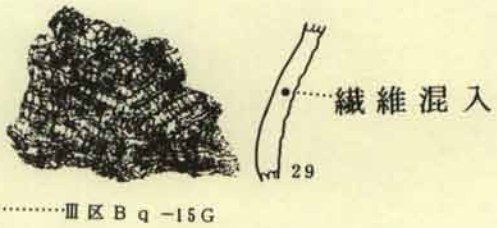
8．第2図、第58図は、大胡町役場発行2,500分の1現形図を加筆し、使用した。

9．挿図に使用したトーン及びドットは次ページのとおりである。

挿図凡例







出土調査区……Ⅲ区Bq－15G

目　次

はじめに
例　言
凡　例
挿図凡例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次
抄　録

序　編　大胡町の遺跡…… 1
第Ⅰ章　自然的環境 …… 1
第Ⅱ章　歴史的環境 …… 1
第Ⅰ編　堀越西一丁田遺跡 …… 7
第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過 …… 7
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 7
第1節　遺跡の位置…… 7
第2節　周辺の遺跡…… 7
第Ⅲ章　調査の方法・遺跡の層序及び調査の概要 …… 8
第1節　調査の方法…… 8
第2節　遺跡の層序…… 8
第3節　遺跡の概要……13
第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物……13
第1節　第1号住居址……13
第2節　第2号住居址……15
第3節　土坑……15
第4節　出土遺物……15
第5節　遺構外出土縄文時代遺物……24
第Ⅴ章　近世以降の遺構 ……78
第1節　炭窯……78
第2節　道状遺構……79
第Ⅵ章　調査のまとめ ……79
第1節　縄文時代後期前葉から中葉の土器について……79
第Ⅱ編　堀越乙関替戸遺跡 ……85

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過 ……85
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 ……85
第１節　遺跡の位置……85
第２節　周辺の遺跡……86
第Ⅲ章　調査の方法及び遺跡の層序 ……86
第１節　調査の方法……86
第２節　遺跡の層序……87
第Ⅳ章　縄文時代の遺物 ……87
第１節　遺構外出土縄文時代遺物……87
第Ⅴ章　歴史時代の遺構と遺物……88
第１節　第１号住居址……88
第２節　第２号住居址……91
第３節　第３号住居址……93
第４節　遺構外出土歴史時代遺物……93
第Ⅵ章　調査のまとめ ……95

挿　図　目　次

序　編　大胡町の遺跡
第１図　大胡町の遺跡 …… 3
第Ⅰ編　堀越西一丁田遺跡
第２図　遺跡周辺図 …… 6
第３図　遺跡基本土層柱状図 …… 9
第４図　調査区(Ⅰ区)全体図(１) ……10
第５図　調査区(Ⅰ区)全体図(２) ……11
第６図　調査区(Ⅱ・Ⅲ区)全体図 ……12
第７図　住居址・土坑平・断面図 ……14
第８図　住居址出土遺物・土器(１) ……16
第９図　住居址出土遺物・土器(２) ……17
第10図　住居址出土遺物・土器(３) ……18
第11図　住居址出土遺物・土器(４) ……20
第12図　住居址出土遺物・石器(１) ……21
第13図　住居址出土遺物・石器(２) ……22
第14図　Ⅱ区遺物集中箇所平・断面図 ……23
第15図　遺構外出土遺物・土器(１) ……25
第16図　遺構外出土遺物・土器(２) ……26
第17図　遺構外出土遺物・土器(３) ……28
第18図　遺構外出土遺物・土器(４) ……29
第19図　遺構外出土遺物・土器(５) ……30
第20図　遺構外出土遺物・土器(６) ……32
第21図　遺構外出土遺物・土器(７) ……33
第22図　遺構外出土遺物・土器(８) ……34
第23図　遺構外出土遺物・土器(９) ……36
第24図　遺構外出土遺物・土器(10) ……37
第25図　遺構外出土遺物・土器(11) ……38
第26図　遺構外出土遺物・土器(12) ……40
第27図　遺構外出土遺物・土器(13) ……41
第28図　遺構外出土遺物・土器(14) ……42
第29図　遺構外出土遺物・土器(15) ……43
第30図　遺構外出土遺物・土器(16) ……45
第31図　遺構外出土遺物・土器(17) ……46
第32図　遺構外出土遺物・土器(18) ……47
第33図　遺構外出土遺物・土器(19) ……48
第34図　遺構外出土遺物・土器(20) ……49
第35図　遺構外出土遺物・土器(21) ……50
第36図　遺構外出土遺物・土器(22) ……51
第37図　遺構外出土遺物・土器(23) ……53
第38図　遺構外出土遺物・土器(24) ……55

第39図　遺構外出土遺物・土器(25) ……56
第40図　遺構外出土遺物・土器(26) ……57
第41図　遺構外出土遺物・土器(27) ……59
第42図　遺構外出土遺物・土器(28) ……61
第43図　遺構外出土遺物・土器(29) ……62
第44図　遺構外出土遺物・土器(30) ……63
第45図　遺構外出土遺物・土器(31) ……64
第46図　遺構外出土遺物・土製品 ……65
第47図　遺構外出土遺物・石器(1) ……67
第48図　遺構外出土遺物・石器(2) ……68
第49図　遺構外出土遺物・石器(3) ……69
第50図　遺構外出土遺物・石器(4) ……70
第51図　遺構外出土遺物・石器(5) ……71
第52図　遺構外出土遺物・石器(6) ……72
第53図　遺構外出土遺物・石器(7) ……73
第54図　炭窯平・断面図 ……78
第55図　道状遺構平・断面図 ……79
第56図　第V群土器変遷図(1) ……82
第57図　第V群土器変遷図(2) ……83
第II編　堀越乙関替戸遺跡
第58図　遺跡周辺図 ……84
第59図　調査区全体図 ……86
第60図　遺構外出土縄文時代遺物 ……88
第61図　第1号住居址平・断面図 ……88
第62図　第1号住居址出土遺物 ……90
第63図　第2・3号住居址平・断面図 ……91
第64図　第2号住居址出土遺物 ……92
第65図　遺構外出土歴史時代遺物 ……94

表目次

序　編　大胡町の遺跡
第1表　大胡町の遺跡 ……4・5
第I編　堀越西一丁田遺跡
第2表　住居址出土遺物・石器観察表 ……23
第3表　遺構外出土遺物・石器観察表 ……74～77
第4表　第V群3類土器観察表 ……81
第II編　堀越乙関替戸遺跡
第5表　遺構外出土縄文時代遺物・石器観察表 …87
第6表　第1号住居址出土遺物観察表 ……89
第7表　第2号住居址出土遺物観察表 ……93
第8表　遺構外出土歴史時代遺物観察表 ……95

図版目版

PL－1　調査区(I区)全景、調査区(II区)全景、調査区(III区)全景、第2号住居址全景
PL－2　第1号住居址・炉及び遺物出土状態、第1号住居址・炉及び第2号住居址
PL－3　第1号住居址・炉、第1号住居址遺物出土状態、II区遺物集中箇所遺物出土状態
PL－4　I区1T遺物出土状態、I区5T遺物出土状態、I区6T遺物出土状態、III区遺物出土状態、III区土層状況、炭窯全景
PL－5　住居址1・2・9・33、遺構外出土遺物・土器78・194・262・559、遺構外出土遺物・土製品1
PL－6　第1号住居址全景、第1号住居址・竈全景、第1号住居址・貯蔵穴全景、第2号住居址及び第3号住居址・竈

抄　　録

フリガナ	ホリコシニシイチョウダイセキ・ホリコシオツセキガエトイセキ
書　　名	堀越西一丁田遺跡・堀越乙関替戸遺跡
副 書 名	「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第4集
編著者名	藤坂和延
編集機関	大胡町教育委員会　／　〒371-0292　群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行年月日	西暦1998年3月20日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
ホリコシ 堀越 ニシイチョウダイセキ 西一丁田遺跡	セタグンオオゴマチオオアザ 勢多郡大胡町大字 ホリコシアザニシイチョウダ 堀越字西一丁田	10304		36°25′56″ 139°9′30″	19921013 ～ 921203	1,385㎡	ほ場整備事業
ホリコシ 堀越 オツセキガエトイセキ 乙関替戸遺跡	セタグンオオゴマチオオアザ 勢多郡大胡町大字 ホリコシアザオツセキガエト 堀越字乙関替戸	10304		36°25′25″ 139°9′32″	19931111 ～ 940127	184㎡	ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
堀越西一丁田遺跡	包蔵地	縄文時代			縄文土器・石器	特になし
	集落	縄文時代	住居址	2軒	縄文土器・石器	
			土坑	1基	なし	
	生産址	近世	炭窯	1基	なし	
堀越乙関替戸遺跡	包蔵地	縄文時代			縄文土器・石器	特になし
	集落	歴史時代	住居址	3軒	須恵器・土師器	

大胡西北部遺跡群

堀越西一丁田遺跡
堀越乙関替戸遺跡

「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　－第４集－

大胡町の遺跡

第Ⅰ章　自然的環境

大胡町は、群馬県の中央やや南寄りにあり「上毛三山」のひとつ赤城山の南麓に立地する。県庁所在地である前橋市とは南部及び西部で接し、東部は宮城村・粕川村に接する。東西約５km、南北10km、面積19.76平方kmを測る。標高は640～120mを測り、標高差520mで北から南に向かい大きく傾斜する。

大胡町を載せる台地は赤城山の火山活動に起因し大胡火砕流堆積物と総称される５枚の火山堆積物とそれを覆う関東ローム層によって基礎が形成される。台地は赤城山から開析しながら流れる荒砥川・寺沢川等の河川によって沖積低地が形成され、南北に長い舌状台地を呈するものとなる。

第Ⅱ章　歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺物を出土した遺跡は故相沢忠洋氏によって調査されたことで著名な三ツ屋遺跡（46）をはじめとして大字茂木地区に多く所在し、西小路遺跡（43）・上ノ山遺跡（44）・稲荷窪Ｂ地点遺跡（50）ではいずれも尖頭器が出土している。また、町の北西部にあたる横沢新屋敷遺跡（５）では細石核が、堀越丁二本松遺跡（８）ではやはり尖頭器が出土している。そのほか日光道東遺跡（22）では細石核・尖頭器・ナイフ型石器・削器及び剝片が出土している。

縄文時代

縄文時代に入ると遺跡数は増加する。早期の遺構の検出はないいものの、数遺跡で押型文土器が出土している。前期では横沢新屋敷遺跡（５）で花積下層式期から二ツ木式期にかけての集落が調査され、堀越芝山遺跡（６）・堀越中道遺跡（17）では二ツ木式期の集落が調査されている。茂木二本松遺跡（15）では関山式期の住居址及び遺物が、横沢向田遺跡（９）では諸磯ａ式期の住居址及び遺物が、堀越丁二本松遺跡（８）では諸磯ａ式期の遺構及び遺物が検出している。茂木地区においては天神風呂遺跡（38～42）で黒浜・有尾式期の住居址及び遺物が検出している。また西天神遺跡（１）・横沢向山遺跡でも当該期の住居址が調査されている。新畑Ｃ地点遺跡（16）、上大屋・樋越地区遺跡群（25）では諸磯期の住居址等の検出がある。

中期の勝坂・阿玉台式期の遺跡としては天神遺跡（36）があり、横沢新屋敷遺跡では北陸に分布の中心を持つ新崎式の土器が出土している。加曽利Ｅ式期に入るとさらに遺跡数は激増し、町内の各所で確認されるが、茂木地区に比較的多いようである。代表的な遺跡としては上ノ山遺跡において加曽利E2・３式を中心とする大集落が調査されており、周辺にも小林遺跡（46）、諏訪東遺跡（45）・西小路遺跡（43）が存在する。またこの時代になると遺跡の所在は不偏的でほかにも甲諏訪遺跡（３）・堀越丁二本松遺跡・横沢柴崎遺跡（13）・天神遺跡・堀越中道遺跡等がある。

後期の遺跡は本書で報告する堀越西一丁田遺跡や天神遺跡があり、堀之内式期から加曽利Ｂ式期にかけての土器の出土が見られる。

縄文時代晩期にはいると遺跡は激減する。

弥生時代

弥生時代に入っても状況は同じで遺構等の正確な情報は不明であるが、金丸遺跡において壷型土器が出土したことが知られる。

古墳時代

古墳時代に入ると再び遺跡数は増加する。前期では新畑C地点遺跡・堀越中道遺跡・堀越五十山C地点遺跡（19）・堀越五十山D地点遺跡（18）などの大字堀越地区と、中宮関遺跡（32）・上大屋天王山遺跡（26）上大屋下組遺跡（33）・前橋東商業高校遺跡（34）・下宮関遺跡（35）などの大胡町の南部に多く所在する。中期の遺跡もこれにほぼ重なる。

後期に入るとさらに増加し、不偏化する傾向にある。代表的な遺跡としては、天神風呂遺跡がある。

古墳は大きく分けて横沢古墳群と総称される大字横沢地区と大字茂木地区とに分けられる。横沢地区には横沢新屋敷遺跡・横沢向田遺跡・横沢向山遺跡・大胡町39号墳（12）・やや離れて堀越芝山遺跡において確認され調査されているほか、大塚地区にも多くの古墳が所在する。これらの古墳は横穴式の石室を有する後期古墳である。茂木地区では西小路遺跡・上ノ山遺跡・稲荷窪A地点遺跡をはじめとして周辺に多くの古墳が所在する。上ノ山遺跡では竪穴式の石室を有する前期古墳が多い。また、終末期の古墳として県指定史跡である堀越古墳（37）や町指定史跡である稲荷塚古墳（30）・上大屋西久保漏1号墳（29）も所在する。

奈良・平安時代

この時代になると遺跡の存在は不偏的なものとなり、町内の随所で確認される。集落としては、古墳時代後期から継続的に営まれることが多い。大規模の遺跡としては天神風呂遺跡、堀越中道遺跡がある。天神風呂遺跡は、現在まで11回の調査が実施され、大胡町における当時の中心的集落であることが判明しつつあり、瓦塔の破片・浄瓶等の寺院跡を窺わせる特異な遺物の出土がある。堀越中道遺跡においても、多くの墨書土器や・多種多様な鉄製品・巡方等出土遺物において特異なものがあり、やはり当該期の中心的な集落であることが判明している。ほかには日光道東遺跡（22）・浅見遺跡（23）・諏訪東遺跡（45）等がある。

この時代の特異な遺跡としては、鉄の生産遺構として半地下式の竪型製鉄炉を3基と炭窯1基・住居址1軒を検出した乙西尾引遺跡（2）、同じく竪型製鉄炉を1基と須恵器窯1基、炭窯5基を検出した八ヶ峰遺跡（31）は特筆に値するであろう。

水田跡としては、弘仁9年（818年）に起こった地震に起因する泥流で埋没した中宮関遺跡（32）が調査されている。

また、この時代の古墓として堀越甲真木遺跡（14）がある。

中世

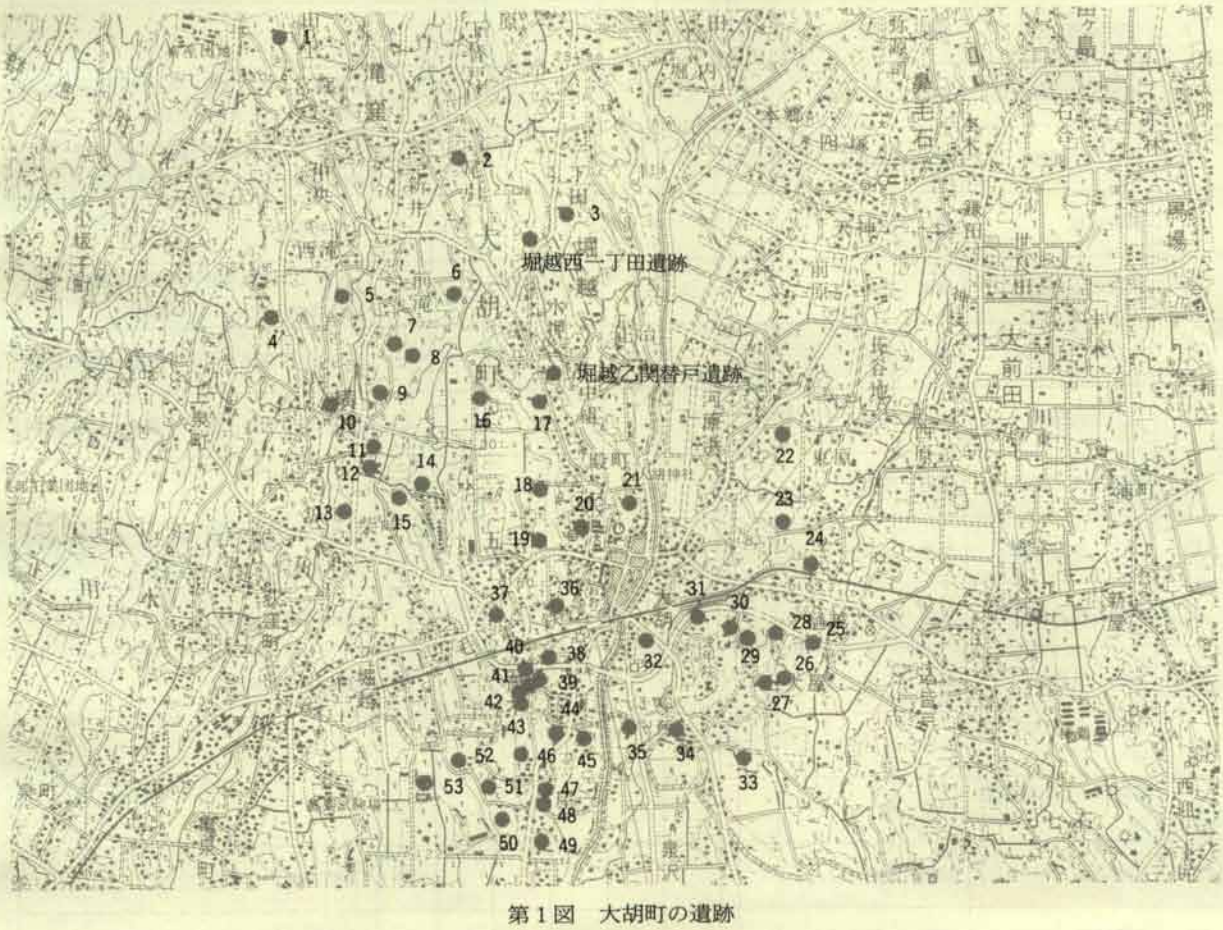
中世における遺跡としては城館址がまず頭に浮かぶが、大胡氏時代の大胡城（21）とその支城としての横沢城跡（10）・丁田城（稲垣屋敷）が存在する。

また、近年当該期の竪穴住居址や地下式土坑等が上大屋中組遺跡（27）で検出・調査されている。

ほかに、当該期の発掘調査例としては、上ノ山遺跡の南西に所在した茂木古墓が昭和32年に調査されたほか、日光道東遺跡の発掘調査においても古墓が調査されている。

近世

近世の遺跡としては、天正18年（1590年）の徳川家康の関東入府に際して牧野康成が大胡二万石の城主なり入城した県指定史跡大胡城跡（21）をはじめとする関連の遺跡が上げられる。他に調査された遺跡は少ないが殿町遺跡（20）・上ノ山遺跡・西前沖遺跡（28）がある。



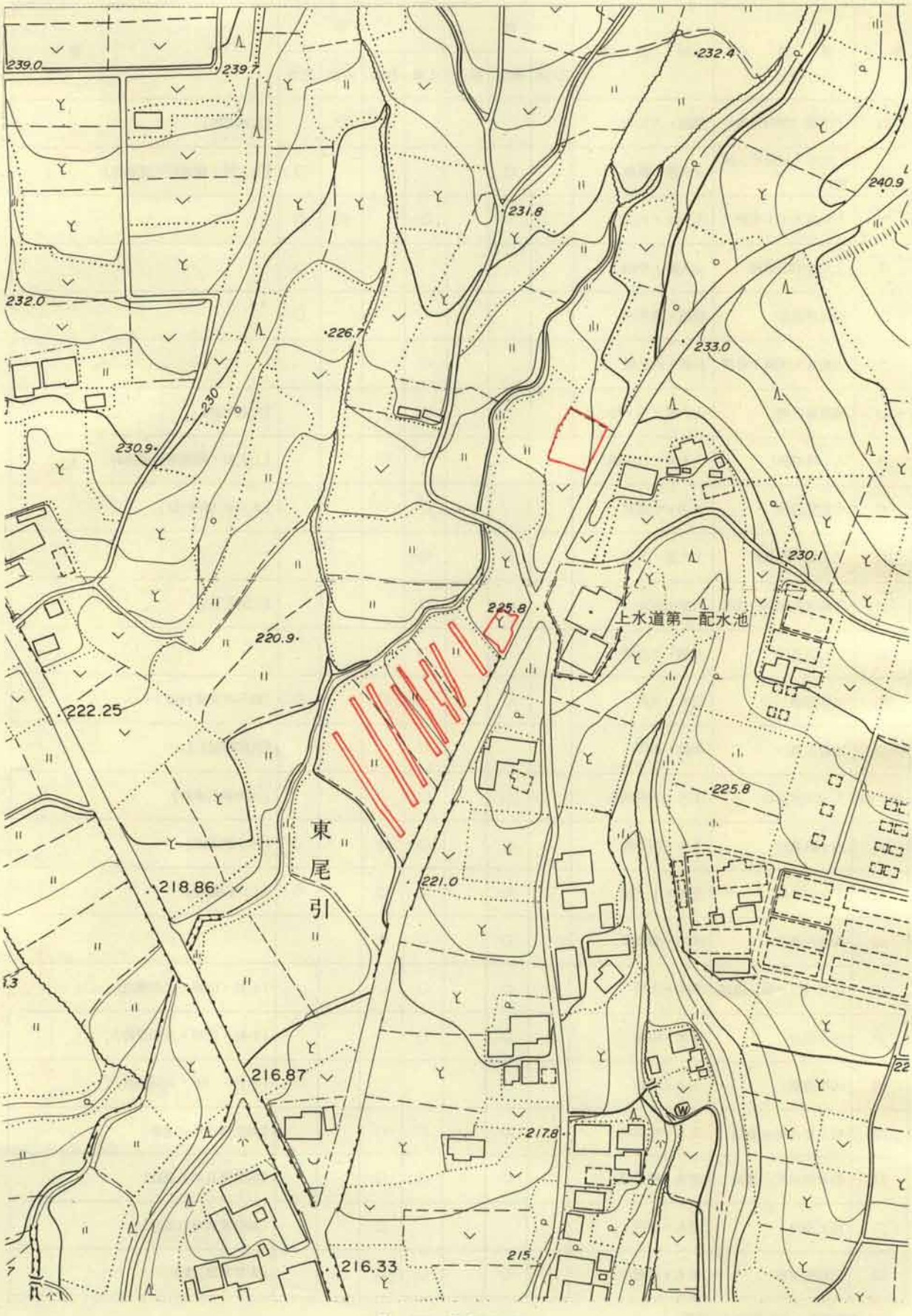
第１図　大胡町の遺跡

第1表　大胡町の遺跡

番号	遺跡名	所在地	内容							文献
			旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	
	堀越西一丁田遺跡	堀越・西一丁田		◎					◎	本書所収
	堀越乙関替戸遺跡	堀越・乙関替戸		○			◎			本書所収
1	西天神遺跡	滝窪・西天神		◎			◎			『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
2	乙西尾引遺跡	堀越・乙西尾引		○			◎			『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
3	甲諏訪遺跡	堀越・甲諏訪		◎						『甲諏訪遺跡Ⅰ』
4	芳山遺跡	横沢・芳山					◎			
5	横沢新屋敷遺跡	横沢・新屋敷	○	◎		◎	◎	◎	◎	『横沢新屋敷遺跡』
6	堀越芝山遺跡	堀越・芝山		◎		◎				『堀越芝山遺跡』
7	宇持遺跡	横沢・宇持		◎						
8	堀越丁二本松遺跡	堀越・丁二本松	○	◎			◎		◎	『堀越丁二本松遺跡・横沢向田遺跡・横沢向山遺跡・茂木二本松遺跡』
9	横沢向田遺跡	横沢・向田		◎		◎				『堀越丁二本松遺跡・横沢向田遺跡・横沢向山遺跡・茂木二本松遺跡』
10	横沢城址	横沢・内出						◎		『大胡町誌』
11	横沢向山遺跡	横沢・向山		◎		◎	◎			『堀越丁二本松遺跡・横沢向田遺跡・横沢向山遺跡・茂木二本松遺跡』
12	大胡町39号古墳	横沢・柴崎				◎				『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
13	横沢柴崎遺跡	横沢・柴崎		◎					◎	『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
14	堀越甲真木遺跡	堀越・甲真木					◎			
15	茂木二本松遺跡	茂木・二本松		◎			◎			『堀越丁二本松遺跡・横沢向田遺跡・横沢向山遺跡・茂木二本松遺跡』
16	新畑C地点遺跡	堀越・新畑		◎		◎	◎			『新畑C地点遺跡』
17	堀越中道遺跡	堀越・中道		◎		◎	◎		◎	『堀越中道遺跡』
18	堀越五十山D地点遺跡	堀越・五十山		○		◎	◎			
19	堀越五十山C地点遺跡	堀越・五十山		○		◎	◎		◎	
20	殿町遺跡	堀越・殿町					◎		◎	『殿町遺跡』
21	大胡城跡	河原浜・根古屋						◎	◎	『大胡町誌』ほか
22	日光道東遺跡	河原浜・日光道東	◎	◎		◎	◎	◎		『日光道東遺跡』
23	浅見遺跡	樋越・浅見		◎			◎			『浅見遺跡』

番号	遺跡名	所在地	内容							文献
			旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	
24	丁田城（稲垣屋敷）	樋越・六反田						◎		『大胡町誌』
25	上大屋・樋越地区遺跡群	上大屋、樋越		◎					◎	『上大屋・樋越地区遺跡群』
26	上大屋天王山遺跡	上大屋・天王山				◎		◎	◎	
27	上大屋中組遺跡	上大屋・中組						◎	◎	
28	西前沖遺跡	樋越・西前沖							◎	
29	樋越西久保漏１号墳	樋越・西久保				◎				
30	稲荷塚古墳	上大屋・八ヶ峰				◎				『大胡町誌』
31	八ヶ峰遺跡	上大屋・八ヶ峰					◎			『上大屋・樋越地区遺跡群』
32	中宮関遺跡	大胡・中宮関				◎				『まんが大胡町誌』
33	上大屋下組遺跡	上大屋・下組		◎		◎				
34	前橋東商業高校遺跡	大胡・前山				○				『大胡町誌』
35	下宮関遺跡	大胡・下宮関				◎	○			
36	天神遺跡	茂木・天神		◎			◎		◎	『群馬県史資料編Ⅰ』
37	堀越古墳	堀越・房関				◎				『大胡町誌』ほか
38～43	天神風呂遺跡	茂木・天神風呂		◎		◎	◎			『天神風呂遺跡』
44	西小路遺跡	茂木・西小路	○	◎		◎	◎		◎	『西小路遺跡』
45	上ノ山遺跡	茂木・上ノ山	○	◎		◎	◎		◎	『上ノ山遺跡』
46	諏訪東遺跡	茂木・諏訪東		◎		◎	◎			
47	小林（三ツ屋）遺跡	茂木・小林	◎	◎		◎	◎			『小林・山神・大畑遺跡』
48	山神遺跡	茂木・山神		◎		◎	◎			『小林・山神・大畑遺跡』
49	大畑遺跡	茂木・大畑		○						『小林・山神・大畑遺跡』
50	稲荷窪Ａ地点遺跡	茂木・稲荷窪		◎		◎	◎			『稲荷窪Ａ地点遺跡』
51	稲荷窪Ｂ地点遺跡	茂木・稲荷窪	○	◎		◎	◎			『稲荷窪Ｂ地点遺跡』
52	梅沢遺跡	茂木・梅沢					◎			『稲荷窪Ｂ地点遺跡』
53	足軽町遺跡	茂木・足軽町		◎		◎	◎			『大胡町誌』ほか

◎は遺構確認、○は遺物のみ確認


239.0
239.7
232.4
240.9
231.8
232.0
226.7
233.0
230
230.9
230.1
225.8
上水道第一配水池
220.9
222.25
225.8
東尾引
218.86
221.0
216.87
217.8
215
216.33

第2図　遺跡周辺図

堀越西一丁田遺跡

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過

堀越西一丁田遺跡は、平成4年度の工事実施予定地区内の大字堀越字西一丁田に所在する。試掘・確認調査は平成3年度に実施した。現地の状況は、本調査においてⅠ区と呼称した地区が水田で、縄文時代後期の大量の遺物の出土を確認した。また、Ⅱ区と呼称した東の洪積台地からⅠ区の低地に張り出すやや低い台地の縁では、Ⅰ区と同様に縄文時代後期の遺物の大量出土及び縄文時代後期の竪穴住居址2軒、土坑1基を、また近世に比定できる炭窯を1基確認した。

平成4年度になり事業の実施に当たり、当該地区の大幅な改変が計画されていることが判明した。そこで、教育委員会は発掘調査を実施し記録保存を図ることで前橋土地改良事務所と協議の結果を見た。

本調査は前橋土地改良事務所との間に調査委託契約を締結、調査を開始した。

現地での発掘調査は諸準備を経て10月13日から12月3日まで西天神遺跡と一部平行して実施した。引き続き、3月25日まで遺物洗浄・遺物注記等の基本整理を実施し平成4年度の事業は終了した。本書の刊行および出土遺物の整理・保管・記録資料の整理は、断続的であるが平成6年度から平成9年度にわたり実施し、本遺跡に係わる事業のすべては完了した。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第1節　遺跡の位置

本遺跡は、大胡町のほぼ中央部の大字堀越字西一丁田に所在し、上毛電鉄大胡駅の北北東約2.5㎞、大胡町立大胡小学校の北北東約1.75㎞に当たる。遺跡地は、南へ傾斜する舌状台地の西側の縁から開析谷にかけて位置する。遺跡を載せる台地は西側を大字堀越字芝山方面から北東方向に伸びる開析谷によって、東側を大字堀越字乙関替戸方面から北北西方向に伸びる開析谷によって西南北に長い舌状台地として形造られ、東西幅約250mを遺跡地周辺で測る。

遺跡の標高は、Ⅲ区北東で最高の228m前後を測り、Ⅱ区の住居址周辺で224m前後を測る。Ⅰ区はこのⅡ区との比高差約1.5mの標高222.5m前後の8Tから標高220m前後の1Tまで緩やかに傾斜する。

第2節　周辺の遺跡

本遺跡の周辺において周知・確認された遺跡は北東約300mに甲諏訪遺跡が所在する。この甲諏訪遺跡は本遺跡を載せる洪積台地と同一の台地の鞍部に位置する。縄文時代中期加曽利Ｅ式期の住居址が6軒確認・調査されている。

北西約950mには本遺跡群の発掘調査報告書第1集で報告した乙西尾引遺跡が所在し、本書で同時に報告する乙関替戸遺跡が南南東約850mに所在する。

また、南西約600mには縄文時代前期初頭の二ツ木式期の集落及び古墳1基が確認・調査された堀越芝

山遺跡が所在する。

第Ⅲ章　調査の方法・遺跡の層序及び調査の概要

第１節　調査の方法

調査にあたっては、基本杭を設定したが測量上の手違いから調査終了後、座標位置がずれていることが判明した。結果として、座標国家座標Ⅸ系（X＝47894.811、Y＝-60956.400）を基点とし、座標北との振れ14°58′20″を南北方向の基準線とする５ｍ×５ｍのグリッドを設定した事になる。グリッド名は南北方向に南から100ｍ単位でＡ～Ｃの３区の大グリッドを組み、５ｍごとにａ～ｔの20区の小グリッド、東西方向に１～18の18区を設定し、南西コーナーの杭をもって呼称した。したがって、(大文字アルファベット)（小文字のアルファベット）―(算用数字)、Ab－５Ｇのように表現した。

また、便宜上トレンチ調査を実施した低地をＩ区、住居址・土坑及び炭窯を検出した地区をⅡ区、Ⅱ区の北で土器包含層のグリット調査を実施し、縄文時代前期の遺物を出土した地区をⅢ区と呼称した。

調査は、Ｉ区は地形に合わせトレンチを８本設定し土木重機により表土除去後、遺物を残しながら人力により掘り下げ土層確認及び遺物分布の把握を図った。Ⅱ区は土木重機及び人力により表土除去後ジョレンがけにより遺構検出・プラン確認を図り、必要に応じ土層確認用のベルトを設定し各遺構の精査を実施した。

また、Ⅲ区は土木重機により表土を除去後、遺物を残しながら人力により掘り下げ、土層確認及び遺物分布の把握を図った。

遺跡の記録図面は、遺構図がＳ＝１：20を基本として、必要に応じＳ＝１：10の詳細図で記録した。調査区の全体図はＳ＝１：100で記録した。

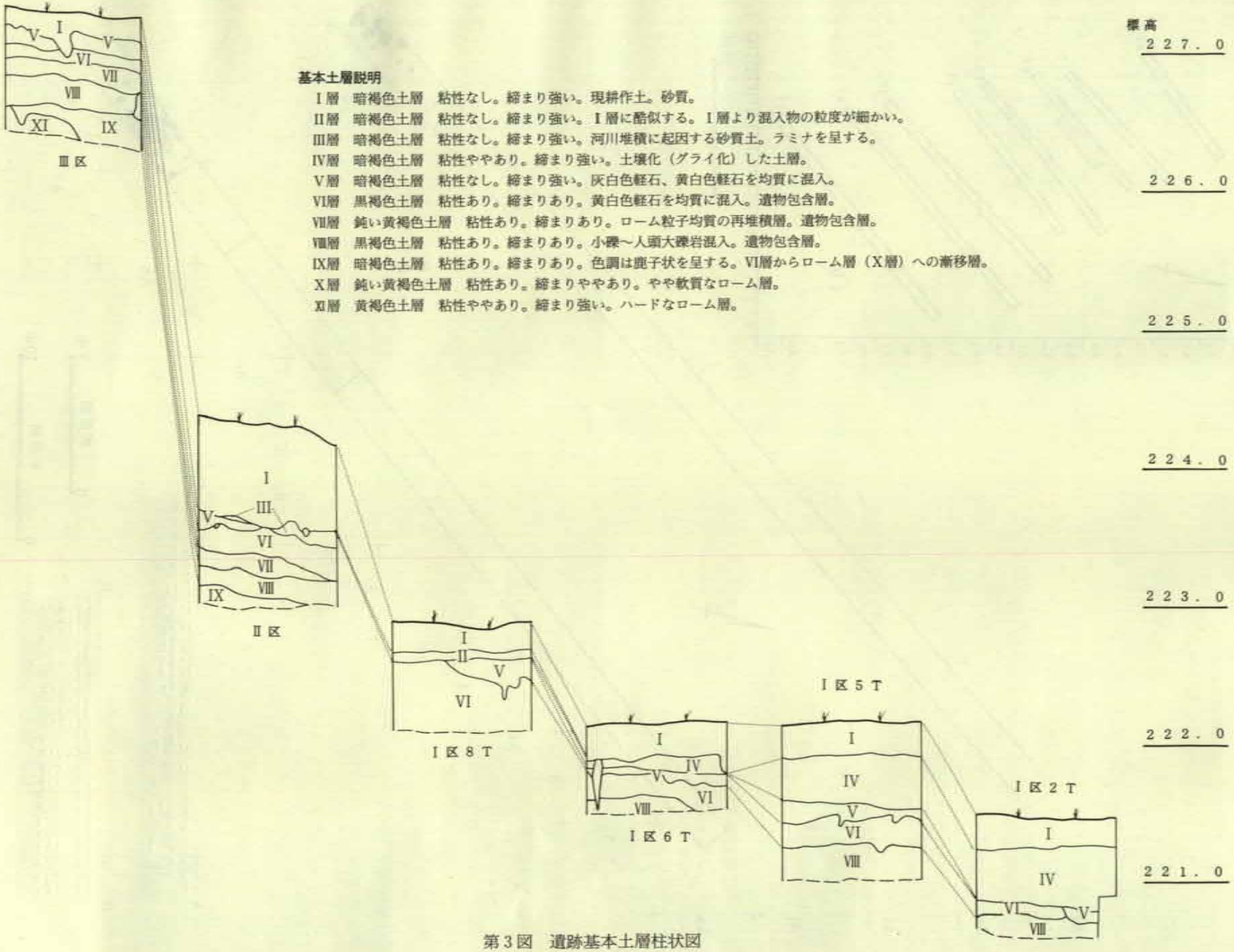
記録写真は35㎜の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い逐次撮影した。また、調査終了後、気球による空中写真撮影もあわせて実施した。

第２節　遺跡の層序

遺跡の層序については、遺跡基本土層柱状図（第３図）に示したとおりである。また、各調査区ごとの状況は全体図（第４～６図）及びⅡ区遺物集中箇所の遺物出土状況平・断面図（第14図）に示した。

概ね、Ⅰ層・Ⅱ層は耕作土として把握できる。Ⅲ層はⅡ区及びⅠ区1Tで確認できたが、その成因は、調査区の西部を一丁田沼から流れる河川によるものと思われるが、その形成時期等詳細は不明である。Ⅳ層はⅠ区２Ｔから７Ｔで確認でき、５Ｔ・６Ｔでは広範囲にわたり堆積しており、厚いところでは　60㎝を測る。Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅷ層はⅠ区１Ｔから７Ｔ・Ⅱ区・Ⅲ区と非常に広範囲にわたり堆積している。Ⅶ層はⅡ区・Ⅲ区で確認され、形成の起因となったローム台地際での確認となった。

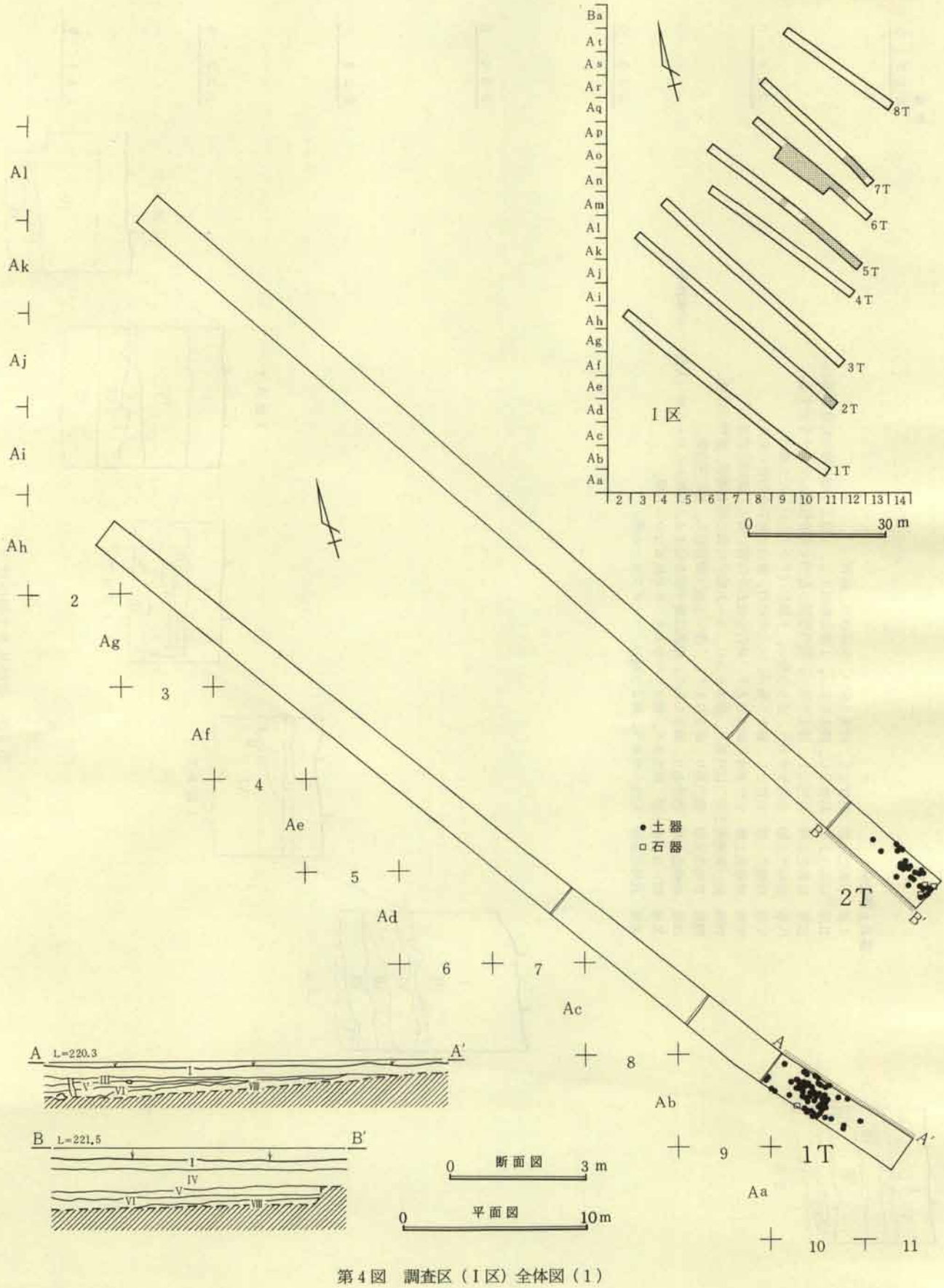
遺物は主にⅥ層を中心に出土しており、層序の形成時期はこれらの出土遺物から想定できよう。



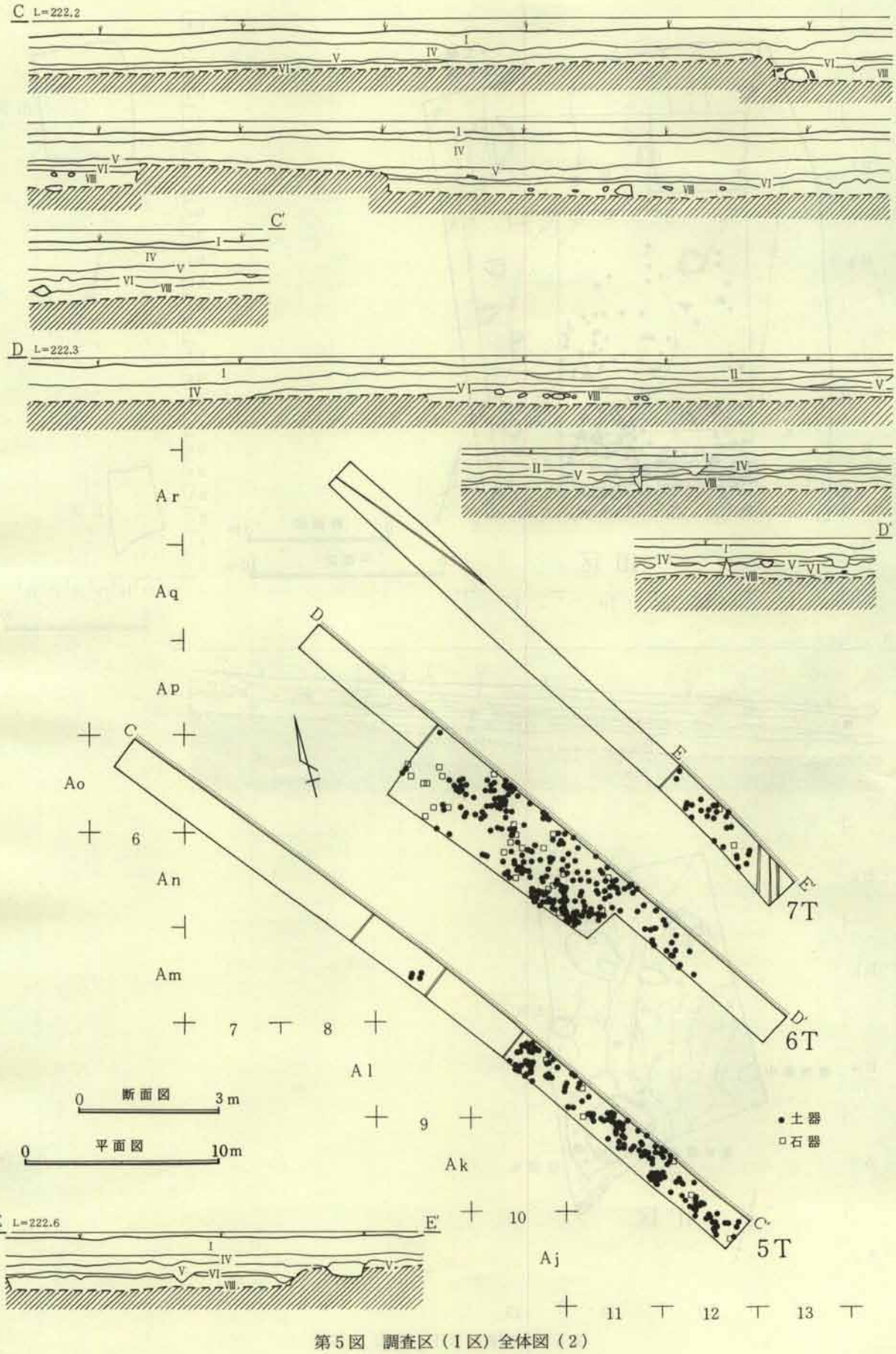
基本土層説明

Ⅰ層　暗褐色土層　粘性なし。締まり強い。現耕作土。砂質。
Ⅱ層　暗褐色土層　粘性なし。締まり強い。Ⅰ層に酷似する。Ⅰ層より混入物の粒度が細かい。
Ⅲ層　暗褐色土層　粘性なし。締まり強い。河川堆積に起因する砂質土。ラミナを呈する。
Ⅳ層　暗褐色土層　粘性ややあり。締まり強い。土壌化（グライ化）した土層。
Ⅴ層　暗褐色土層　粘性なし。締まり強い。灰白色軽石、黄白色軽石を均質に混入。
Ⅵ層　黒褐色土層　粘性あり。締まりあり。黄白色軽石を均質に混入。遺物包含層。
Ⅶ層　鈍い黄褐色土層　粘性あり。締まりあり。ローム粒子均質の再堆積層。遺物包含層。
Ⅷ層　黒褐色土層　粘性あり。締まりあり。小礫～人頭大礫岩混入。遺物包含層。
Ⅸ層　暗褐色土層　粘性あり。締まりあり。色調は鹿子状を呈する。Ⅵ層からローム層（Ⅹ層）への漸移層。
Ⅹ層　鈍い黄褐色土層　粘性あり。締まりややあり。やや軟質なローム層。
Ⅺ層　黄褐色土層　粘性ややあり。締まり強い。ハードなローム層。

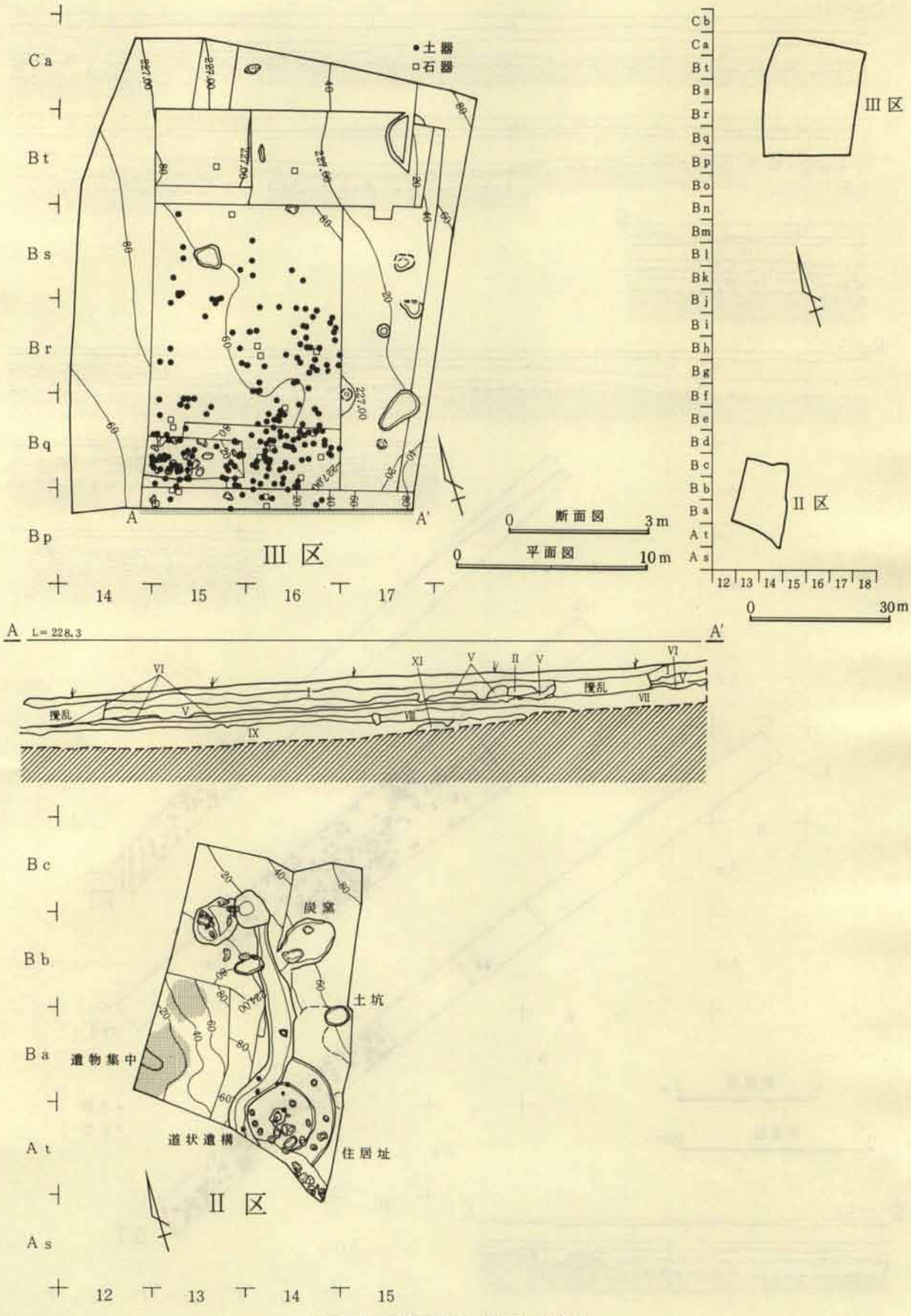
第3図　遺跡基本土層柱状図



第4図　調査区（I区）全体図（1）



第5図　調査区（I区）全体図（2）



第6図　調査区（II・III区）全体図

第３節　調査の概要

縄文時代

本遺跡の中心となる時期は、縄文時代の後期前葉から中葉で、出土遺物の多くがこの時期にあたる。

検出された遺構は住居址が２軒及び土坑１基であるが、Ｉ区と呼称した低地からは当該期の土器が多量に出土している。

確認・調査された住居址は重複住居で、第１号住居址としたものは後期堀之内２式期に比定でき、第２号住居址とした住居址は同じく堀之内１式期に比定できる。第２号住居址が自然堆積により埋覆されてから構築されており、堀之内１式期から２式にかけての時間的な隔たりを考える上で参考になるものと思われる。

この時期の出土遺物はＩ区の５・６Ｔ及びII区の南西部から大量に出土しており、しかも台地から低地への傾斜変換点を中心に分布する。

また、量的には後期の遺物には及ばないがIII区からは縄文時代前期の遺物がややまとまって出土している。

近世

近世と思われる遺構は、炭窯１基及び道状遺構１条が検出されている。

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　第１号住居址

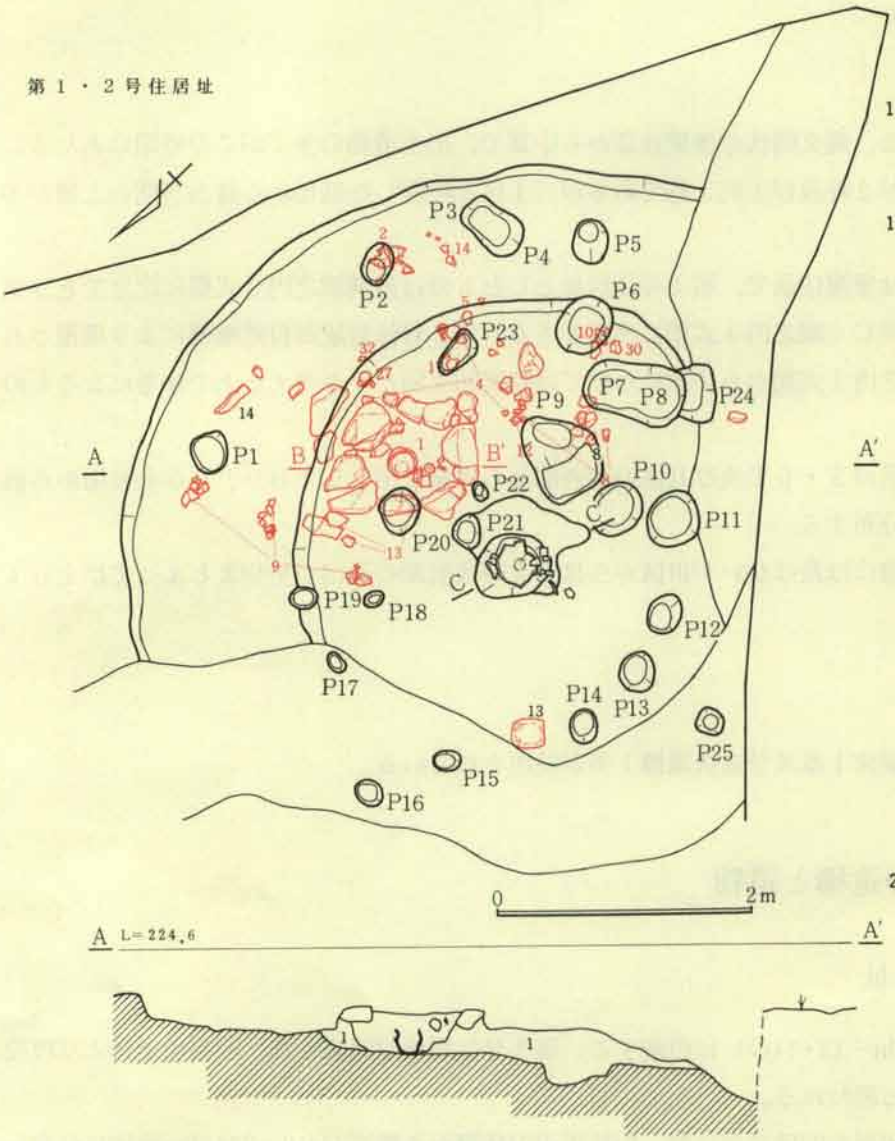
本住居址は、II区（At・Ba―13・14G）に位置する。第２号住居址が廃棄され、暗褐色土により埋設された後に構築されたものと思われる。

平面形態は不明である。床面も明確でないが、炉址周辺の状況から標高224.0～224.1m前後に存在したものと推定する。

炉址は主軸方向Ｎ―44°―Ｅで、長方形を呈する石囲いを伴う土器埋設炉で、石囲いの中央やや北寄りに土器（１）が埋設される。本遺構は、土木重機により表土除去をする際多量の遺物が出土することから、機械による表土除去を中止し、人力による除去作業により炉址を確認するにいたった。しかし、耕作土である表土は薄く、炉址の北東は撹乱も著しく、明確な遺構の平面形態の把握はできなかった。

本住居址に帰属する柱穴の詳細は不明であるが、Ｐ７・８・10・11・24が入り口施設に伴うものと想定できよう。

本住居址に帰属する出土遺物は、炉埋設土器（１）のほか、堀之内２式に比定できる出土遺物の多くが考えられ、１～23がそれにあたる。これらの遺物から本住居址は堀之内２式期に比定できよう。



1号住居跡土層説明

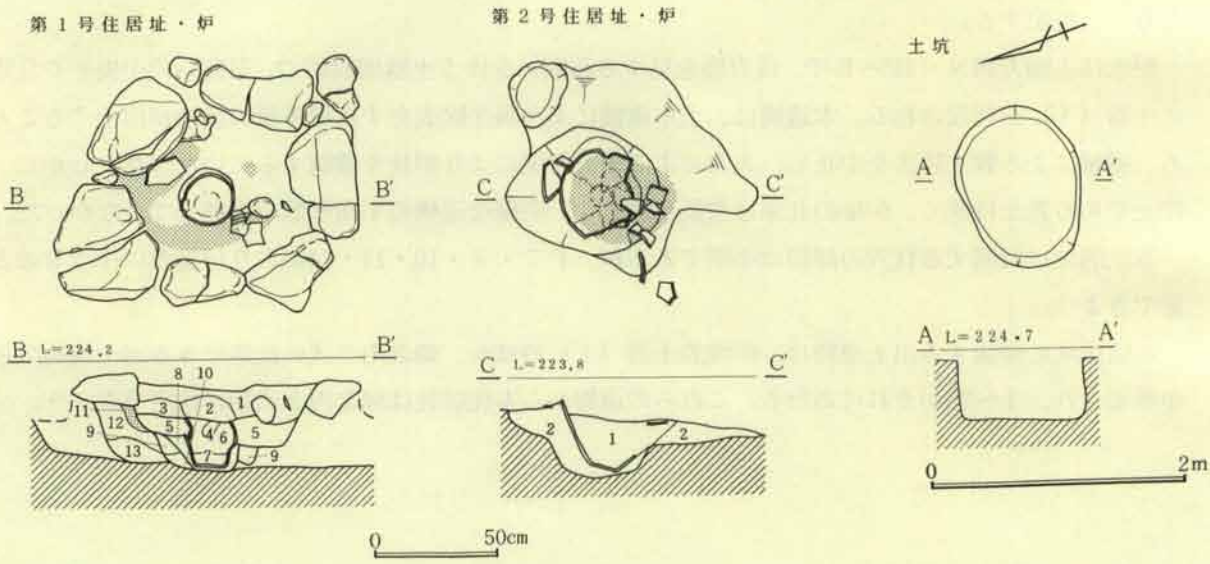
1層　暗褐色土層　混入物少ないローム質の土層。

1号住居跡・炉跡土層説明

1層　暗褐色土層　砂質。混入物少ない。
2層　暗褐色土層　焼土粒子（少量）混入。
3層　暗褐色土層　焼土粒子の混入少ない。
4層　暗褐色土層　灰を多量に混入。
5層　暗褐色土層　均質層。
6層　暗褐色土層　ローム粒子混入。
7層　暗褐色土層　ローム粒子(均質)混入。
8層　暗褐色土層　やや明るい。
9層　暗褐色土層　ローム粒子混入。
10層　暗褐色土層　ローム粒子多量混入。9層に酷似し、9層よりやや粒度が粗く、やや明るい。
11層　赤褐色土層　焼土層。
12層　暗褐色土層　均質層。
13層　暗褐色土層　均質層。12層よりやや明るい。

2号住居跡・炉跡土層説明

1層　暗褐色土層　焼土粒子、カーボン粒子混入。
2層　暗褐色土層　ローム粒子、焼土粒子混入。



第７図　住居址・土坑平・断面図

第2節　第2号住居址

本住居址は、II区（At・Ba—13・14G）に位置する。

平面形態は炉址を中心とする半径約2m前後の円形を呈するものと推定できる。床面は半径1.3m周辺で9～16cmほどの段を有し、中央部の床面が低い。本住居址帰属するものと考えられる柱穴の詳細は不明である。

炉址は南北にやや長い楕円形を呈する土器埋設炉で、住居址のほぼ中央に位置する。規模は南北68cm、東西50cmを測る。付設された土器（33）から本住居址の時期は、堀之内1式期にあたるものと思われる。

本住居址に伴う出土遺物は炉址埋設土器以外は少なく、32～35がそれにあたり、いずれも堀之内1式期に比定できよう。

第3節　土坑

本土坑は、住居址の北東方向約2.4m（Ba・Bb—14・15G）に位置する。

平面形態は東西にやや長い楕円形を呈し、規模は東西128cm、南北96cm、深さ51cmを測る。出土遺物はほとんどなく、構築時期の比定に難があるが、覆土及びその堆積状況から縄文時代に属する遺構と判断する。

第4節　出土遺物

縄文土器（第8図から第11図）

1は、炉址埋設土器で口縁の上半部を欠損する。口縁部は磨消縄文で菱形の構成をとる。地文は単節ＬＲ縄文である。底径8.9cmを測る。

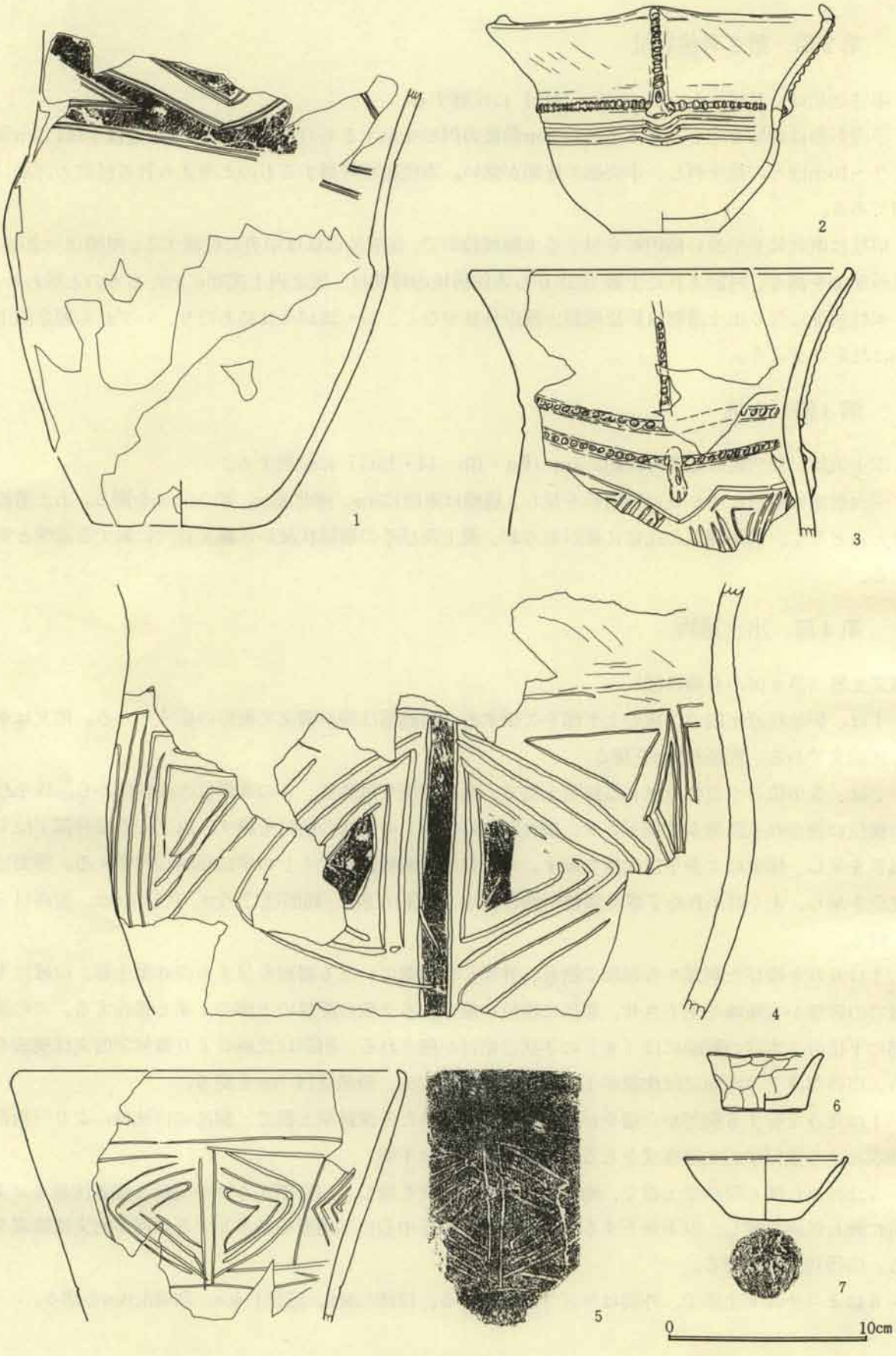
2は、3単位の小波状を呈する鉢型土器で、金魚鉢型を呈する。この3単位の波頂部から隆線を頚部の横位に施される隆線まで垂下させ、接合部には「8」の字状の貼付を施す。以下この接合部下位で円弧状を呈し、横位に3条平行沈線を施す。3単位の小波状部は「く」の字に屈曲し内傾する。器面は黒褐色を呈し、よく磨かれた丁寧な調整が施される。口径16.8cm、頚部径12.6cm、底径5.6cm、器高11.5cmを測る。

3は丸みを帯びた胴部から頚部で括れ、外反し口唇部にいたる器形を呈する深鉢型土器。口縁は平口縁で口唇部から隆線を垂下させ、頚部に横位に施される2条の隆線の上部の1条と接合する。この接合部の下位の2本目の隆線には「8」の字状の貼付が施される。胴部は沈線により幾何学的文様構成をとる。口唇部直下の内面には沈線が1条巡る。口径19.2cm、頚部径14.0cmを測る。

4は丸みを有する胴部から緩やかに外反し口縁にいたる深鉢型土器で、胴部には沈線により三角形を基本とする幾何学的文様構成をとる。口縁部の形態は不明。

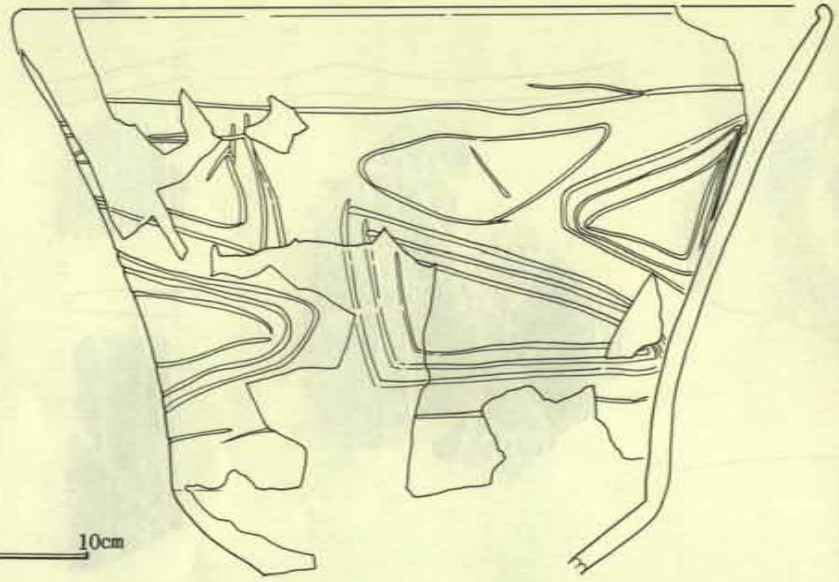
5は外反し開く深鉢型土器で、地文に単節ＲＬ縄文を施し、口唇部からやや間隔を置き沈線を2条横位に施し区画と成し、以下垂下する2条の平行沈線を中心に三角形を基本とする幾何学的文様構成をとる。口径19.2cmを測る。

6はミニチュア土器で、外面はケズリ調整される。口径5.8cm、底径4.4cm、器高3.0cmを測る。



第8図　住居址出土遺物・土器（1）

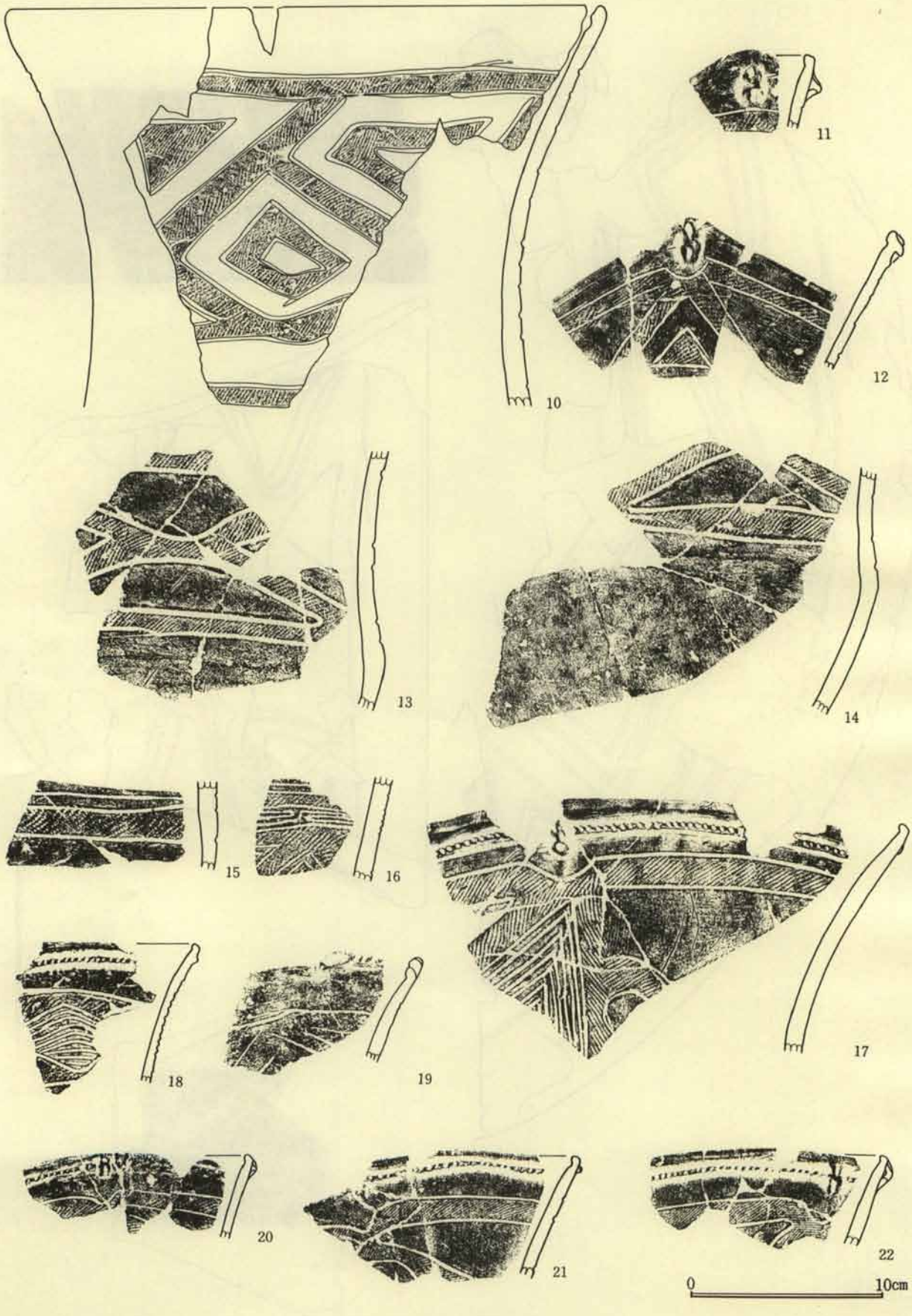
8



9

0 10cm

第9図　住居址出土遺物・土器（2）



第10図　住居址出土遺物・土器（3）

7もミニチュア土器で、手捏ねで成形される。底部は厚く1.1cmを測る。体部は底部から大きく外傾し開く。口径8.0cm、底径3.0cm、器高3.3cmを測る。

8は底部で、直立気味に立ち上がり「く」の字に屈曲し、大きく外傾し開く器形を呈する。底径10.0cmを測る。

9は胴部で「く」の字に屈曲し、大きく外反し口縁にいたる器形を呈する深鉢型土器で、沈線により三角形を基本とする幾何学的文様構成をとる。口唇部直下の内面には1条沈線が巡る。口径31.0cm、残存器高22.4cmを測る。

10は胴部から大きく外反し口縁にいたる器形を呈する深鉢型土器で、単節ＲＬ縄文による磨消縄文で三角形及び菱形の文様構成をとる。口径31.0cm、残存器高16.0cmを測る。

11は波状を呈する口縁部破片で、波頂部に「8」の字状の貼付を施し、以下単節ＬＲ縄文による沈線区画の磨消縄文を施す。

12は波状を呈する口縁部破片で、波頂部に「8」の字状の貼付を施し、以下単節RL縄文による沈線区画の磨消縄文で三角形を基本とする幾何学的文様構成をとる。

13・14はおそらく同一個体で、胴部で「く」の字に屈曲し外反し口縁にいたる器形をとるものと思われる。文様は単節ＬＲ縄文による磨消縄文で三角形を基本とする幾何学的構成をとる。

15は胴部破片で単節ＲＬ縄文による磨消縄文が横位に施文されるが、詳しい文様構成は不明。

16は単節ＲＬ縄文を地文に、沈線による平行沈線文及び幾何学的文様構成をとるが、詳しい文様構成は不明。

17は大きく外反して開く深鉢型土器で、隆線及び「8」の字状の貼付を施し、以下単節ＲＬ縄文による磨消縄文及び沈線により幾何学的文様構成をとる。

18は隆線を施し以下沈線で区画を成し、単節ＲＬ縄文を地文に沈線により横長の菱形の文様構成をとる。

19は口唇部に小突起を有し、以下やや間隔を置き沈線により幾何学的文様構成をとる。

20～22は同一個体で、隆線及び「8」の字状の貼付を施す。以下単節ＲＬ縄文による沈線区画の磨消縄文を施す。口唇部直下の内面には1条沈線が巡る。

23は隆線を施し、以下単節ＲＬ縄文による沈線区画の磨消縄文を施す。

24は注口土器の把手部。

25は細い隆帯で円弧状及び楕円文を描く。

26は体部が「く」の字に屈曲し口唇部にいたる器形を呈する浅鉢型土器。「8」の字状の貼付とそれに平行する短沈線による口縁部文様帯を構成する。

27～29は底部で、いずれも内傾してから直立気味に外反する器形を呈する。30は底部であるが外傾し大きく開く器形を呈する。

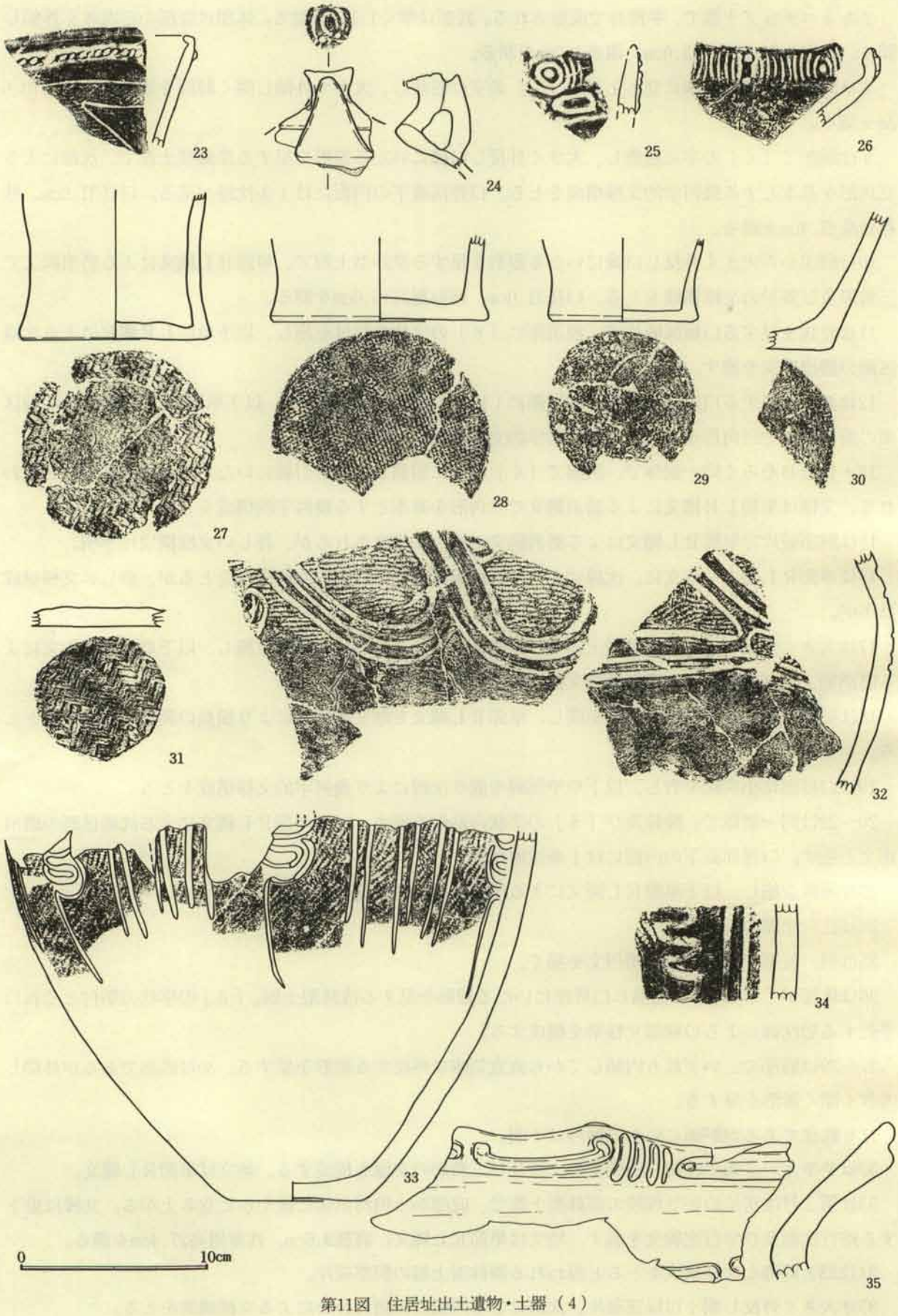
31も底部であるが胴部にいたる器形は不明。

32はやや太い3条の沈線で円弧状の文様及び三角形の文様を構成する。地文は単節ＲＬ縄文。

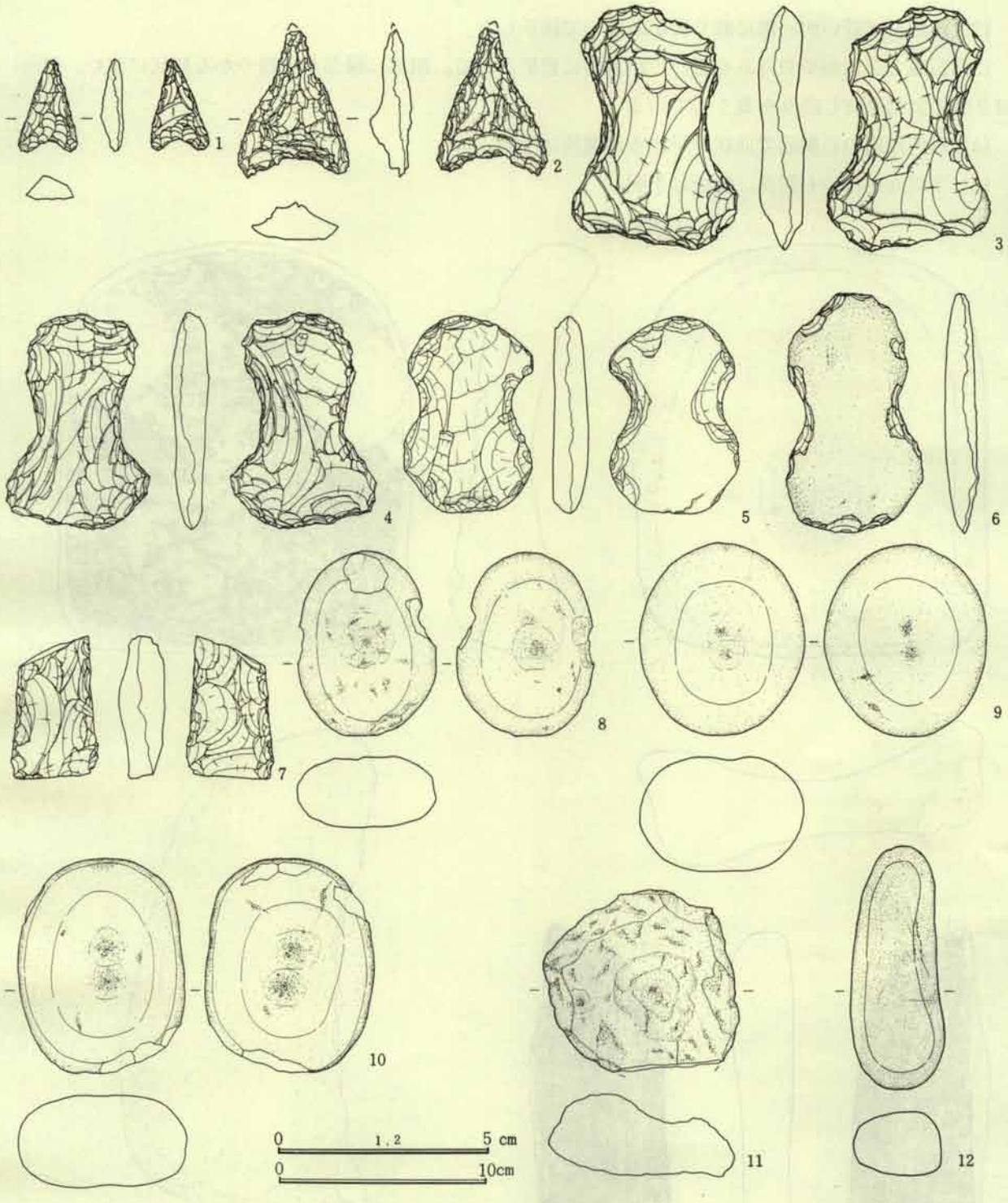
33は第2号住居址の炉址埋設の深鉢型土器で、底部から内湾気味に緩やかに立ち上がる。文様は垂下する蛇行沈線及び平行沈線文を施す。地文は単節ＲＬ縄文。底径9.6cm、残存器高27.4cmを測る。

34は33と同様な文様構成をとると思われる深鉢型土器の胴部破片。

35は大きく外反し開く口縁部破片。沈線による円弧文の組合わせによる文様構成をとる。



第11図　住居址出土遺物・土器（4）



第12図　住居址出土遺物・石器（1）

縄文時代・石器（第12・13図）

1・2は石鏃でいずれも凹基無茎。

3～7は打製石斧で7が短冊型を呈する以外はいずれも分銅型を呈する。

8～10は凹石・磨石。

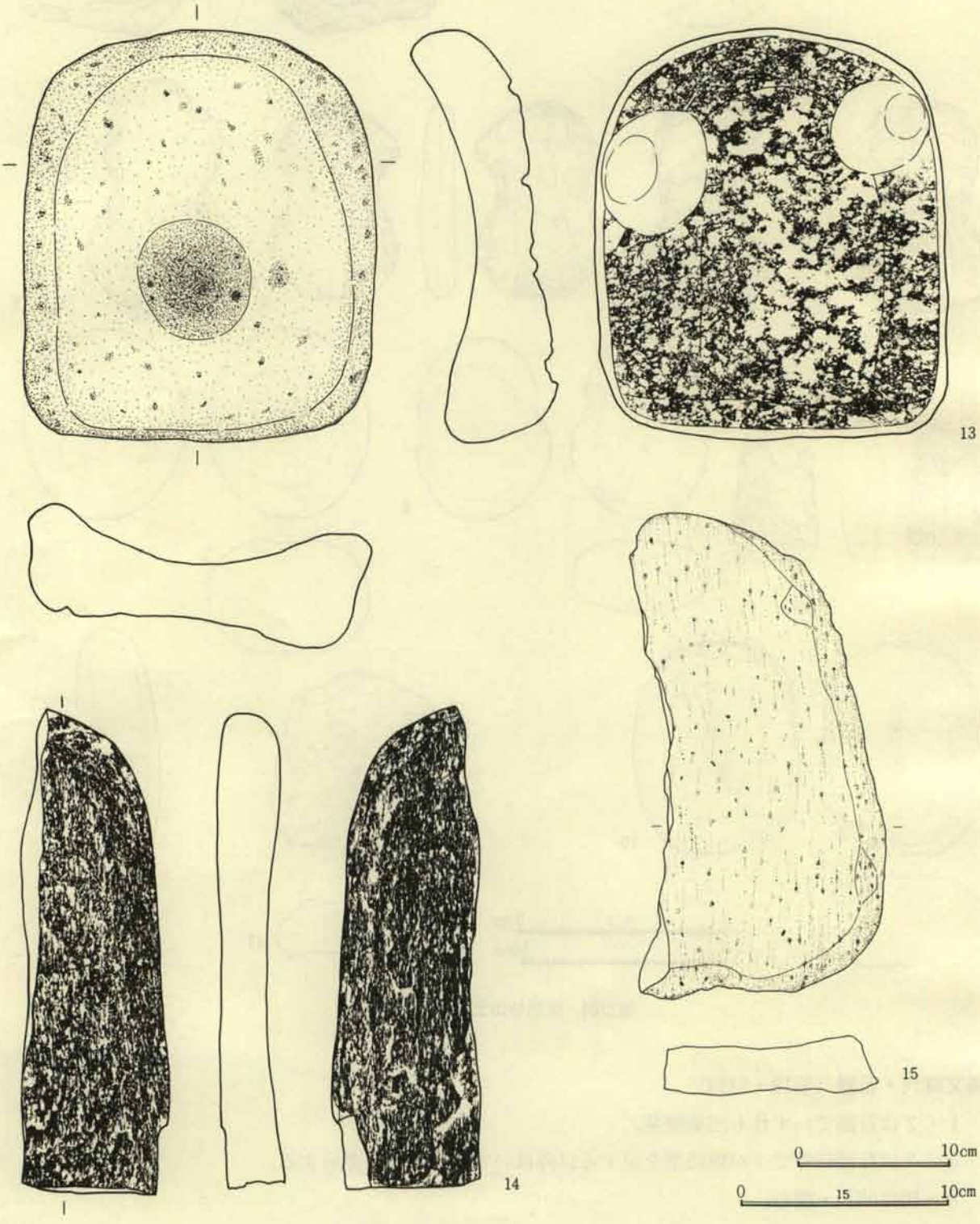
11は凹部を持つが8～11とは異なり磨石としてしての機能は疑問である。

12は自然石に近いが一部に磨り面があるので図示した。

13は石皿で2角がやや丸みを帯びるが方形に整形される。皿部は縁部から緩やかな皿状に窪む。裏面は2個の突起を有し座りを良くしている

14は緑色片岩の石製品で皿状を呈するが機能は不明。

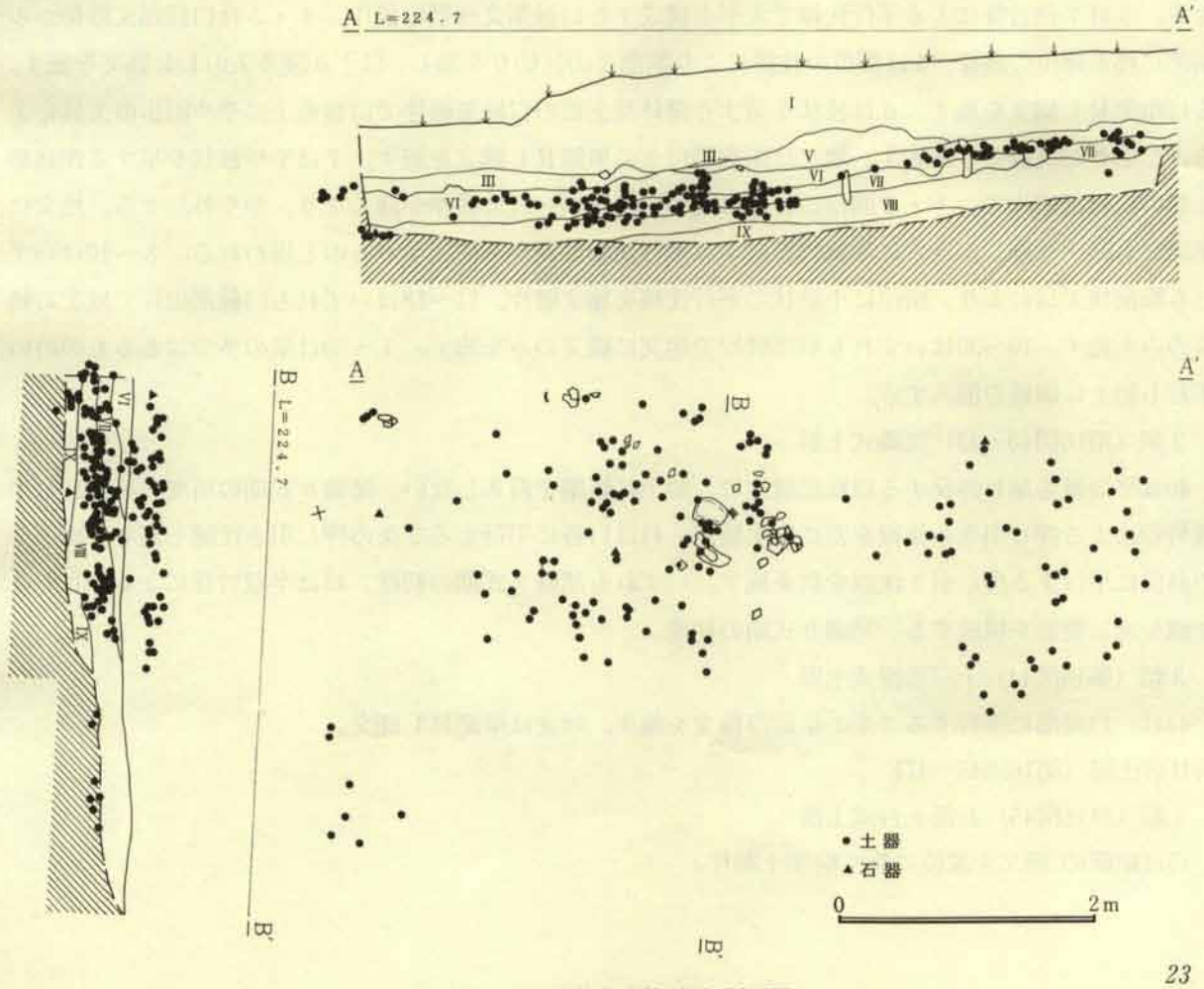
15は平坦面を持つ石製品。機能は不明。



第13図　住居址出土遺物・石器（2）

第２表　住居址出土石器観察表（第12・13図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重量	石　質	備　考
1	48	1号住居址炉	石鏃	完形	2.0	1.3	0.5	0.8	黒曜石	
2	49	P 8	石鏃	ほぼ完形	(3.1)	2.4	0.8	3.6	デイサイト	
3	5	覆土	打製石斧	完形	11.6	8.0	2.1	201	デイサイト	
4	1	覆土	打製石斧	完形	10.3	7.1	1.8	126	デイサイト	
5	3	覆土	打製石斧	完形	9.4	6.2	1.7	131	デイサイト	
6	2	覆土	打製石斧	完形	11.5	6.7	1.5	155	輝緑岩	
7	4	覆土	打製石斧	基部・刃部欠	(6.7)	4.2	2.1	69	デイサイト	
8	85	34	凹石	完形	9.0	6.6	3.8	204	粗粒輝石安山岩	
9	87	周辺	凹石	完形	9.3	8.0	5.6	584	粗粒輝石安山岩	
10	86	周辺	凹石	ほぼ完形	10.4	8.0	4.5	628	粗粒輝石安山岩	
11	88	覆土	凹石	ほぼ完形	9.1	9.1	2.8	290	粗粒輝石安山岩	
12	119	覆土	磨石	完形	11.8	4.2	3.2	253	砂岩	
13	162	39	石皿	完形	26.4	22.8	8.6	5537	粗粒輝石安山岩	
14	165	5	石皿？		31.6	9.6	4.2	2136	緑色片岩	
15	118	覆土	石皿？	1/2	23.5	(12.5)	2.8	1034	輝石安山岩	



第14図　II区遺物集中箇所平・断面図

第５節　遺構外出土縄文時代遺物

縄文土器（第15～45図）

遺構外からは縄文時代の後期中葉の加曽利Ｂ式を中心に、前期黒浜・有尾式期から後期安行２式期の土器が検出された。

出土土器は概ね以下の分類に従って整理した。

第Ⅰ群土器　縄文時代前期
第Ⅱ群土器　縄文時代中期
第Ⅲ群土器　縄文時代後期初頭（称名寺式土器）
第Ⅳ群土器　第Ⅲ群土器に併行する異系統土器（三十稲葉式土器）
第Ⅴ群土器　縄文時代後期前葉～中葉（堀之内１式土器～加曽利Ｂ式土器））
第Ⅵ群土器　縄文時代後期後葉（安行式土器）

第Ⅰ群土器（第15図１～第16図44）

１類（第15図１～第16図39）黒浜・有尾式土器

１は小波状を呈する深鉢型土器の口縁部破片で口唇部に向かいテーパー状に器厚が薄くなる。文様は半裁竹管による平行沈線を集合させ、菱形を構成する。２は平口縁を呈する深鉢型土器の口縁部破片で、半裁竹管による平行沈線を集合させ、菱形を構成する。器厚は１同様口唇部に向かいテーパー状に薄くなる。３は半裁竹管による平行沈線で菱形を構成する口縁部文様帯の破片。４・５は口縁部文様帯から胴部に移る部位の破片。４は横位の沈線により胴部との区切りを施し、以下０段多条のＬＲ縄文を施す。５は単節ＲＬ縄文を施す。６は波状を呈する深鉢型土器の口縁部破片で口唇直下にやや幅広の工具による押し引きの沈線を２条施す。地文は閉端環付きの単節ＲＬ縄文を施す。７はやや波状を呈する深鉢型土器の口縁部破片で、１・２同様口唇部に向かいテーパー状に器厚が薄くなり、やや外反する。地文に単節ＲＬ縄文を施し、さらに半裁竹管による平行沈線で菱形を構成するものと思われる。８～10はいずれも櫛歯状工具により、横位に小波状の平行沈線を施す破片。11～18はいずれも口縁部破片で地文に縄文のみを施す。19～39はいずれも胴部破片で地文に縄文のみを施す。１～39は量の多少はあるもののいずれも胎土に繊維を混入する。

２類（第16図40～43）諸磯式土器

40は平口縁を呈し外反する口縁部破片で、胎土に繊維を混入しない。諸磯ａ式期の所産。41・42は半裁竹管による押し引きの沈線を密に施す破片。41は口唇に平行する２条の押し引き沈線を施し、以下やや斜位に平行する押し引き沈線を数条施す。いずれも諸磯ａ式期の初産。43は半裁竹管による押し引き沈線を施し菱形を構成する。諸磯ｂ式期の初産。

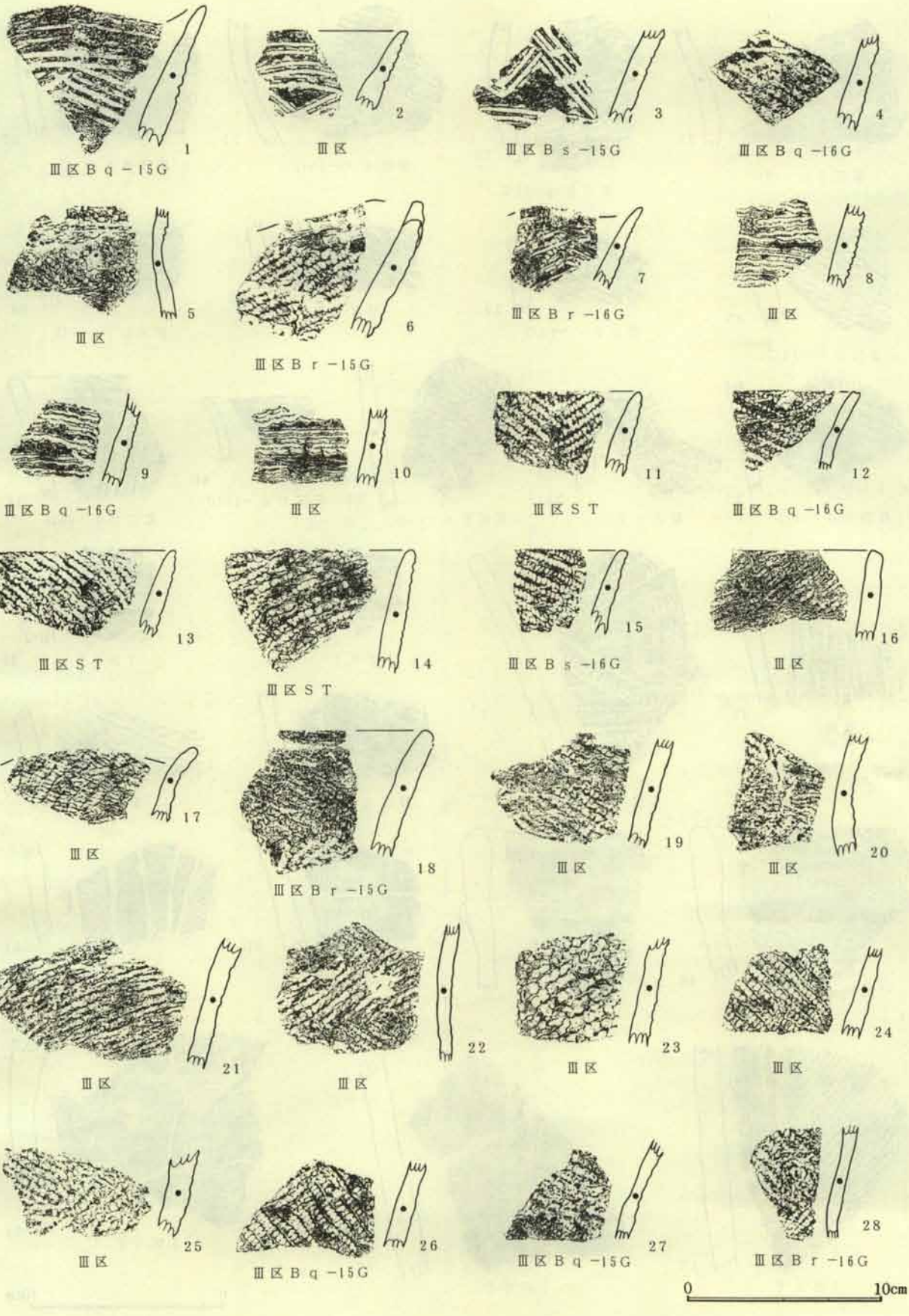
３類（第16図44）十三菩提式土器

44は、口縁部に平行する２条の結節浮線文を施す。地文は単節ＲＬ縄文。

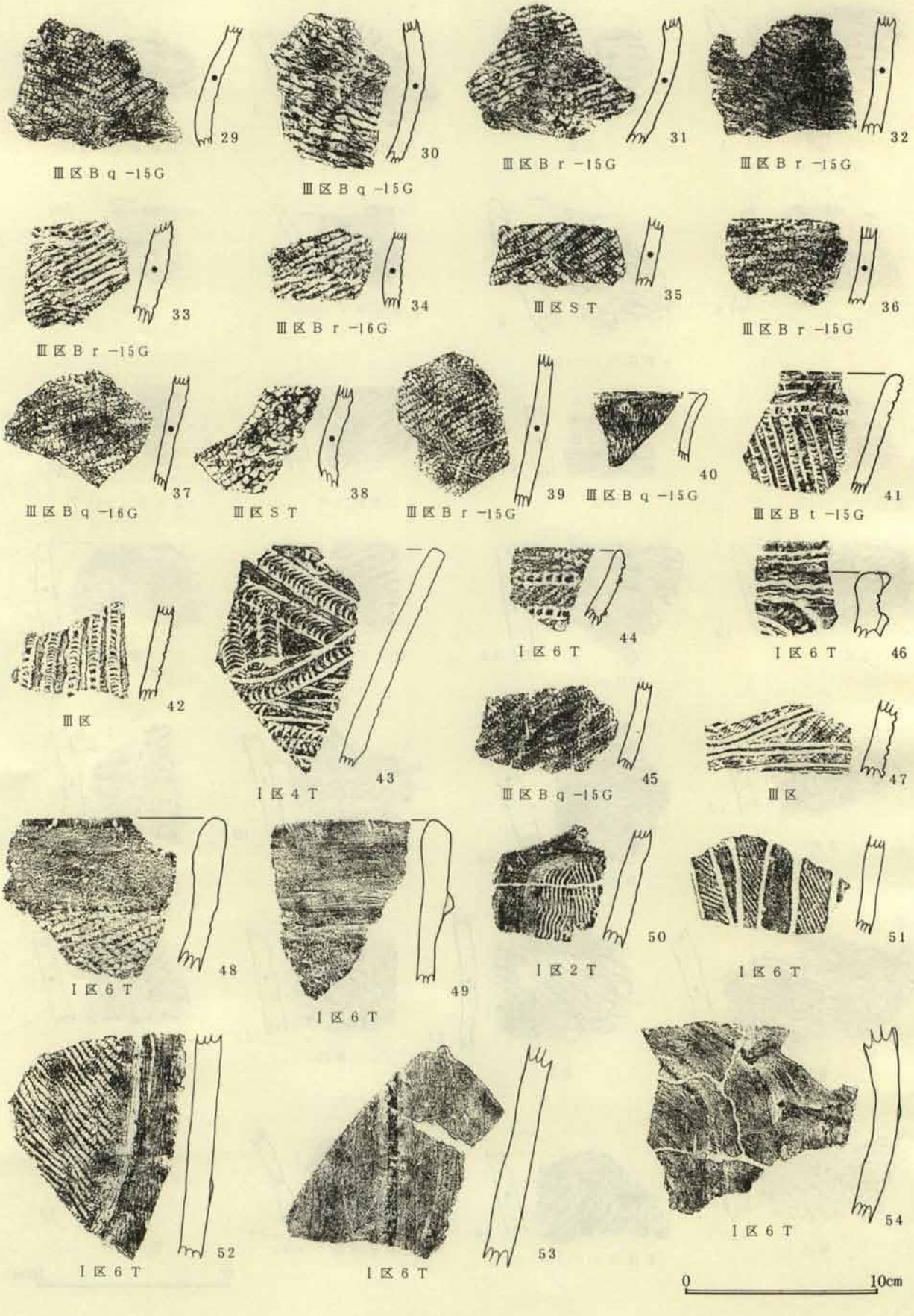
第Ⅱ群土器（第16図45～47）

１類（第16図45）五領ヶ台式土器

45は結節RL縄文を縦位に施す胴部土器片。



第15図　遺構外出土遺物・土器（1）



第16図　遺構外出土遺物・土器（2）

2類（第16図46・47）阿玉台式土器

46は口縁部破片で、口唇部に押し引きの沈線を施し、口唇部直下に横位の隆帯を貼付、さらに隆帯により円形の貼付文を施す。この円形の隆帯上には爪形の連続刺突を施す。47は地文に単節ＬＲ縄文を施し半裁竹管による平行沈線を横位及び斜位に施す。46・47いずれも雲母を胎土に混入する。

3類（第16図48～54）加曽利Ｅ式土器

48は口縁部破片で幅広に無文部を口唇下に持ち以下単節ＬＲ縄文を羽状に施す。49は口唇下に幅広の無文部を持ち、隆帯貼付により無文部との区切りを作出し、以下条線を縦位に施す。50は低い隆帯により楕円区画を作出し、区画内を櫛歯条の工具による波状の条線を充填する。51は沈線区画された縦位の磨消縄文を充填する。52は隆起線による区画を施し、単節ＲＬ縄文を充填する。52・53は微隆帯により文様を施す破片。

第Ⅲ群土器（第17図55～69）称名寺式土器

1類（第17図55～57）　太い沈線で区画するもの。

55～57は太い沈線により方形もしくはＪ字状文等を施す口縁部破片。

2類（第17図58～69）　太い沈線で区画し区画内を列点で埋めるもの。

58～69は太い沈線で区画し、区画内を列点で充填する破片。

第Ⅳ群土器（第17図70～72）三十稲葉式土器

70は列点を縦位方向に整然と充填する土器破片。71は内傾気味の胴部破片で隆帯で区画を施し、太い沈線及び列点を施す。列点は縦位方向に整然と充填される。72は70・71同様縦位方向に整然と列点を充填する胴部破片。

第Ⅴ群土器（第18図～第44図）堀之内式土器～加曽利Ｂ式土器

1類（第18図73～82）　堀之内1式土器の精製土器を一括する。

Ａ種（第18図73～76）　地文に縄文を施し、沈線で主文様を描くもの。

73は口唇下に太い沈線を1条横位に施し、以下地文に単節LR縄文を施し、沈線により縦位に文様を施す。74～76は地文に縄文を施し沈線により縦位に文様を施す胴部破片。地文は74・76が単節ＬＲ縄文、75は単節ＲＬ縄文が施される。

Ｂ種（第18図77～81）　半裁竹管状工具により、渦巻き文及び斜行文。弧線文を描くもの。

77はやや波状を呈する口縁部破片で口唇下には沈線が1条巡り、以下隆帯を縦位に貼付し区画する。この区画に沿って沈線により文様が描かれる。78は波状を呈する口縁部破片。円孔及び沈線・隆帯により人面を構成する。右目は円孔を穿ちそれを沈線により円形に囲み表現される。左目は小さな円形刺突とそれを囲む沈線により横長の楕円形に表現される。

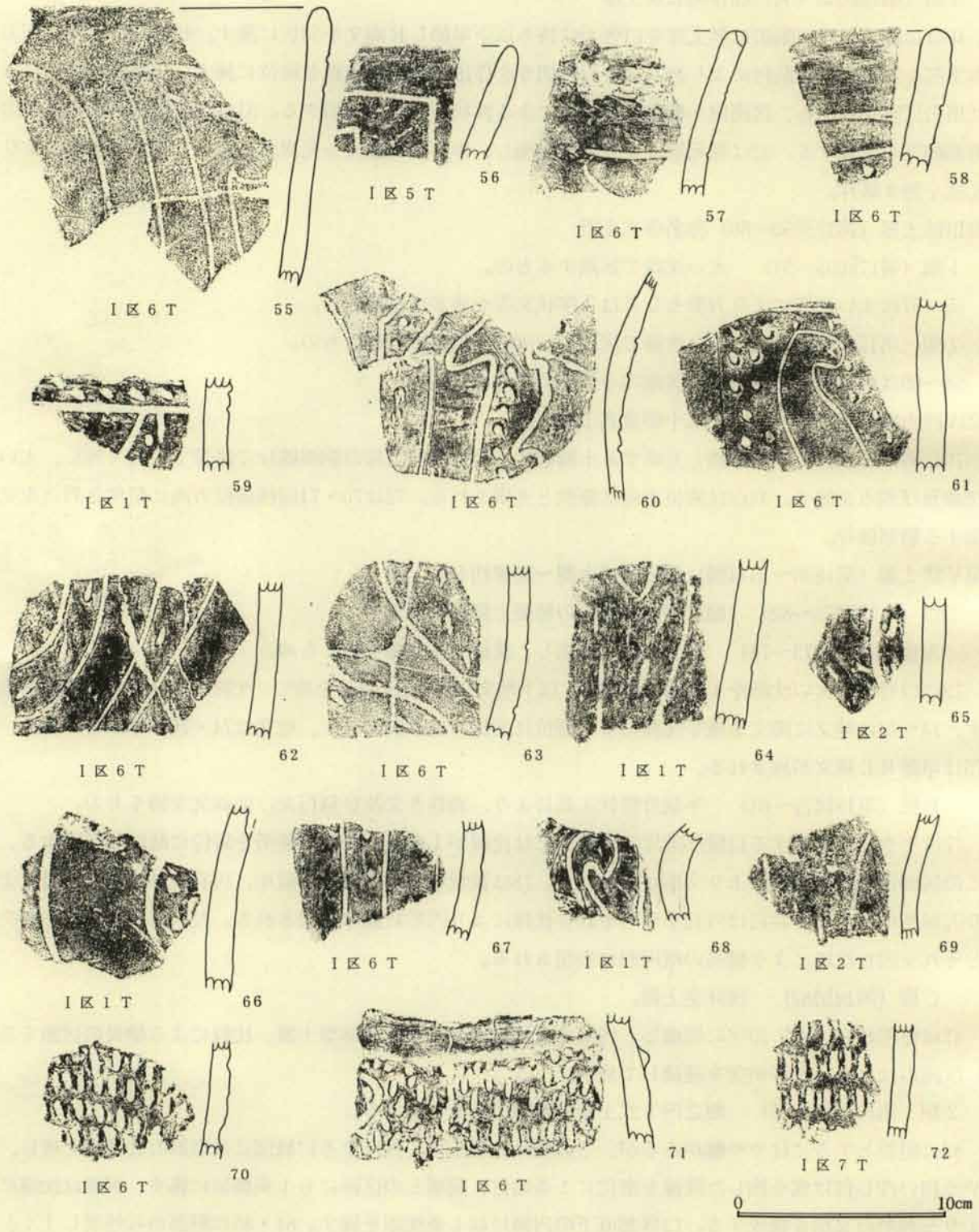
Ｃ種（第18図82）　浅鉢型土器。

82は体部から「く」の字に屈曲し、内傾する口縁部を有する浅鉢型土器。沈線による横長の区画を施し区画内は小さい円形刺突を連続して施す。

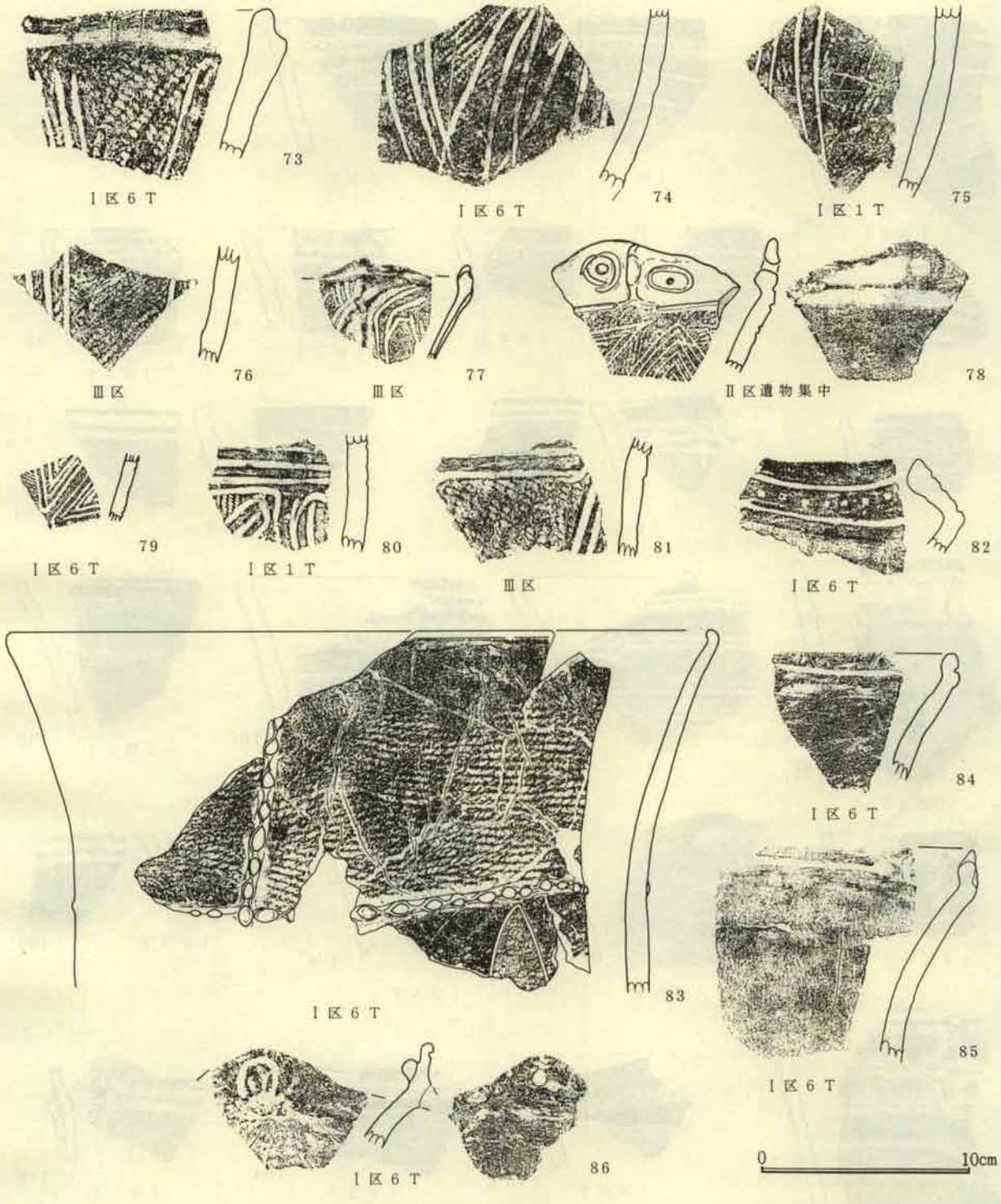
2類（第18図83～86）　堀之内1式土器の粗製土器を一括する。

83は粗製とするにはやや難があるが、この類に分類した。外反する口縁部には単節ＬＲ縄文を施し、やや粗い押し付け痕を施した隆線を縦位に1条貼付、胴部との区画にも1条横位に施す、胴部は沈線により三角形の文様を構成する。口唇部直下の内面には1条沈線を施す。84・85は胴部から外反し「く」の字に屈曲し口唇部にいたる口縁部破片で、口唇下にはいずれも口唇と平行する沈線を1条施すなど73

の土器の地文の縄文及び沈線文を無文化した文様構成と思われる。86は波状を呈する口縁部破片で波頂部に円孔及びそれを囲む沈線による円形文を施す。また、この円孔下の外面には橋状の把手が、内面には稜が作出される。



第17図　遺構外出土遺物・土器（3）



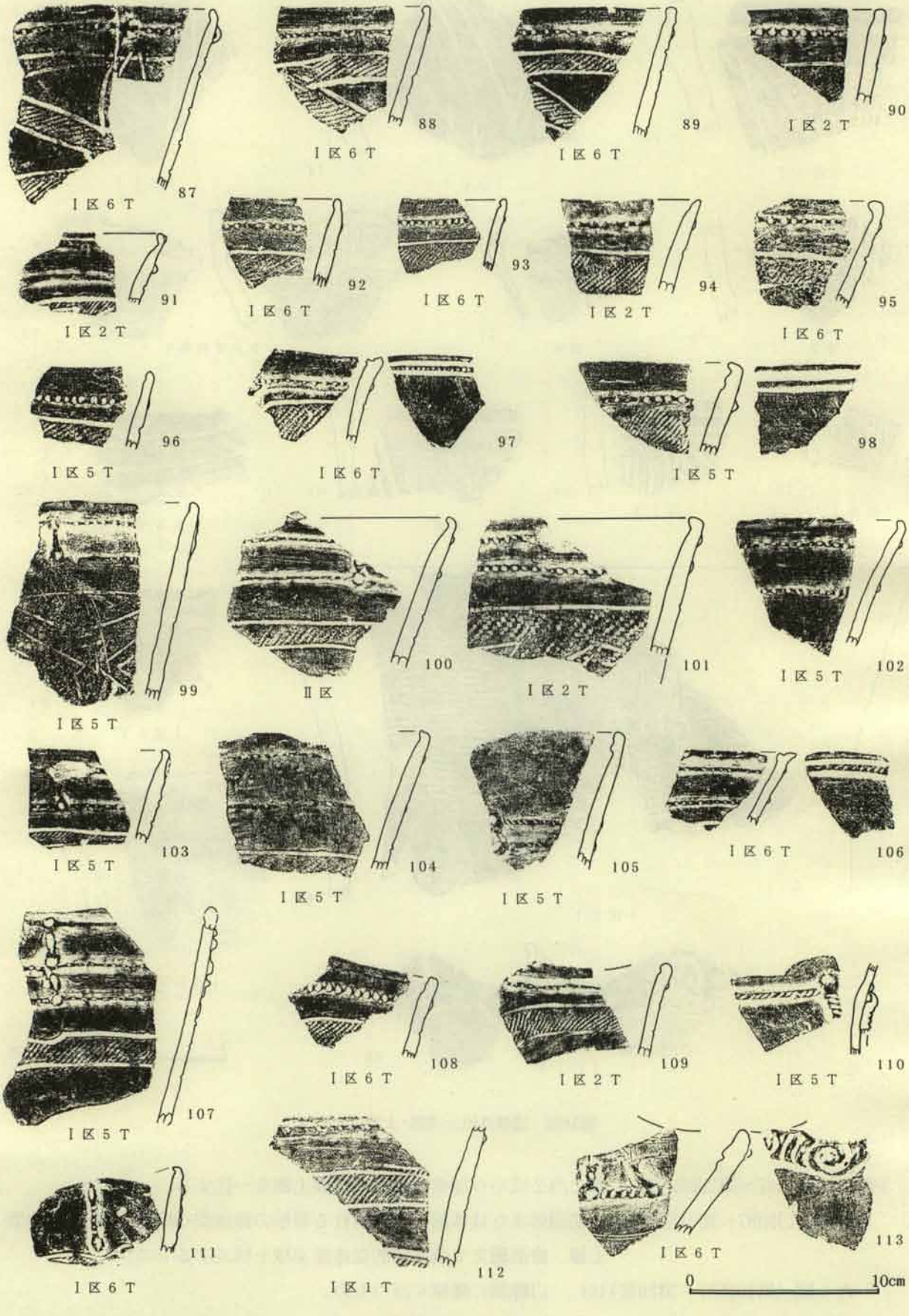
第18図　遺構外出土遺物・土器（４）

３類（第19図87～第29図299）　堀之内２式から加曽利Ｂ式の精製土器を一括する。

Ａ種（第19図87～第21図147）　朝顔形または体部でやや括れる器形の深鉢型・鉢型土器及び浅鉢型土器。磨消縄文で幾何学的な体部文様を構成するもの。

Ａ１種（第19図87～第20図115）　口縁部に隆線を持つもの。

87は隆線を施し、さらに隆線上に「８」の字状の貼付を施す。体部は沈線で区画された単節ＲＬ縄文



第19図　遺構外出土遺物・土器（5）

の磨消縄文により三角形を基本とした幾何学的な文様を構成する。88～90・92～98は口縁部に隆線を施し、体部は磨消縄文により幾何学的文様を施す。88・89・93・95・98は単節ＲＬ縄文、90～92・94・96・97は単節ＬＲ縄文が施される。91は口縁部に隆線を２条施し、体部は単節ＬＲ縄文による磨消縄文で文様が構成される。99は口縁部に２条隆線を施し、この２隆線間に縦位の間延びした「８」の字状の貼付を施す。体部は沈線により幾何学的文様を施すが施された縄文の原体は不明。100・103は口縁部に隆線を２条施し、やはりこの２隆線間に「８」の字状の貼付を施す。体部は単節ＬＲ縄文による磨消縄文を施す。101・102・104は２条の隆線を施し、体部には磨消縄文による文様を施す。101は単節ＬＲ縄文による磨消縄文、102・104は単節ＲＬ縄文による磨消縄文。105は２条の隆線を施し、「８」の字状の貼付を施すが、体部については不明。106も２条の隆線を施すが、体部については不明。107は３条の隆線を施し、この３隆線間に「８」の字状の貼付を施す。体部は単節ＬＲ縄文による磨消縄文を施す。108・109は１条の隆線を施し、体部に単節ＬＲ縄文による磨消縄文を施す。110は外反する体部破片であるが隆線を１条施し、円形の貼付をこの隆線上に施しさらにこの円形貼付から縦位に隆線を垂下させる。111はやや波状気味の口縁部破片で、波頂部に円形文を２個貼付、この間を隆線で結ぶ。間延びした「８」の字状貼付のように見える。112は口唇部に近い部位の破片であるが、隆線を貼付し以下単節ＲＬ縄文による磨消縄文を施す。

113は浅鉢型土器で隆線を２条施し、隆線間に「８」の字状貼付を施す。内面には沈線による渦巻き文を施す。

114・115は口縁部に隆線を施し「８」の字状の貼付を有するので本種に分類したが、隆線以下の文様の構成は異なる。小破片なので全体像は判然としないが、沈線を縦位に数条平行で密に施し、さらに横位に平行で幅広の平行な沈線を施す。縄文が施されない点と横位に数条施される密の沈線が幾何学的文様構成をとらない点で本種の他の土器とは異なる。

Ａ２種（第20図116～第20図123、第21図145、146）　口縁部の隆線を欠くもの。

116～123は口縁部破片である。いずれも沈線で区画される磨消縄文で幾何学的文様構成をとる。磨消縄文は117～120・123はいずれも単節ＬＲ縄文を、121・122は単節ＲＬ縄文である。

145は体部で括れ外反する口縁部を有する深鉢型土器で、口縁部の文様は幅広の横位の磨消縄文を３条施し、弧状にそれらを連結させる文様構成をとる。磨消縄文は単節ＬＲ縄文である。

146はやや内湾気味に立ち上がる深鉢型土器の口縁部破片で、沈線で区画する磨消縄文を横位に２条施し、その間を弧状に沈線で区画し磨消縄文を施す。

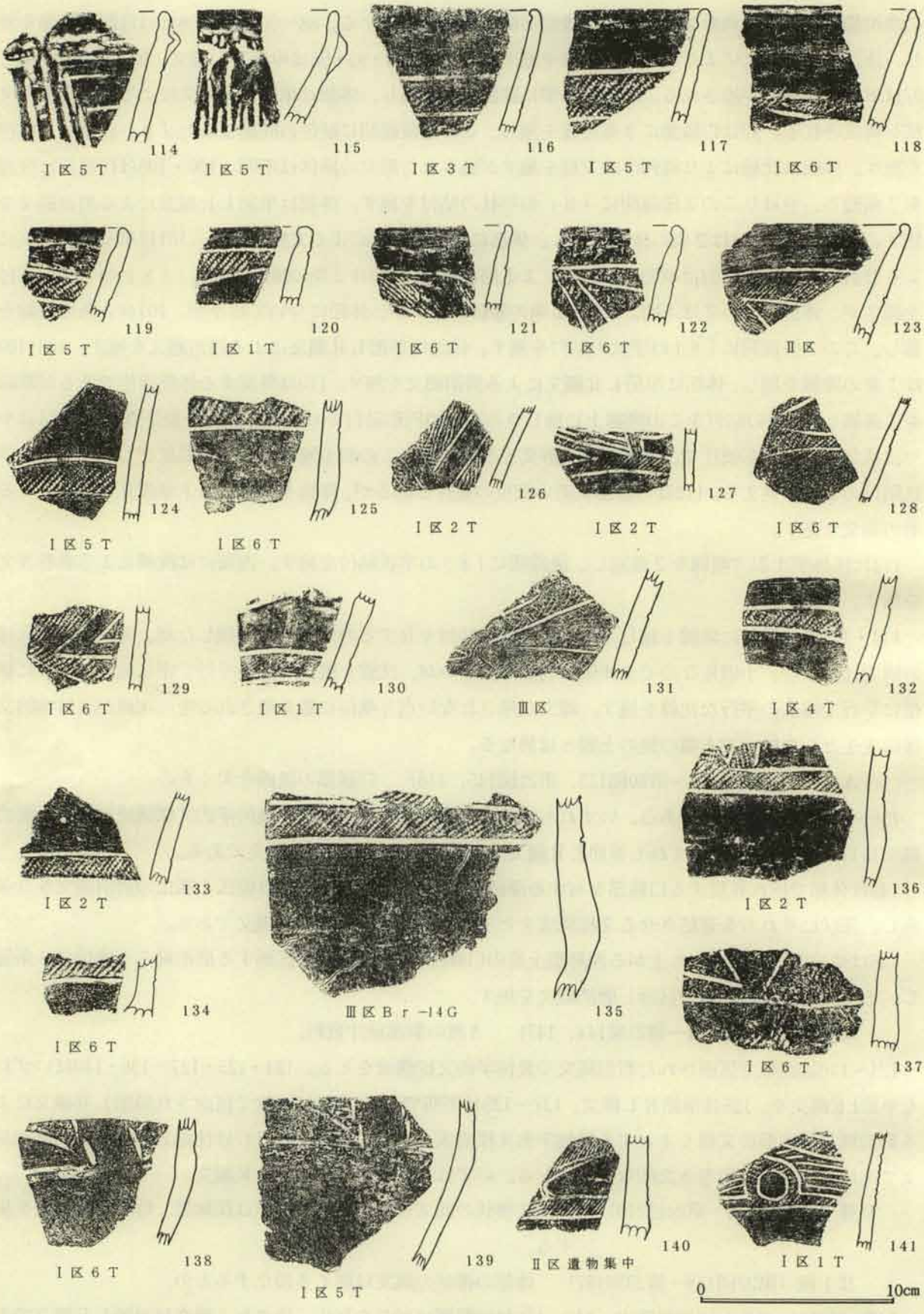
Ａ３種（第20図124～第21図144、147）　Ａ種の胴部破片資料。

124～140は沈線で区画された磨消縄文で幾何学的文様構成をとる。124・125・127～136・140はいずれも単節LR縄文を、126は単節ＲＬ縄文、137～139は不明である。141は沈線で区画され単節ＬＲ縄文による磨消縄文で円形の文様を主とする幾何学的文様構成をとる。142～144・147は沈線で区画された磨消縄文で幾何学的および渦巻き文的な構成をとる。いずれも磨消縄文は単節ＬＲ縄文。

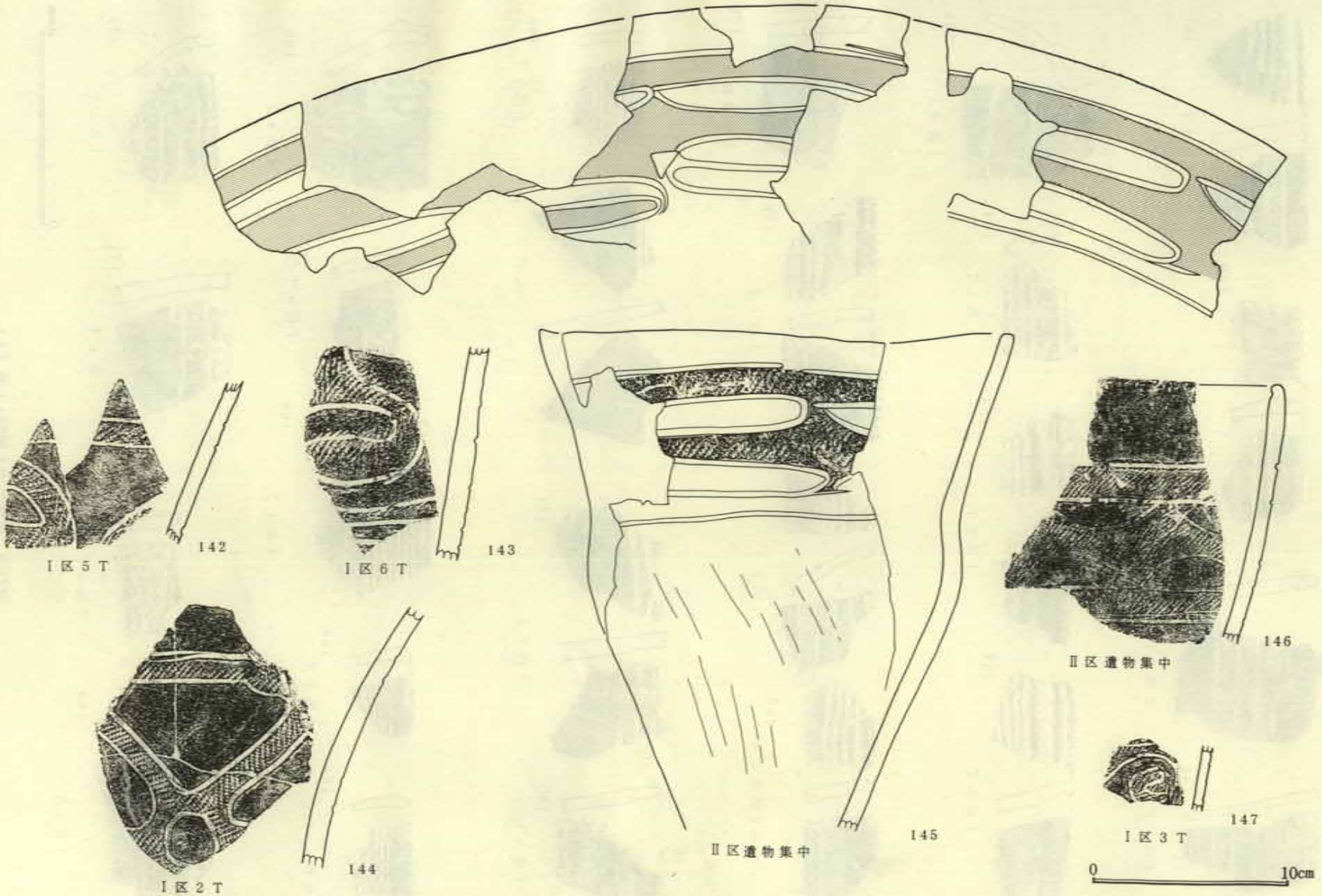
Ｂ種（第22図148～第24図210）　体部に帯状の縄文を持つもの。器形は深鉢型、鉢型、浅鉢型を呈する。

Ｂ１種（第22図148～第23図187）　体部の帯状の縄文は細く多段化するもの。

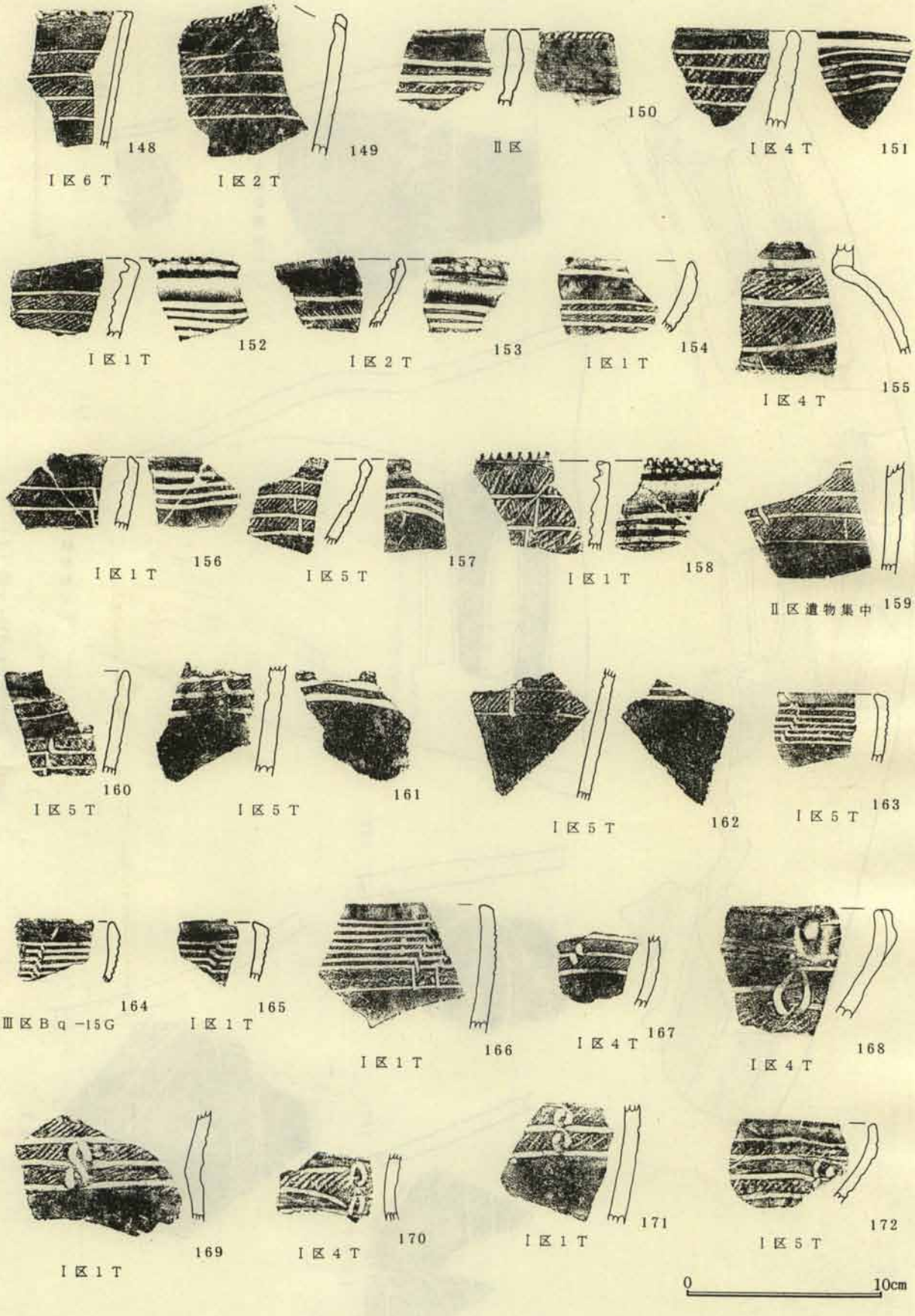
148～154はいずれも口縁部破片。148～150は口唇部に刻みを有す。施される縄文は単節ＬＲ縄文である。151～153は内面の口唇部に近い部位に１条沈線を施し、以下少し間隔をおいて多段の平行沈線を施



第20図　遺構外出土遺物・土器（6）



第21図　遺構外出土遺物・土器（7）



第22図　遺構外出土遺物・土器（8）

す。さらに152・153は口唇部に近い内面の沈線中に連続の円形刺突文を施す。施される磨消縄文は151・152は単節ＬＲ縄文、153は単節ＲＬ縄文である。154は内湾する口縁部破片で、口唇部に近い部位に１条沈線を施し、以下間隔をおいて単節ＬＲ縄文による多段化した帯状の縄文を施す。

155は内湾する体部を持ち、「く」の字に屈曲し立ち上がる。磨消縄文は単節ＬＲ縄文。

155～159は多段化する帯状の縄文に縦位の沈線で区切り文を施す。155～158は口縁部破片で、内面には多段化する横位の平行沈線を施す。158は口唇部に刻みを有し、内面の口唇部に近い部位に１状の沈線が施されさらにこの沈線中に連続刺突を施す。いずれも施される磨消縄文は単節ＬＲ縄文。

160～166は多段化する帯状縄文に施される区切り文が「Ｌ」字状・クランク状になるもの。160・161・163・165は帯状の縄文は単節LR縄文、152は単節RL縄文、156は結節ＲＬ縄文を施す。

167は区切り文が沈線と連結した刺突状なもので上下に向かい合う。帯状の縄文は単節ＬＲ縄文。

168～173は区切り文が対弧状を呈するもの。168～170・173は帯状の縄文は単節ＬＲ縄文。171・172は絡条体を施す。

174～180は区切り文が「の」の字状を呈するもの。施される帯状の縄文は175・176が不明である以外は単節ＬＲ縄文。

181～185は多段化する帯状の縄文が細く、口唇部に近い部位は縄文の代わりに連続の斜位の刻みが施されるもの。185は単節ＲＬ縄文が帯状の縄文に施される以外はいずれも単節ＬＲ縄文が施される。また186・187はこれらの胴部破片であると思われる。

188は斜位のやや大きめの刻みが施され帯状の縄文が多段化するもの。単節ＬＲ縄文が施される。

Ｂ２種（第23図188～193）　口縁部に幅広の縄文帯を持つもの。

189～193は幅広の縄文帯を持つもので、施される縄文は190・191・193が単節ＬＲ縄文、192は単節ＲＬ縄文、189は不明である。189・190には刻みを有する小突起が施される。

Ｂ３種（第24図194～200）　体部にやや幅広の帯状の縄文を持ち、一部弧状を呈するもの。

194は小波状を呈する深鉢型土器で、この波頂部に隆帯及び沈線・刺突で人面を構成する。人面は隆帯により鼻梁を、短沈線で眼孔を、さらに刺突を寄り目状にこの眼孔に施し瞳として表現する。また、顎に当たる部位には細い隆帯を貼付し、この隆帯上に斜めに刻みを施し髭として表現する。多段化するやや幅広な帯状の縄文はやや弧状を呈するクランク状の沈線により区切られる。帯状の縄文は単節ＲＬ縄文が施される。

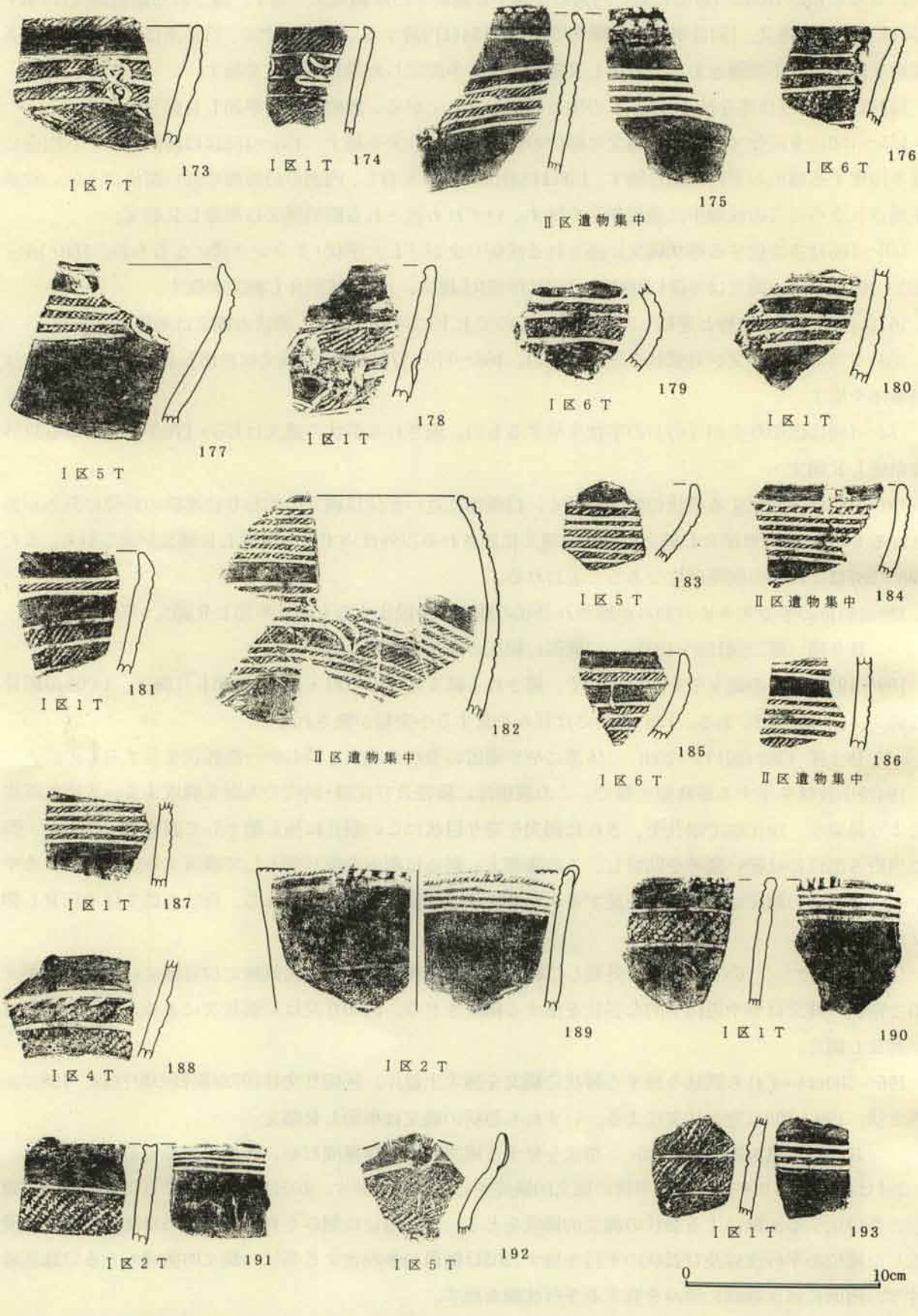
195は頚部で「く」の字に屈曲し外傾し口縁部文様帯を作りさらに内湾気味に口唇部にいたる深鉢型土器で帯状の縄文はやや幾何学的な弧状を呈する構成をとる。区切り文は対弧状文による。帯状の縄文は単節ＲＬ縄文。

196～200はいずれも弧状を呈する帯状の縄文を施す土器片。区切り文は197が縦長の短沈線、198は渦巻き状、199・200は対弧状文による。いずれも帯状の縄文は単節ＬＲ縄文。

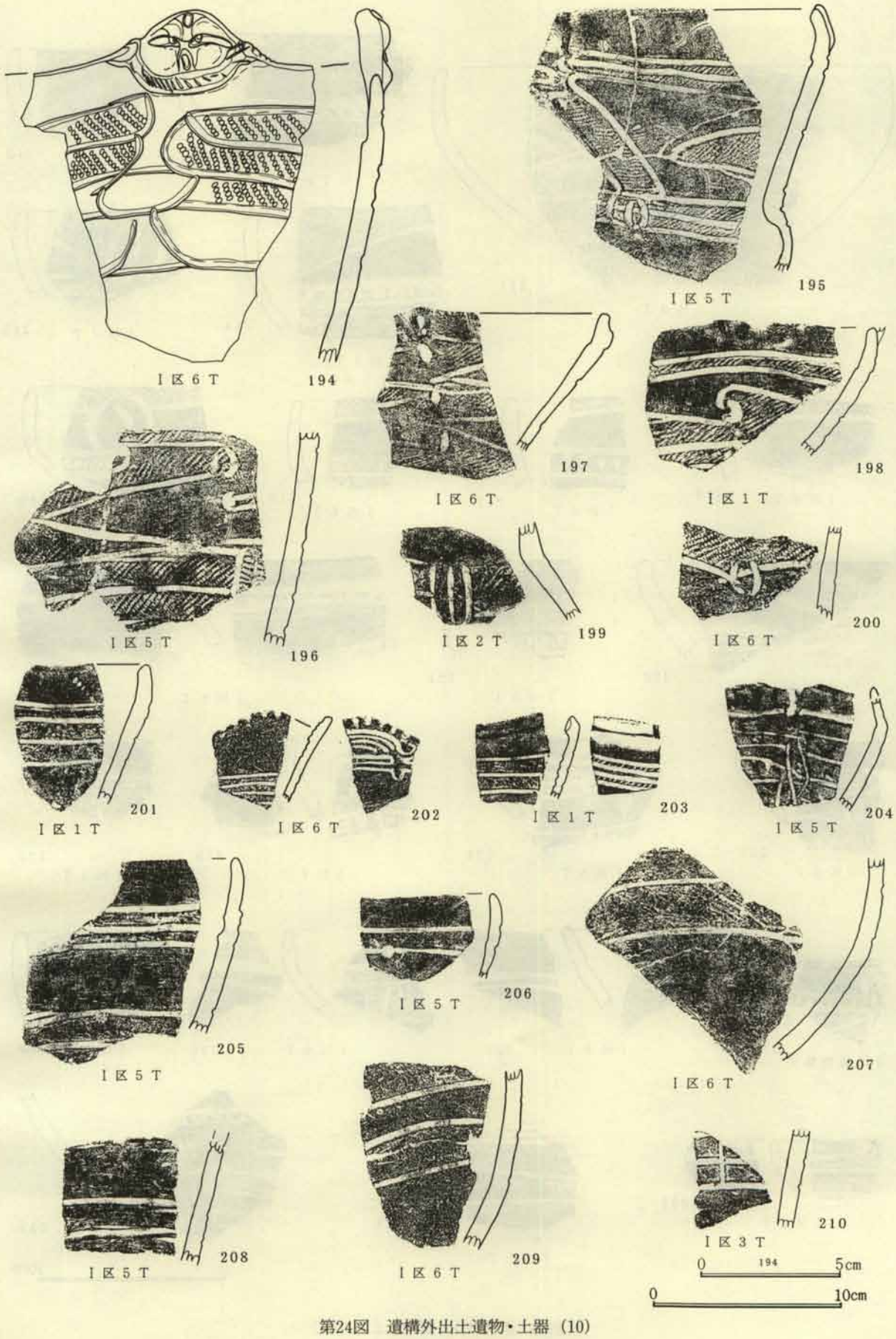
Ｂ４種（第24図201～210）　帯状を呈する縄文的な文様構成だが、縄文を欠くもの。

201は沈線により多段化する帯状の縄文的構成をとる口縁部破片。202は波状を呈する口縁部破片で細目の多段化する沈線による帯状の縄文的構成をとる。口唇部には刻みを有し、内面には沈線による多段化した横位の平行沈線及び弧状の平行を施す。203は細目の多段化する帯状の縄文的構成をとる口縁部破片で、内面には沈線間に刻みを有する平行沈線を施す。

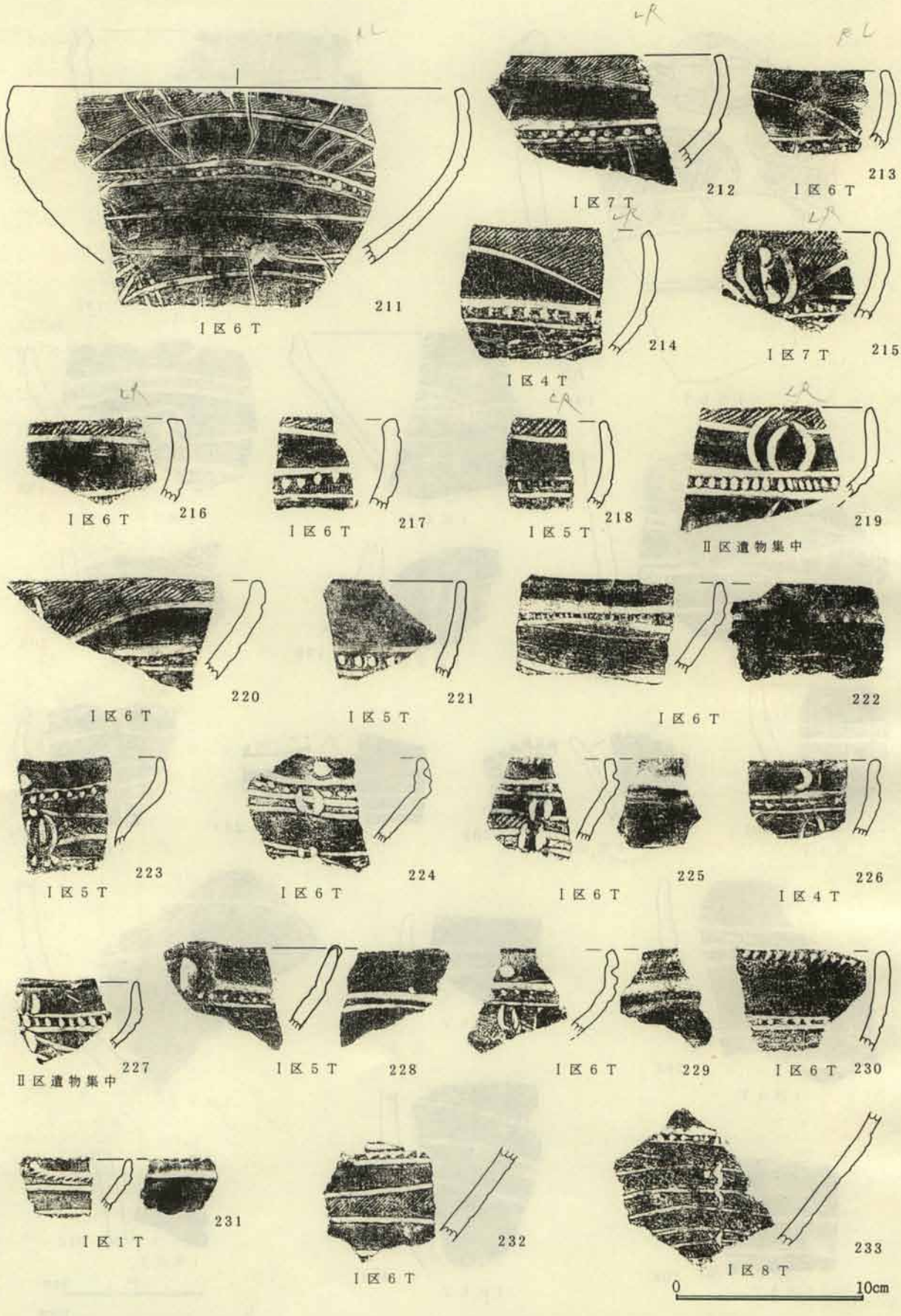
204は小波状を呈する口縁部破片で沈線により横位に帯状の縄文的文様構成をとり、やや乱れた対弧状



第23図　遺構外出土遺物・土器（9）



第24図　遺構外出土遺物・土器（10）



第25図　遺構外出土遺物・土器（11）

の沈線を区切り文とする。205は口縁部破片で沈線により横位の帯状の縄文的構成をとる。内面には稜を有する。沈線による区画内は縄文を意識してか、やや粗い感じを受ける未調整部位となる。206はやはり、沈線により区画された横位の帯状の縄文的構成をとり、縄文を欠く口縁部破片。この沈線上に刺突も施され、区画内は未調整部位として残る。161～164も沈線区画の帯状の縄文的構成をとり縄文を欠く破片。164には縦位の沈線による区切り文も施される。

C種（第25図211～第27図261）　磨消縄文を主文様とするもの。器形は深鉢型、鉢型、浅鉢型を呈する。体部算盤玉状を呈する土器も本種に含む。

C１種（第25図211～第26図243）　口縁部に沈線を持ち、沈線間に刻み文を持つもの。

211は内湾する浅鉢型土器の口縁部破片で、口縁部に単節RL縄文による幅広の磨消縄文を弧状に施し、以下平行沈線を施し、この沈線間に刻みを有す。さらに以下沈線により横位の平行沈線を施す。212～214・216～218・220も211と同様な文様構成をとる。212・214・216・218・220は単節ＬＲ縄文による磨消縄文、213は単節ＲＬ縄文による磨消縄文をそれぞれ施す。

215・219はこれらの文様構成にさらに対弧文による区切りを有し、磨消縄文は単節ＬＲ縄文による。

221・222は口縁部の幅広の磨消縄文を欠く構成をとる。

223～229は口縁部に磨消縄文を持たず、平行沈線を施しこの沈線間に刻みを持ち、以下磨消縄文・対弧状の区切り文を施す文様構成をとる。224･226～229には破片が小さいこともあるが縄文が認められないが、構成は磨消縄文的である。223・225は単節ＬＲ縄文による磨消縄文が施される。

230・231は口唇部に刻みを有し、以下平行沈線及び沈線間の刻みを施す。232・233は胴部破片であるが、刻みを有する平行沈線を施し、以下磨消縄文を構成する。さらに233は蛇行沈線を垂下させ、区切り文的な構成も見られる。

234は波状口縁の波頂部破片で文様構成は223等と同じ構成をとる。

235～237は224･226～229などと同じ文様構成のようであるが、明らかにこの磨消縄文的構成は、縄文施文を意識しており、粗い未調整部としてこれらを配する。

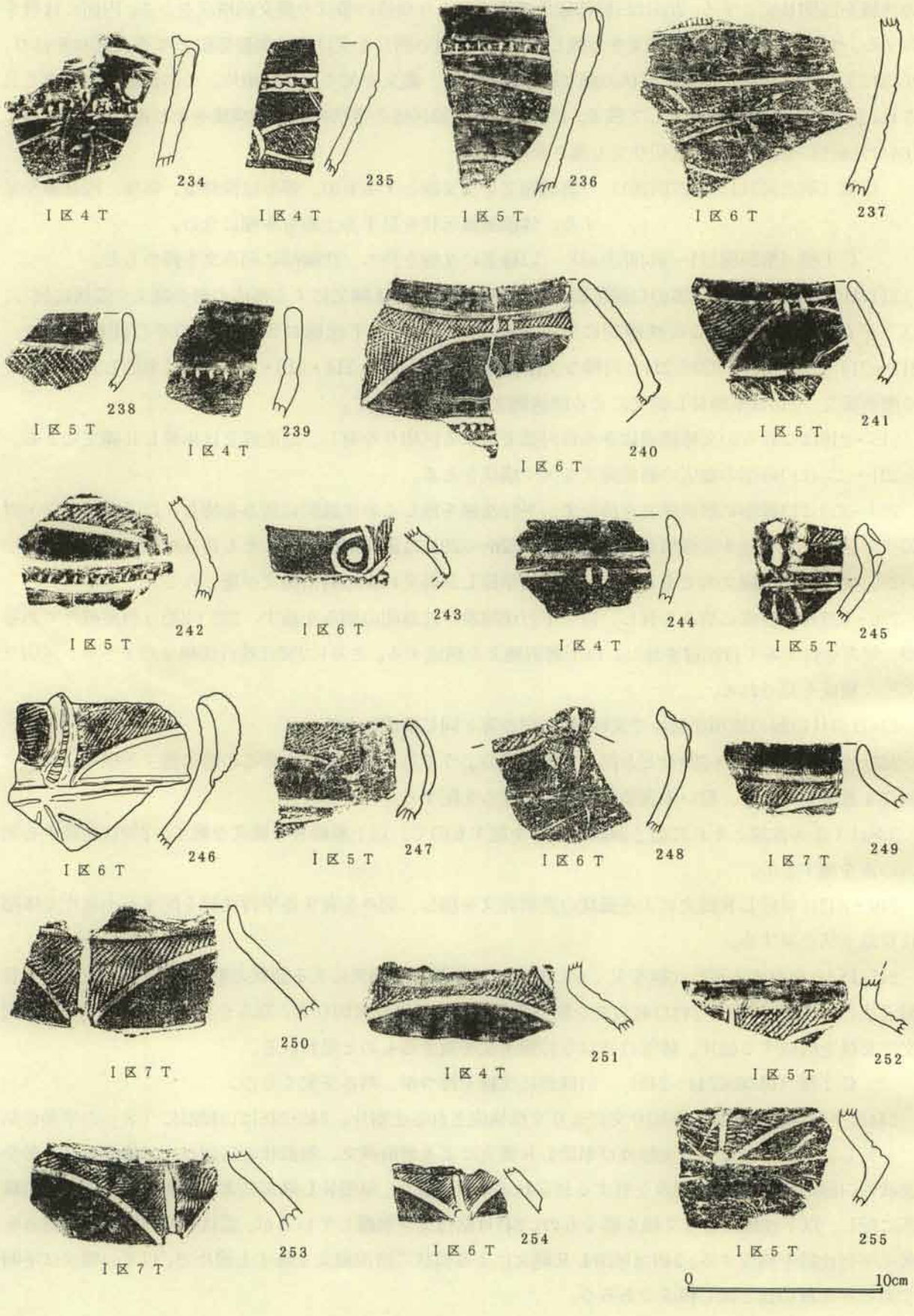
238は１条の沈線とそれに沿う連続の刻みを施すもので、以下単節ＲＬ縄文を施す。239は連続する刻みのみを施すもの。

240・242は単節ＬＲ縄文による弧状の磨消縄文を施し、刻みを有する平行沈線を配する土器片で体部は算盤玉状を呈する。

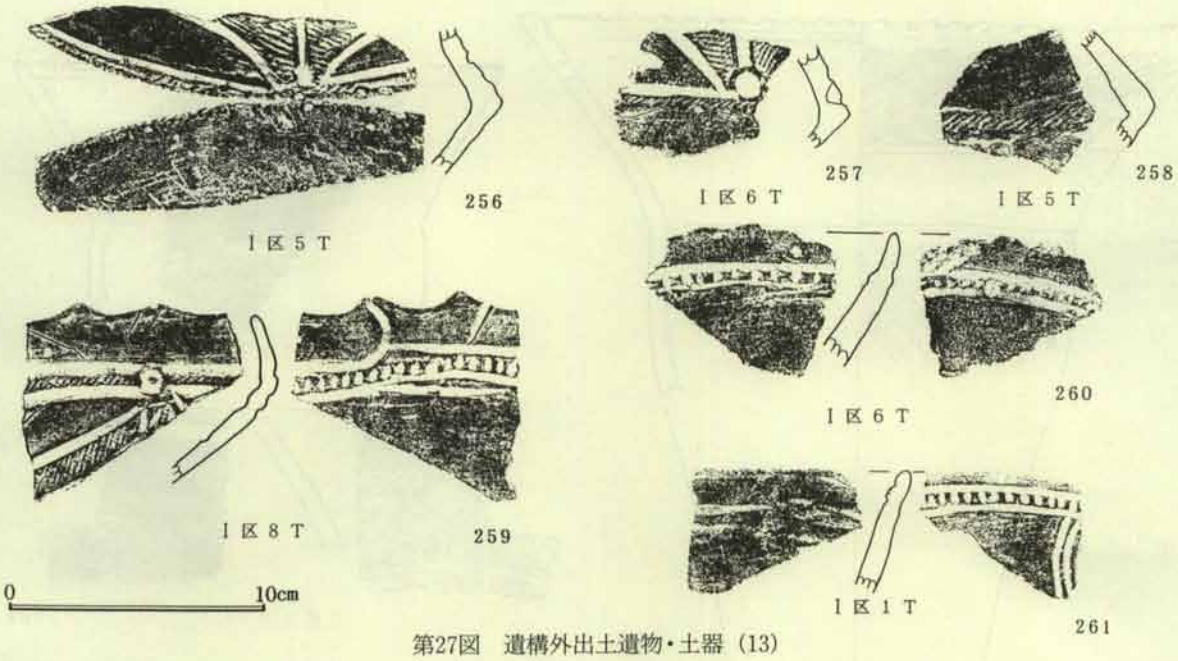
241は刻みを有する平行沈線を欠くが口縁部には単節ＬＲ縄文による弧状の磨消縄文を施す。これも算盤玉状の体部を呈する。243は刺突文を囲む円形の沈線により区切り文、刻みを有する平行沈線、磨消縄文で文様を構成する破片。体部はやはり算盤玉状を呈するものと思われる。

C２種（第26図244～249）　口縁部に沈線を持つが、刻みを欠くもの。

244は平行沈線と対弧の区切り文により文様構成される土器片。245･248は口縁部に「８」の字条の貼付を有し、刻みを欠く平行沈線及び単節ＬＲ縄文による磨消縄文、対弧状の区切り文で構成されるやや波状の口縁部破片。246は刻みを有する耳朶状の貼付を有し、単節ＲＬ縄文による磨消縄文を弧状に口縁部に配し、以下沈線により文様を描くもの。247は貼付文が剝離しているが、弧状の磨消縄文及び刻みを欠く平行沈線を構成する。249は単節ＬＲ縄文による弧状の磨消縄文を施す土器片で、以下の構成は不明であるが本種の他と同じ構成であろう。



第26図　遺構外出土遺物・土器（12）



第27図　遺構外出土遺物・土器（13）

C３種（第26図250～第27図258）　C種の胴部破片で、磨消縄文で曲線的な文様を描くもの。

250～258は磨消縄文により弧状の文様構成をとる胴部破片でいずれも算盤玉状の体部を呈する。250～252・255・256・258は単節ＬＲ縄文による磨消縄文を、253・254・257は単節ＲＬ縄文による磨消縄文をそれぞれ施す。「く」の字状の体部で集合する磨消縄文の交点には円形刺突が施される。

C４種（第27図259～261）　C１種の文様構成を土器内面に持つ浅鉢型土器。

259～261は刻みを有する平行沈線を土器内面に有する土器片で、いずれも浅鉢型土器か。259は２単位の近接する山形の突起を口唇部に持つ。外面は磨消縄文による幾何学的文様を施す。260は内外面ともに刻みを有する平行沈線を施す。261の外面は無文。

D種（第28図262～第29図299）　沈線を主文様とするもの。器形は深鉢型、鉢型を呈する。

D１種（第28図262～第29図297）　矢羽根状の沈線を持つもの。

262は内湾する胴部から「く」の字に屈曲し大きく外傾する口縁部を有する深鉢型土器で口唇部には連続する円形の刺突文を有する。口縁部は沈線により矢羽根状の文様構成をとり、沈線により区画し以下幅広の無文部を頚部の屈曲部まで持ち、頚部で再び沈線により区画し以下沈線による格子目文を施す。補修孔も認められる。

263・265は262と同様の文様構成をとる口縁部破片。

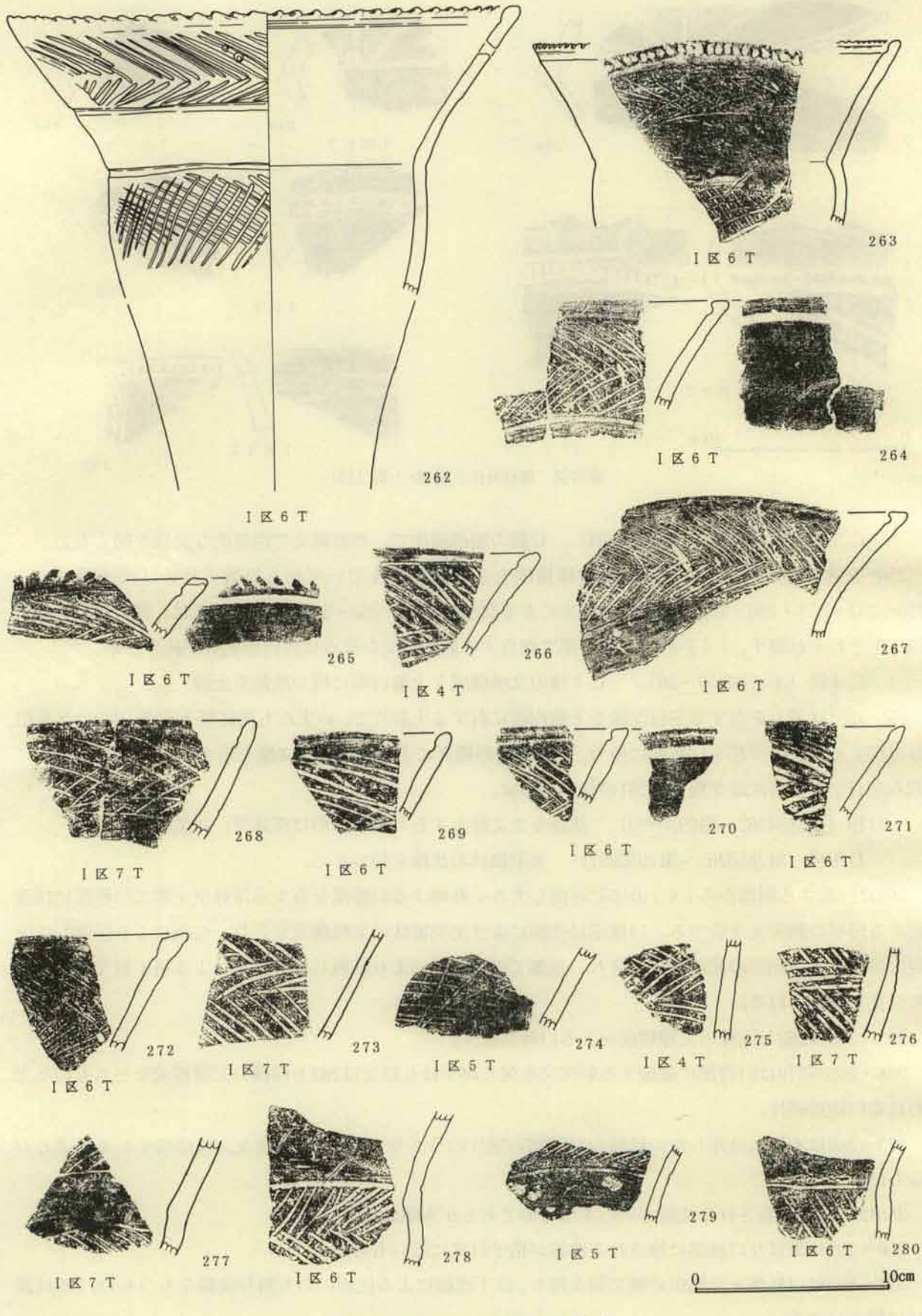
264・266～272は口唇部に連続する刺突文を欠くがやはり以下は262と同様の文様構成をとるものと思われる口縁部破片。

273～288は本種に分類した口縁部及び胴部の破片のうちやはり262と同様な文様構成をとると思われるもの。

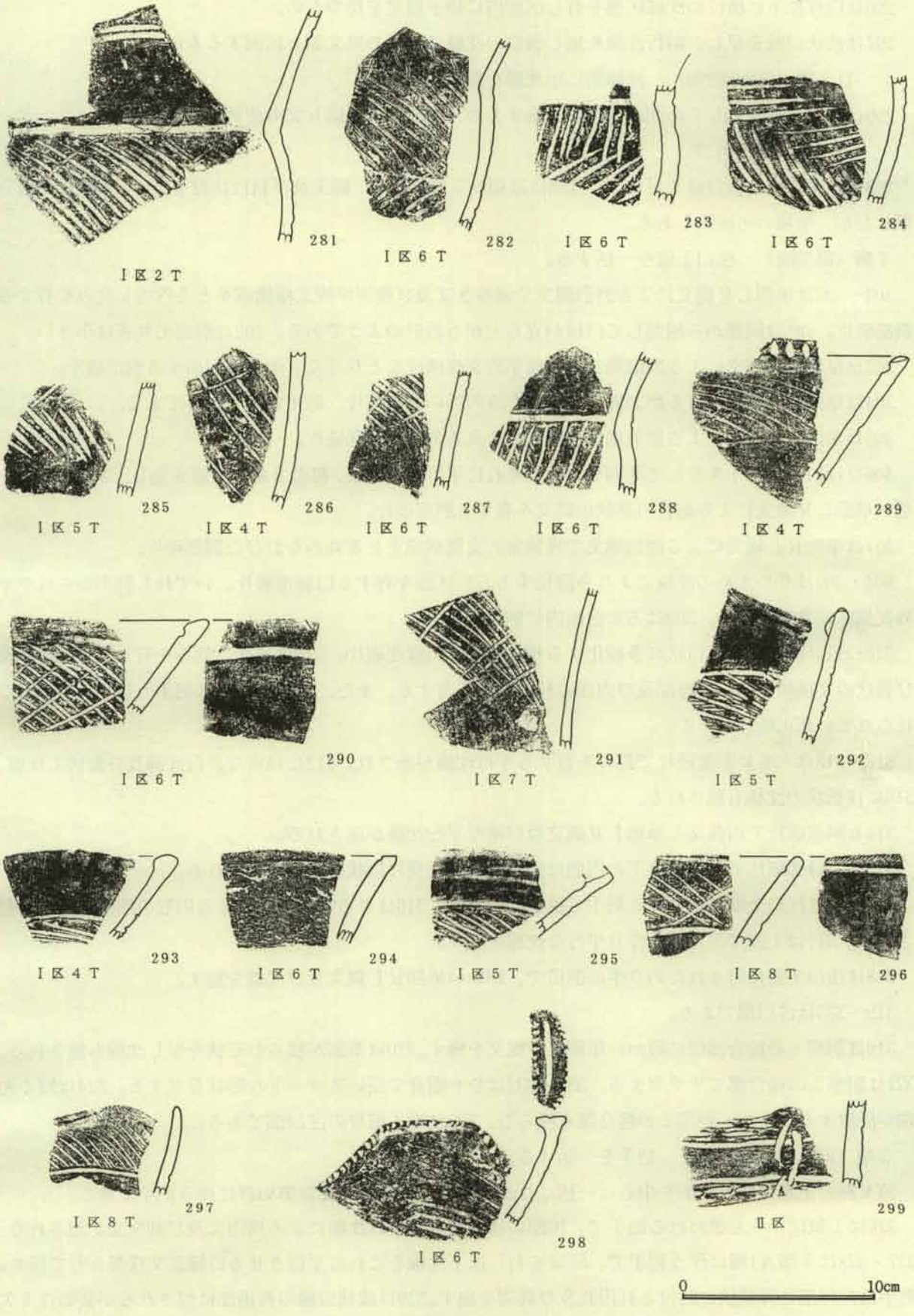
289は口縁部に施される沈線が斜行するものであるが本類に分類した。

290・291はやはり口縁部に施される沈線が格子目文に近いもの。

292～295は口唇部下に幅広の無文帯を持ち、以下沈線による区画ののち斜行沈線をもつもの。292は波状口縁を呈する。



第28図　遺構外出土遺物・土器（14）



第29図　遺構外出土遺物・土器（15）

296は口唇部下に横位の沈線区画を有し区画内に格子目文を持つもの。

297は波状口縁を呈し、斜行沈線を施し横位の沈線で以下の無文部と区画するもの。

D２種（第29図299）　沈線間に短沈線を施すもの。

299は平行沈線を施しこの間に短沈線を施すもの、対弧状の区切り文も認められる。

D３種（第29図298）

298は角頭状の波状口縁を呈し、口唇部には刻みを施し、以下縄文及び斜行沈線を施す。本種に一応分類したが、他種の可能性もある。

４類（第30図）　注口土器を一括する。

300～302は単節ＬＲ縄文による磨消縄文で渦巻き文及び幾何学的文様構成をとる内湾し丸みを有する胴部破片。301は胴部から屈曲して口縁が立ち上がる器形のようである。302は胴部の丸みは小さい。

303は単節ＬＲ縄文による磨消縄文で幾何学的文様構成をとり「く」の字に屈曲する胴部破片。

304は単節ＲＬ縄文による磨消縄文を施し丸みの強い胴部破片。把手が付くようである。

305は単節ＬＲ縄文による磨消縄文を施しやや丸みのある胴部破片。

306はは口唇部に１条そして間隔をおいてそれに平行して１条、都合２条の隆線を施し、さらに間隔を置き単節ＬＲ縄文による細目の帯状の縄文を有する胴部破片。

307は単節ＲＬ縄文による磨消縄文で幾何学的文様構成をとる丸みをおびた胴部破片。

308・309はやや太めの沈線により多段化する方形区画を有する口縁部破片。いずれも胴部からはやや外反気味に立ち上がる。309は方形区画内に刺突を施す。

310・311は内面に受け口状に多段化する稜を有する口縁部破片。310は外面に刻みを有する平行沈線及び弧状の文様構成で、口唇部及び内面の稜に刻みを有する。また、口唇部からは把手もしくは突起がつけられていた可能性もある。

312・313はともに胴部破片で刻みを有する平行沈線が施され。312には密な平行沈線及び弧状の沈線、313には弧状の沈線も施される。

314も胴部破片で円弧文と単節ＬＲ縄文及び密な平行沈線が施される。

315は口縁部破片で口唇部直下の内側に刻みを持った受け口状の隆帯が施される。

316・317は注口土器に付される把手で橋状に付され、316はさらに刺突を有する円形の部位が上部に付される。317は上部で平坦部を作り平行な沈線を施す。

318は注口土器に付された釣り手の部位で、細かい単節ＲＬ縄文及び沈線を施す。

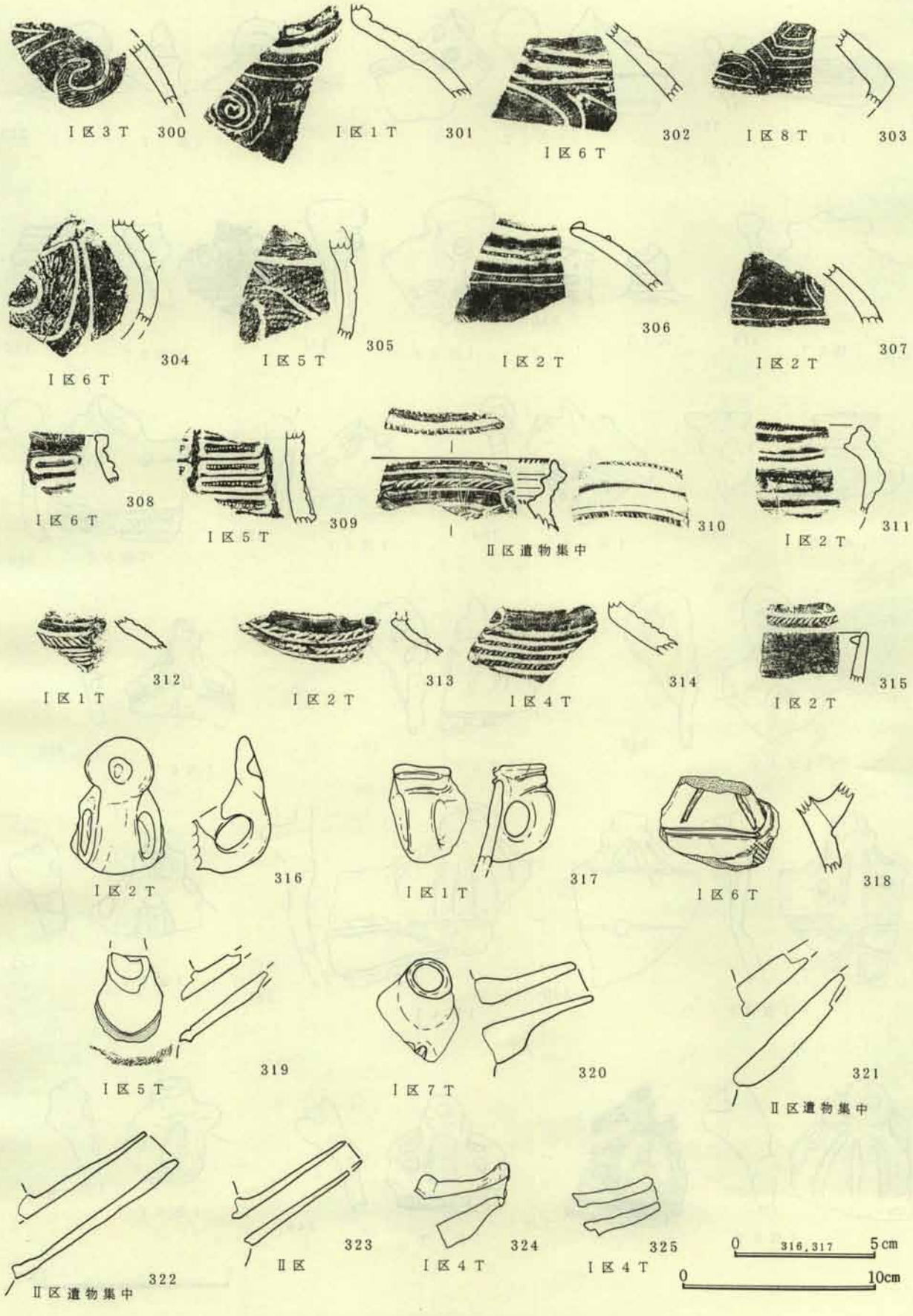
319～325は注口部である。

319は胴部との接合部位に細かい単節ＲＬ縄文を施す。320は基部が脹らむ形状を呈し沈線も施される。321は胴部との接合部でやや窄まる。332・333はやや細身で長いスマートな形状を呈する。324は短く先端が肥厚する。また、胴部との接合部も脹らむ。325は短く細身の注口部である。

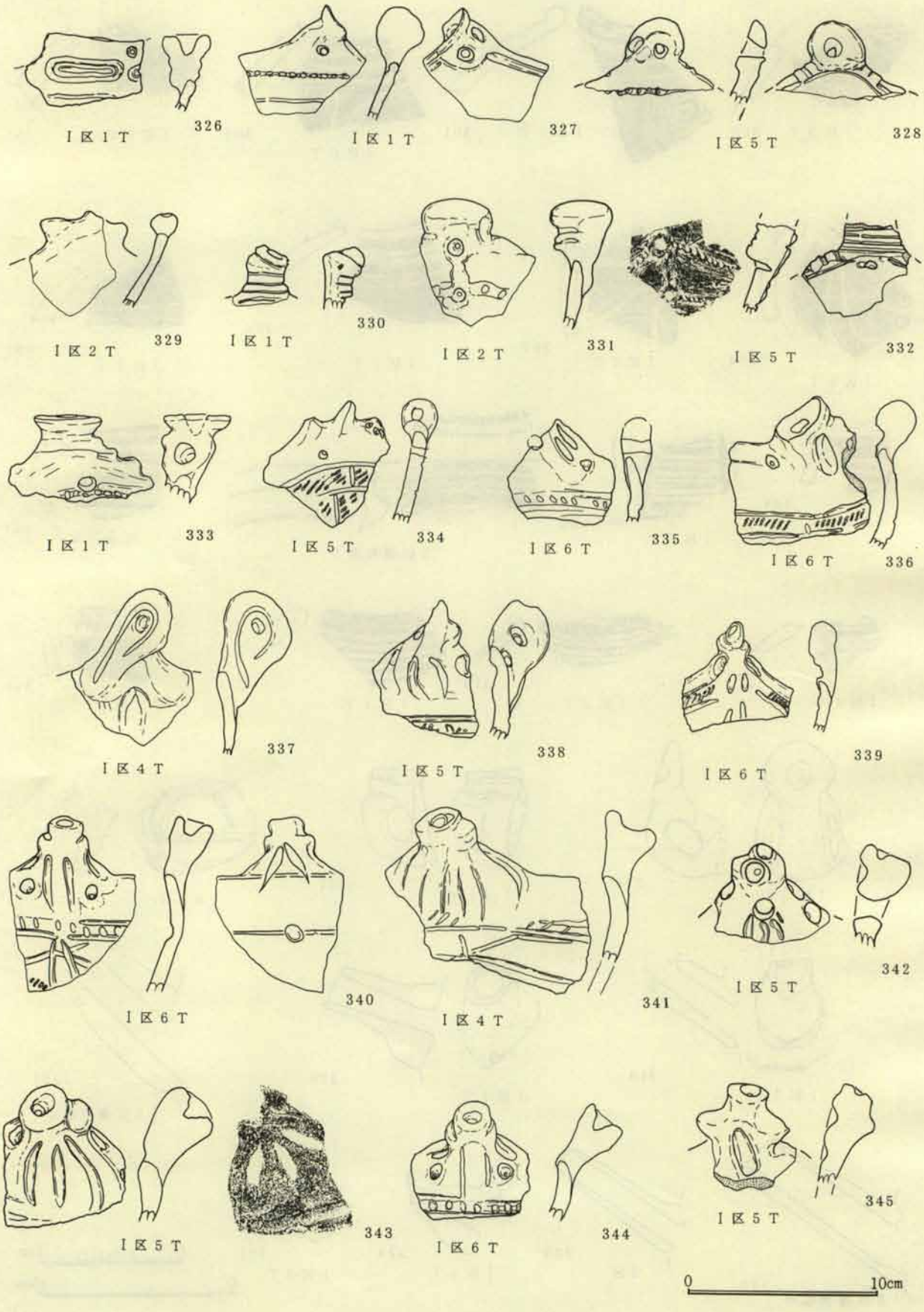
５類（第31図～第32図）　把手を一括する。

第Ｖ群の土器に伴う把手を中心に一括したが、352は第Ⅲ群、353は第Ⅵ群に伴う把手である。

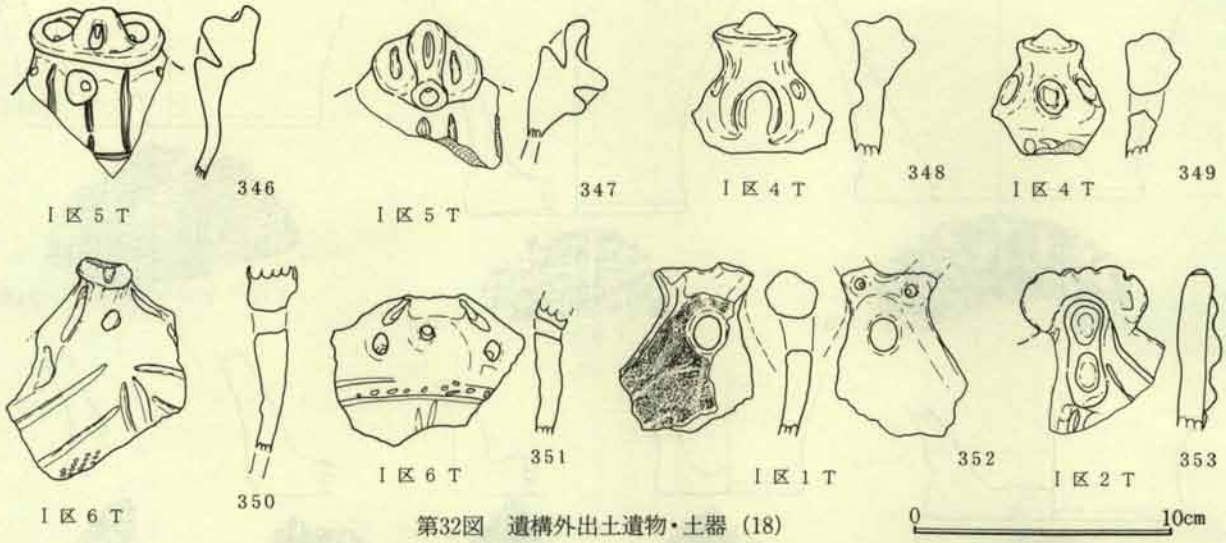
326は１類に伴うと思われる把手で、頂部には凹部が作られ沈線による楕円文及び刺突文が施される。327・328は３類Ａ1種に伴う把手で、隆線を有し以下沈線をこれに平行させる口縁部文様帯として持ち。把手は口唇部に耳朶状に貼付され円孔及び刺突を施す。329は波状口縁の波頂部に付されるが装飾性を欠き、文様構成も不明である。330は沈線を施す突起状の把手である。331～333も３類Ａ1種に伴う把手。



第30図　遺構外出土遺物・土器（16）



第31図　遺構外出土遺物・土器（17）



第32図　遺構外出土遺物・土器（18）

331は円筒状のずんぐりした把手で、内面側には２条の沈線が施される。332も円筒状の把手であろうが、上部を欠き詳しいことは不明である。内側には刺突及び沈線を施し、両脇にも沈線を施す。333は盃状の把手で、両脇に円形の低い肩部を持つ。

334・336・338・339は３類Ｂ１種に伴うものと思われる把手。334は耳朶状の低い把手で、両脇に突起状の高まりを施し、円孔が穿たれる。336は円孔を有する耳朶状の把手。338も円孔を有する耳朶状の把手で沈線による対弧文が描かれる。339も耳朶状の把手であるが、両脇に円形の刺突を伴って窄まり立体的に突出する。

335・340・341・344・351は３類Ｃ１種に伴うと思われる把手。335はやや低めの耳朶状の把手。340・341・344は両脇に円形刺突を伴い窄み立体的に突出する把手で、頂部中央にも円形刺突を施す。また、沈線をやや弧状に垂下させる。351も上部を欠くが同形であろう。

337は大きな耳朶状の把手で円形刺突及びそれを円形に囲む沈線を施す。

342・343は340等と比べるとやや低いが円形刺突を伴う立体的な把手。

345は両脇に円形刺突を伴わないが極端に窄まり立体的な把手。

346は両脇の窄まりが見られないが立体的に突出するな把手。頂部は中央部が突出し、両脇に円形刺突を施す。

347は両脇に沈線を伴い中央部が突出する把手。

348・349は頂部の中央が突出する円筒状の把手で、両脇には円形刺突を伴い立体的に突出する。

350は３類Ｃ２種に伴うものと思われる把手。頂部は欠くが両脇には円形刺突を伴い立体的に突出する。

352は上部を欠き詳細は不明であるが、円孔及び刺突を有する。

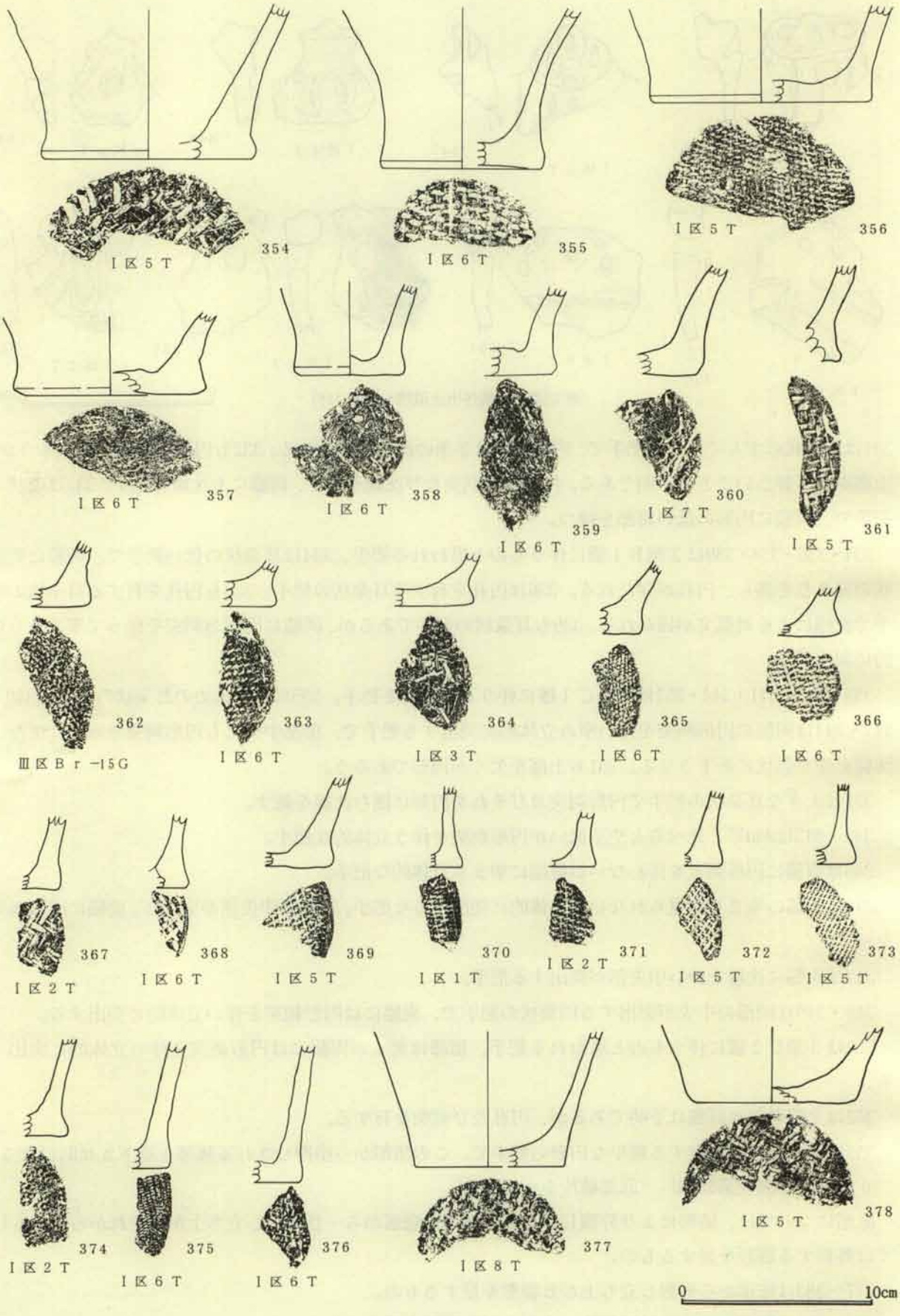
353は頂部に刻みを有する扁平な円形の把手で、この頂部から指押しされる隆帯を垂下させ貼付する。

６類（第33図～第35図）　底部破片を一括する。

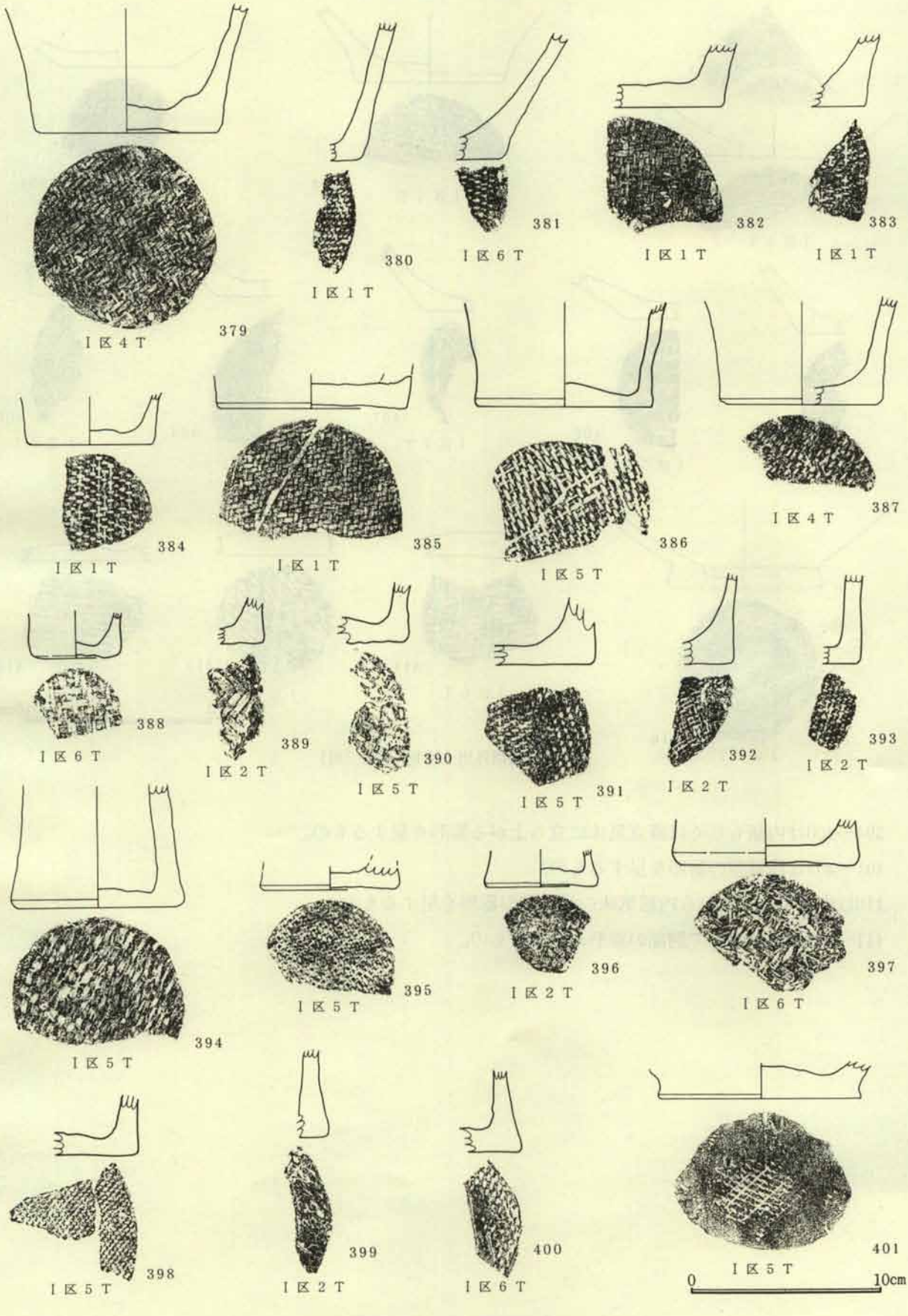
底部については、器形により分類した。354～376は底部から一旦内傾し立ち上がりそれから外反もしくは外形する器形を呈するもの。

377～383は底部から外形し立ち上がる器形を呈するもの。

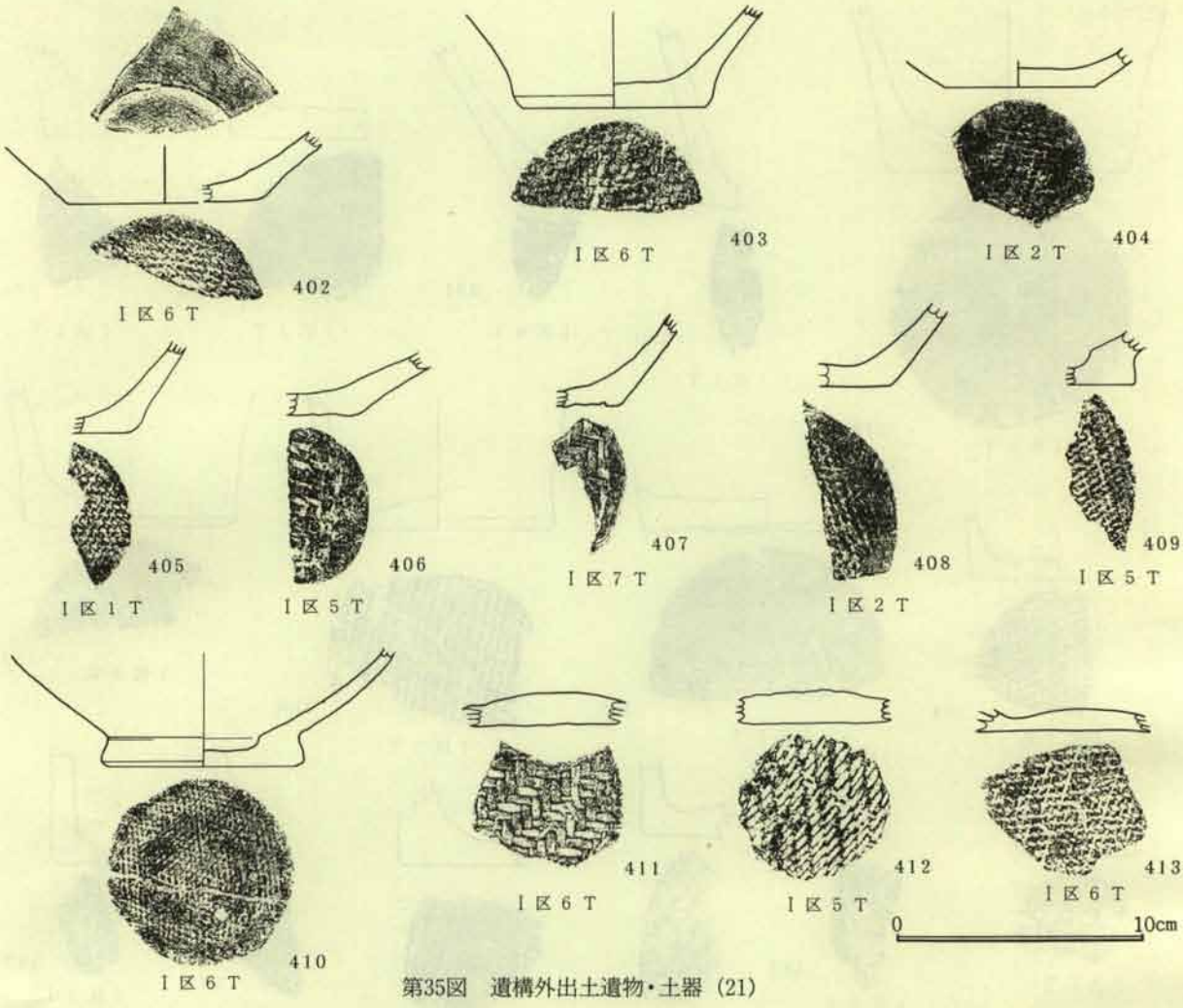
384～393は底部からやや外形気味に立ち上がる器形を呈するもの。



第33図　遺構外出土遺物・土器（19）



第34図　遺構外出土遺物・土器（20）



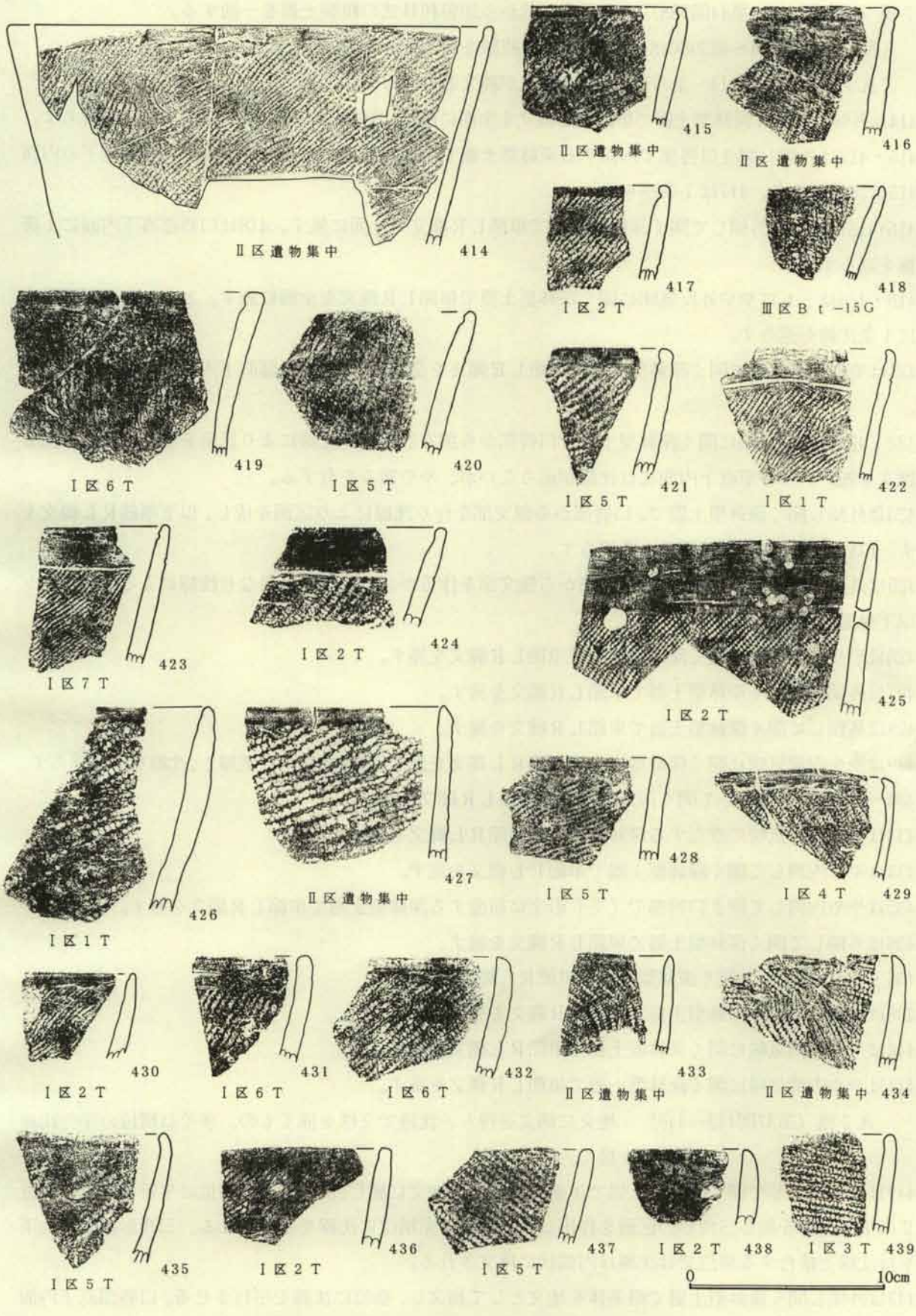
第35図　遺構外出土遺物・土器（21）

394～400は内傾もしくは直立気味に立ち上がる器形を呈するもの。

401～409は浅鉢型の器形を呈するもの。

410は内傾し、それから内湾気味の浅鉢型の器形を呈するもの。

411～413は底部のみで胴部の器形の不明なもの。



第36図　遺構外出土遺物・土器（22）

7類（第36図414～第44図558）　堀之内２式から加曽利Ｂ式の粗製土器を一括する。

Ａ種（第36図414～第39図484）　口縁部に紐線を持たないもの。

Ａ１種（第36図414～第37図441）　地文が縄文のみのもの。

414は外傾して開く深鉢型土器で単節ＲＬ縄文を全面に施す。口唇部直下の内面には沈線を１条巡らす。

415・417は外傾し開き口唇部で内傾する深鉢型土器で単節ＲＬ縄文を全面に施す。口唇部直下の内面に415は沈線を２条、417は１条巡らす。

416･418はともに外傾して開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を全面に施す。418は口唇部直下内面に１条沈線を巡らす。

419・420はともにやや外反気味に開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を全面に施す。ともに口唇部直下内面に１条沈線を巡らす。

421はやや内湾気味に開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を全面に施す。口唇部直下内面に１条沈線を巡らす。

422・424は外反気味に開く深鉢型土器で口唇部から無文部を作り沈線により区画を成し、以下単節ＬＲ縄文を施す。口唇部直下内面には沈線が巡らないが、やや窪みを有する。

423は外傾し開く深鉢型土器で、口唇部から無文部を作り沈線により区画を成し、以下単節ＲＬ縄文を施す。口唇部直下内面に沈線を１条巡らす。

425は外反し開く深鉢型土器で、口唇部から無文部を作るが422～424とは異なり沈線による区画を持たず以下単節ＬＲ縄文を施す。

426はやや内湾気味に開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

427は外傾して開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

428は外傾して開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

429はやや内湾気味に開く深鉢型土器で単節ＲＬ縄文を施す。口唇部直下は肥厚し、沈線を１条巡らす。

430～432はやや内湾して開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

433はやや内湾気味に直立する深鉢型土器で単節ＲＬ縄文を施す。

434はやや内湾して開く深鉢型土器で単節ＲＬ縄文を施す。

435はやや内湾して開き口唇部で「く」の字に屈曲する深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

436は外傾して開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

437・439は外傾して開く深鉢型土器で単節ＲＬ縄文を施す。

438は内湾して開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

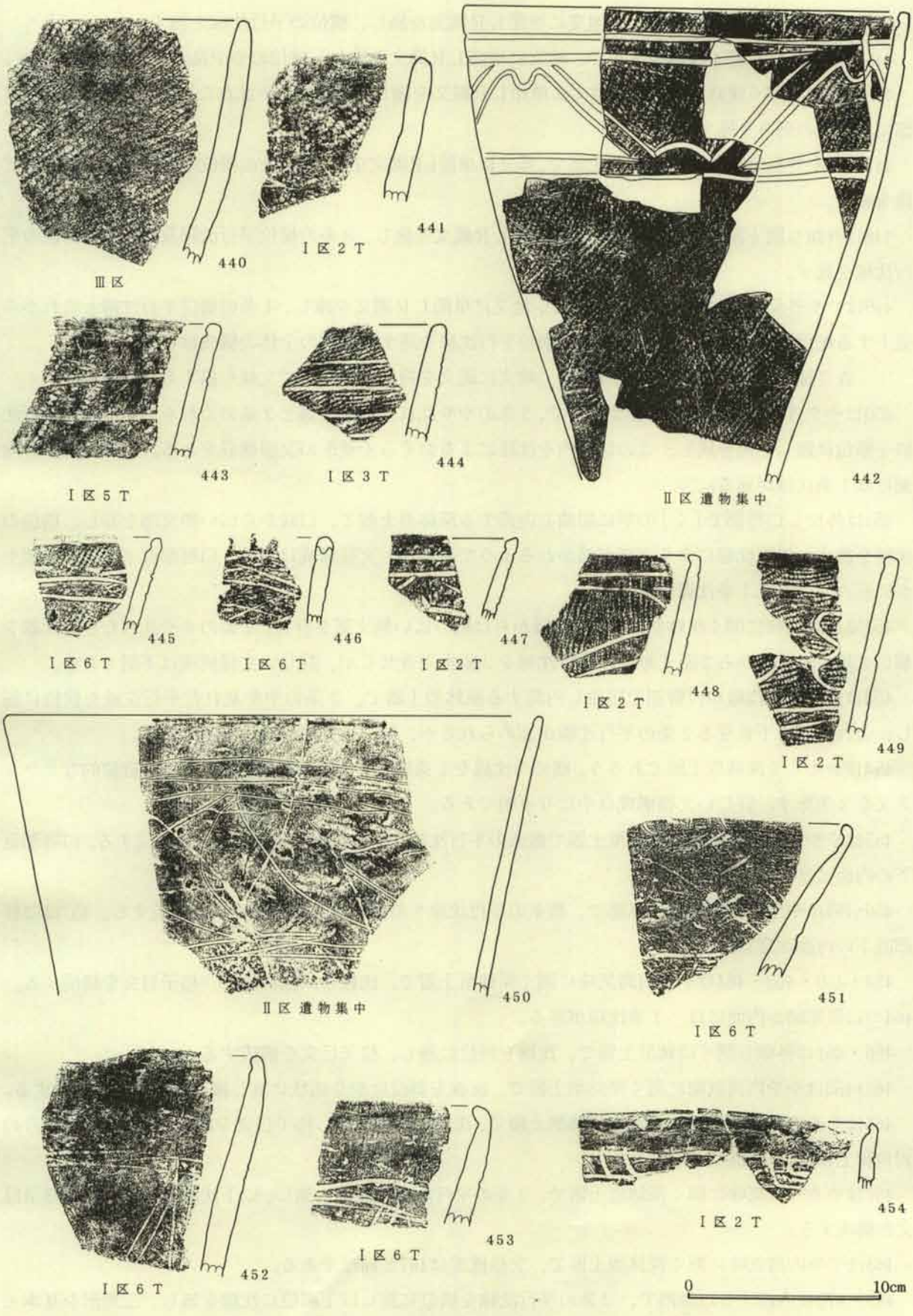
440はやや内湾気味に開く深鉢型土器で単節ＲＬ縄文を施す。

441はやや内湾気味に開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を施す。

Ａ２種（第37図442～449）　地文に縄文を持ち、沈線で文様を描くもの。多くは横位の平行沈線を描く。

442はやや内湾して開く深鉢型土器で単節ＬＲ縄文を地文に施し、沈線を２条横位に平行させ以下斜位に２条平行沈線を施し三角形の区画を作出し、さらに２条横位に沈線を平行させる。三角形区画が上下の平行沈線と接合する部位では沈線は円弧状に施文される。

443は外傾し開く深鉢型土器で絡条体を地文として施文し、横位に沈線を平行させる。口唇部直下内面には１条沈線が巡る。



第37図　遺構外出土遺物・土器（23）

444は外傾し開く深鉢型土器で、地文に単節ＬＲ縄文を施し、横位の平行沈線を施す。

445はやや外反し開く深鉢型土器で、地文に単節ＬＲ縄文を施し、横位のやや乱れた平行沈線を施す。

446は外傾し開く深鉢型土器で、地文に単節ＬＲ縄文を施し、斜位にやや乱れた格子目文を施す。口唇部には連続の刻みを施す。

447はやや外反気味に開く深鉢型土器で、地文に単節LR縄文を施し、2条の横位平行沈線及び斜位の沈線を施す。

448は外傾し開く深鉢型土器で、地文に単節ＬＲ縄文を施し、2条の横位平行沈線及び2条の斜位の平行沈線を施す。

449はやや外反気味に開く深鉢型土器で、地文に単節ＬＲ縄文を施し、1条の横位平行沈線とこれから垂下する蛇行沈線を施し、さらに2条の横位平行沈線を施す。文様の全体の構成は不明。

Ａ3種（第37図450～第39図484）　地文に縄文を持たず、沈線で文様を描くもの。

450はやや外反気味に開く深鉢型土器で、3条のやや乱れた平行沈線と2条のこれもやや乱れた平行沈線を横位に施し区画を成し、この区画内を沈線によるおそらく菱形の文様構成をとる。口唇部直下の内面には1条沈線が巡る。

451は外反し口唇部で「く」の字に屈曲し内湾する深鉢型土器で、口縁から広い無文部を有し、横位の沈線を施す。以下沈線により文様が描かれるようであるが、文様構成は不明。口唇部直下の内面は緩やかに窪み、さらに1条沈線が巡る。

452は外傾気味に開く深鉢型土器で、口縁からは幅の広い無文部を有し、2条のやや乱れた平行沈線を横位に施し、これから2条1単位の平行沈線を2組垂下させるが、詳しい文様構成は不明である。

453は外傾する口縁が口唇部で屈曲し内湾する深鉢型土器で、2条のやや乱れた平行沈線を横位に施し、これから垂下させる2条の平行沈線が認められるが、詳しい文様構成は不明である。

454はおそらく深鉢型土器であろう。横位の沈線を1条施し、これから垂下するように直線的なクランク文を2条施す。詳しい文様構成はやはり不明である。

455はやや外傾気味に開く深鉢型土器で数条の平行沈線を斜位に施し、格子目文を構成する。口唇部直下の内面には1条の沈線が巡る。

456･467はやや内湾気味の口縁部で、数条の平行沈線を斜位に施し、格子目文を構成する。457は口唇部直下の内面が窪む。

458・459・462・464はやや内湾気味に開く深鉢型土器で、沈線を斜位に施し、格子目文を構成する。464の口唇部緒か内面には、1条沈線が巡る。

460・461は外傾し開く深鉢型土器で、沈線を斜位に施し、格子目文を構成する。

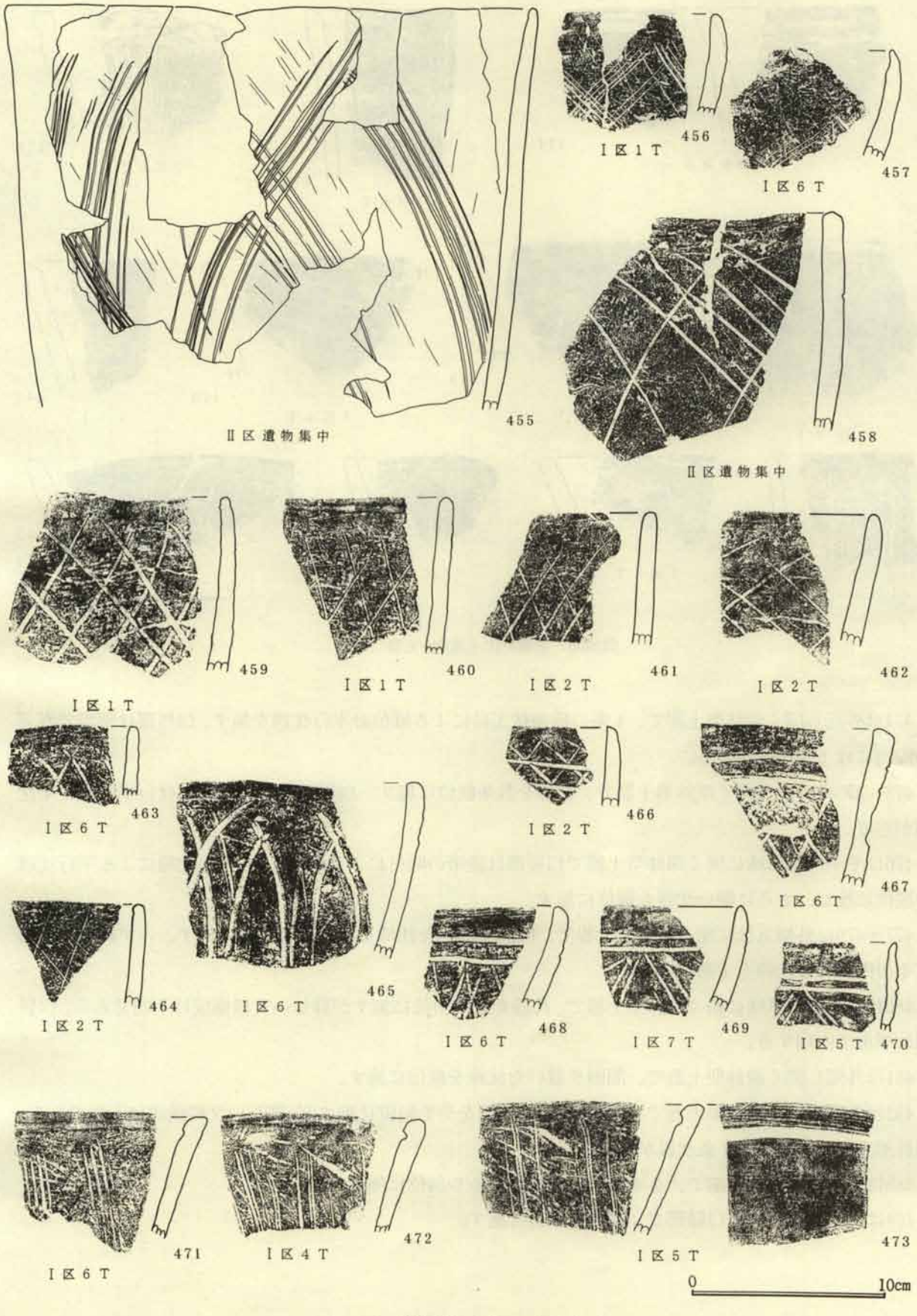
463･465はやや内湾気味に開く深鉢型土器で、沈線を斜位にやや弧状に施し縦長の菱形文を構成する。

466はやや内湾気味に立ち上がる深鉢型土器で、沈線を斜位に施し格子目文を構成し、さらにこれらの対角線上に横位の沈線を施す。

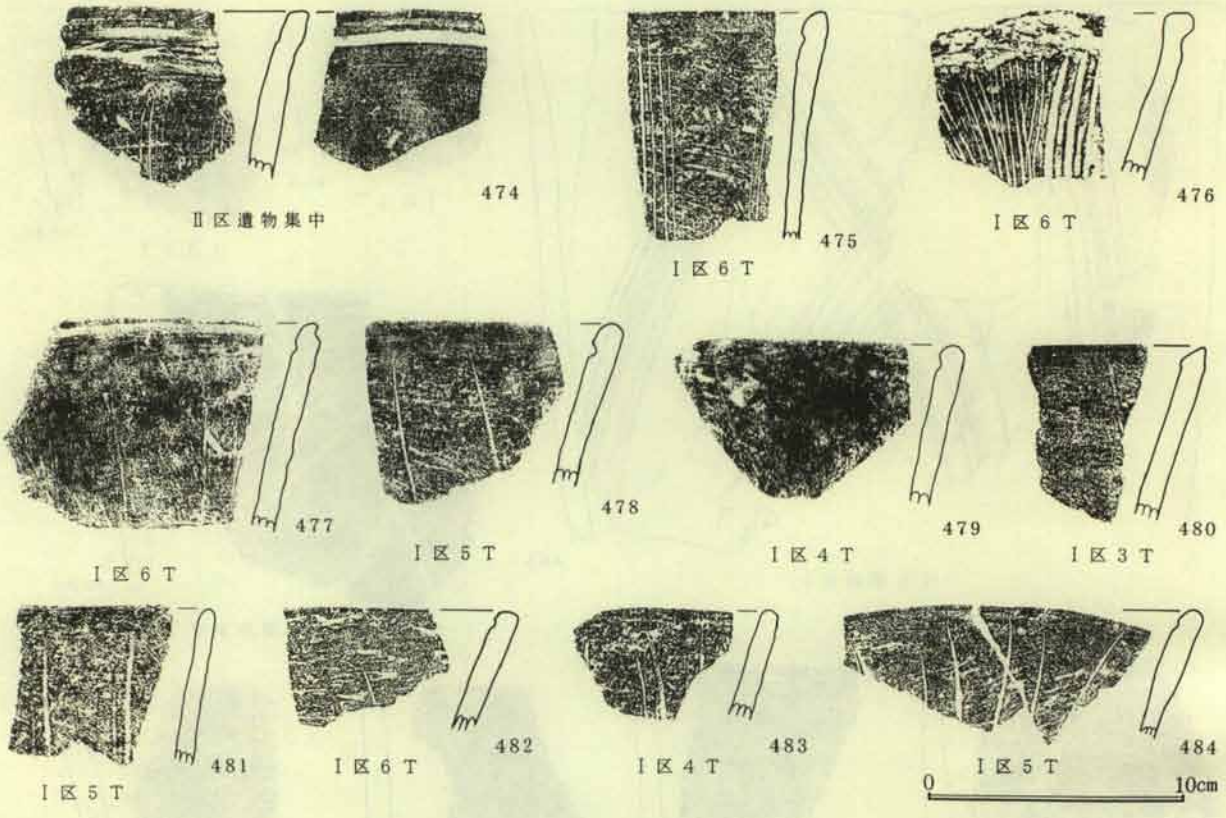
467はやや外反気味に開く深鉢型土器で、2条の平行沈線を横位に施し、以下沈線を斜位に施し格子目文を構成する。

468はやや内湾気味に開く深鉢型土器で、文様構成は467と同様である。

469・470は内湾する口縁部で、2条の平行沈線を横位に施し以下斜位に沈線を施し、三角形を基本とする幾何学的文様を構成する。



第38図　遺構外出土遺物・土器（24）



第39図　遺構外出土遺物・土器（25）

471は外反し開く深鉢型土器で、4条の櫛歯状工具による縦位の平行沈線を施す。口唇部は平坦で直下の内面には1条沈線が巡る。

472～475は外反し開く深鉢型土器で、沈線を数条縦位に施す。口唇部直下の内面にはいずれも1条沈線が巡る。

476はやや内湾気味に開く深鉢型土器で口唇部は隆帯の貼付により肥厚する。太い沈線による平行沈線を縦位に施し、さらに細い沈線を縦位に施す。

477～479は外傾気味に開く深鉢型土器で、間隔を置いた沈線を縦位及び斜位に施す。いずれも口唇部直下の内面には沈線を1条巡らす。

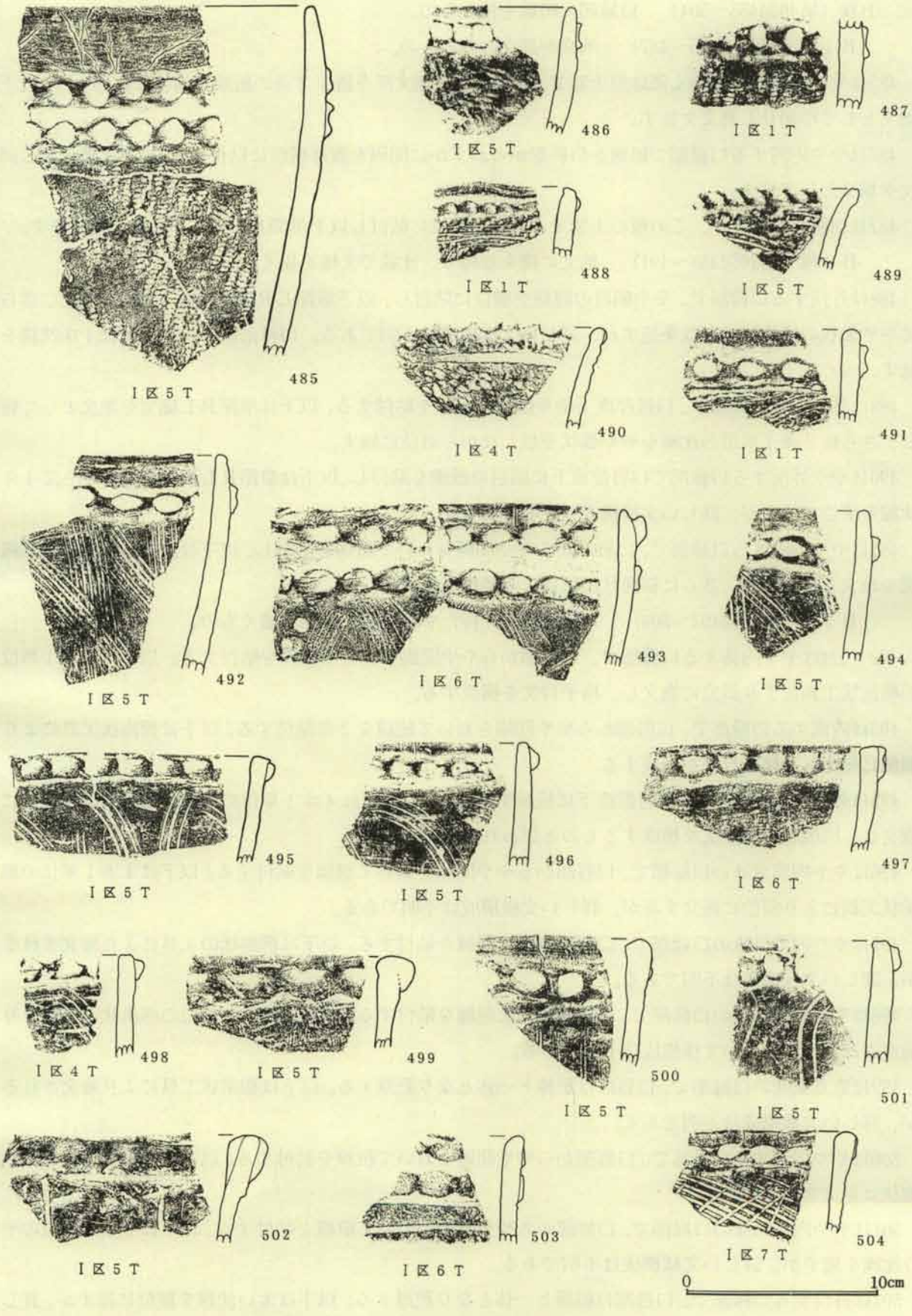
480はやや外反気味に開く深鉢型土器で、沈線をやや斜位に施すが詳しい文様構成は不明である。口唇部は平坦で内傾する。

481は外傾し開く深鉢型土器で、間隔を置いた沈線を縦位に施す。

482は外傾し開く深鉢型土器で、間隔を置いた沈線をやや斜位に施すが、詳しい文様構成は不明である。口唇部直下の内面には1条沈線が巡る。

483は、外傾する口縁部で、2条1単位の沈線をやや斜位に施す。

484はやや外反気味の口縁部で、沈線を縦位に施す。



第40図　遺構外出土遺物・土器（26）

B種（第40図455～504）　口縁部に紐線を持つもの。

B１種（第40図455～487）　地文が縄文のみのもの。

485はやや内湾気味に開く深鉢型土器で、口縁部から無文部を置き２条の紐線を横位に貼付する。以下地文として単節ＲＬ縄文を施す。

486はやや内湾する口縁部で紐線を口唇部からわずかに間隔を置き横位に貼付する。以下は単節ＲＬ縄文を地文として施す。

487は口唇部を欠くが、この種の土器で、紐線を横位に貼付し以下単節ＲＬ縄文を地文として施す。

B２種（第40図488～491）　地文に縄文を持ち、沈線で文様を描くもの。

488は外反する口縁部で、やや細目の紐線を横位に貼付し、以下単節ＬＲ縄文を地文として施し、さらにやや弧状の横位沈線を数条施すが、詳しい文様構成は不明である。口唇部直下の内面には１条沈線を施す。

489は外反する口縁部で、口唇部直下やや細目の紐線を貼付する。以下は単節ＲＬ縄文を地文として施し、さらに２条１単位の沈線をやや弧状を呈しながら斜位に施す。

490はやや外反する口縁部で口唇部直下に細目の紐線を貼付し、以下は単節ＲＬ縄文を地文として１条沈線を横位に施すが、詳しい文様構成は不明である。

491はやや内湾する口縁部で、口唇部からやや間隔をおいて紐線を貼付し、以下は原体不明であるが縄文を地文として施し、さらに櫛歯状工具による条線を施す。

B３種（第40図492～504）　地文の縄文を持たず、沈線で文様を描くもの。

492・494はやや内湾する口縁部で、口唇部からやや間隔をおいて紐線を貼付する。以下は７本１単位の櫛歯状工具により斜位に施文し、格子目文を構成する。

493は内湾する口縁部で、口唇部からやや間隔をおいて紐線を２条貼付する。以下は櫛歯状工具により斜位に施文し、格子目文を構成する。

495は外傾する口縁部で、口唇部直下に紐線を貼付する。以下は４本１単位の櫛歯状工具により斜位に施文し、円弧状の菱形文を構成するものと思われる。

496はやや内湾気味の口縁部で、口唇部からやや間隔をおいて紐線を貼付する。以下は４本１単位の櫛歯状工具により斜位に施文するが、詳しい文様構成は不明である。

497はやや内湾気味の口縁部で、口唇部直下に紐線を貼付する。以下は櫛歯状の工具により施文されるが、詳しい文様構成は不明である。

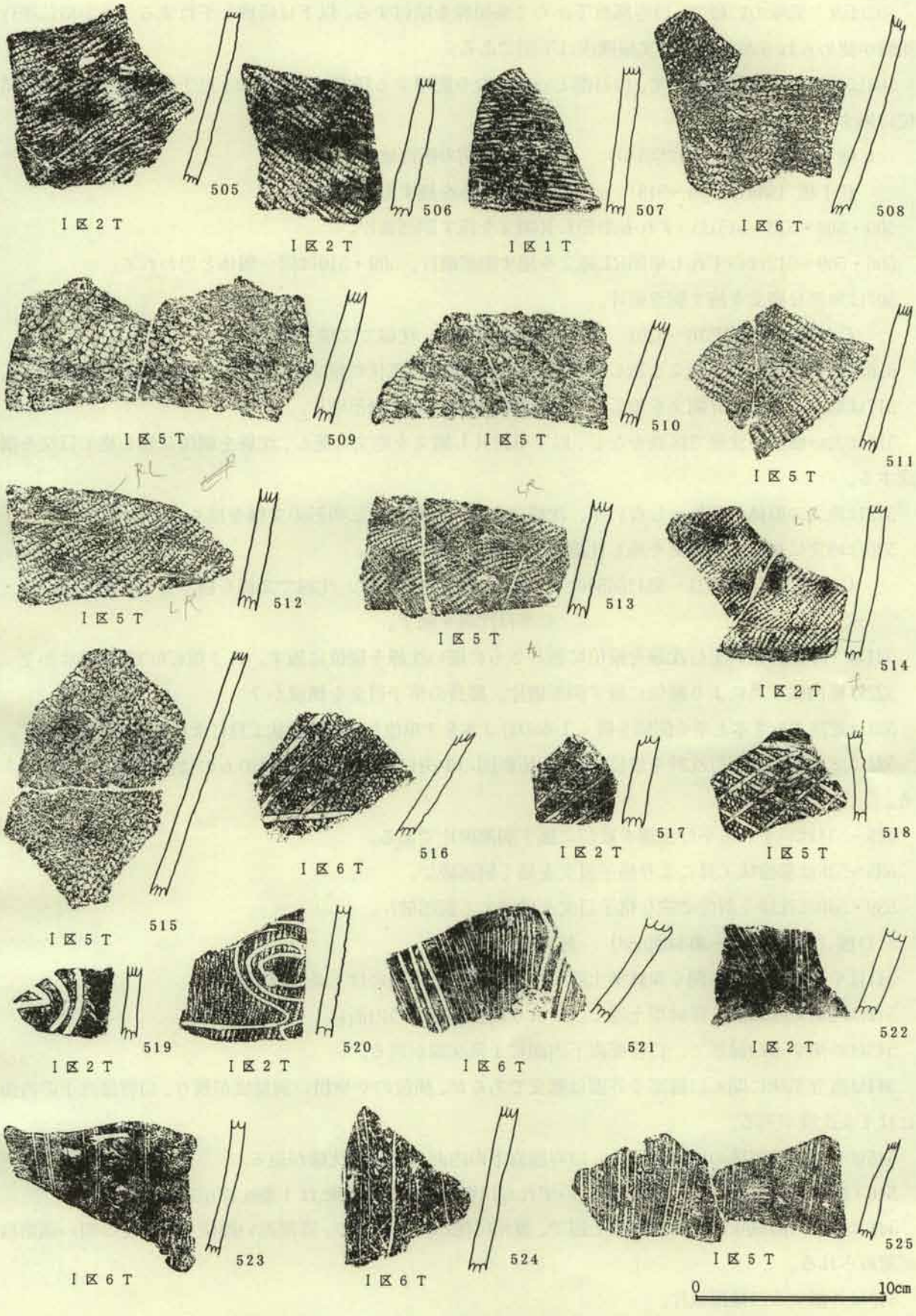
498はやや直立気味の口縁部で、口唇部直下に紐線を貼付する。以下は４本１単位の櫛歯状工具により施文されるが、詳しい文様構成は不明である。

499は直立気味の口縁部で、口唇部は紐線と一体となり肥厚する。以下は櫛歯状工具により施文されるが、詳しい文様構成は不明である。

500はやや内湾する口縁部で、口唇部からやや間隔をおいて紐線を貼付する。以下は櫛歯状工具により縦位に施文される。

501はやや内湾気味の口縁部で、口唇部からやや間隔をおいて紐線を貼付する。以下は２条１単位の平行沈線を施すが、詳しい文様構成は不明である。

502は外反する口縁部で、口唇部は紐線と一体となり肥厚する。以下は太い沈線を縦位に施すが、詳しい文様構成は不明である。



第41図　遺構外出土遺物・土器（27）

503は直立気味の口縁で、口唇部直下から2条紐線を貼付する。以下は紐線と平行する2条の横位平行沈線が認められるが、詳しい文様構成は不明である。

504は外傾する口縁部破片で、口唇部と一体となり肥厚する紐線が貼付され、以下格子目状に沈線を斜位に施す。

C種（第41図505～第42図540）　A・B種不明の胴部破片。

C1種（第41図505～515）　地文に縄文のみを施すもの。

505・508・513～515はいずれも単節LR縄文を施す胴部破片。

506・509～512はいずれも単節RL縄文を施す胴部破片。509・510は同一個体と思われる。

507は無節R縄文を施す胴部破片。

C2種（第41図516～520）　地文に縄文を持ち、沈線で文様を描くもの。

516は地文に単節LR縄文を施し、沈線を直線的及び円弧状に施すが、詳しい文様構成は不明である。

517は地文に単節LR縄文を施し、平行沈線を斜位に施す胴部破片。

518は太い横位の沈線で区画をなし、以下単節RL縄文を地文に施し、沈線を斜位に施し格子目文を構成する。

519は地文の原体が判然としないが、沈線により円弧状及び三角形の文様を描く。

520は地文に単節LR縄文を施し沈線により渦巻き文を描く。

C3種（第41図521～第42図540）　地文の縄文を持たず、沈線で文様を描くもの。多くは、縦位に平行沈線を施す。

521は3単位の太い平行沈線を縦位に施しさらに細い沈線を縦位に施す。A3種476の胴部破片か？

522は櫛歯状工具により縦位に施す胴部破片。縦長の格子目文を構成か？

523は近接する2本とやや間隔を置く1本の計3本を1単位とする櫛歯状工具により縦位に沈線を施す。

524は2本1組の平行沈線を縦位に施す。拓影図の中央に見られる沈線状のものは接合部位の割れである。

525～534はいずれも平行沈線を縦位に施す胴部破片である。

535～538は櫛歯状工具により格子目文を描く胴部破片。

539・540は沈線を斜位に施し格子目文を構成する胴部破片。

D種（第43図541～第44図558）　無文のもの。

541はやや外反気味に開く深鉢型土器で、口唇部直下内面には1条沈線が巡る。

542は内湾気味に開く深鉢型土器で、やはり口唇部直下の内面に1条沈線が巡る。

543は外傾する口縁部で、口唇部直下内面に1条沈線が巡る。

544は直立気味に開く口縁部で外面は無文であるが、横位のやや粗い調整痕が残り、口唇部直下の内面には1条沈線が巡る。

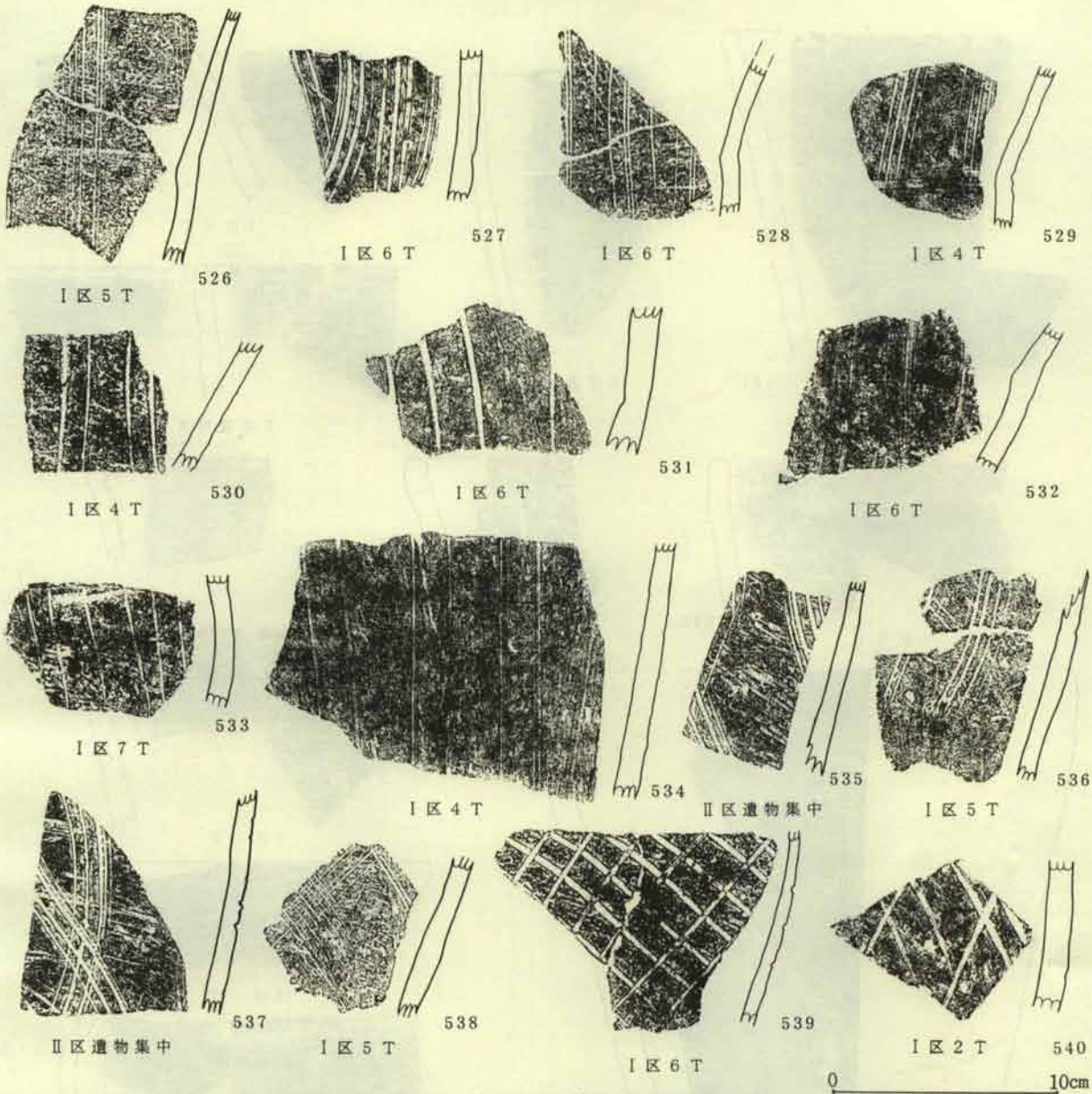
545はやや内湾気味の口縁部破片。口唇部直下の内面には1条沈線が巡る。

546・547は外傾する口縁部破片で、いずれも口唇部直下の内面には1条沈線が巡る。

548はやや内湾気味に開く深鉢型土器で、復元口径23.2cmを測る。底部近い部位では縦位の粗い調整痕が認められる。

549は外傾する口縁部破片。

550は復元口径15.9cmを測る口縁部破片。



第42図　遺構外出土遺物・土器（28）

551は大きく内湾する口縁部で、鉢型もしくは浅鉢型の器形を呈するものと思われる。

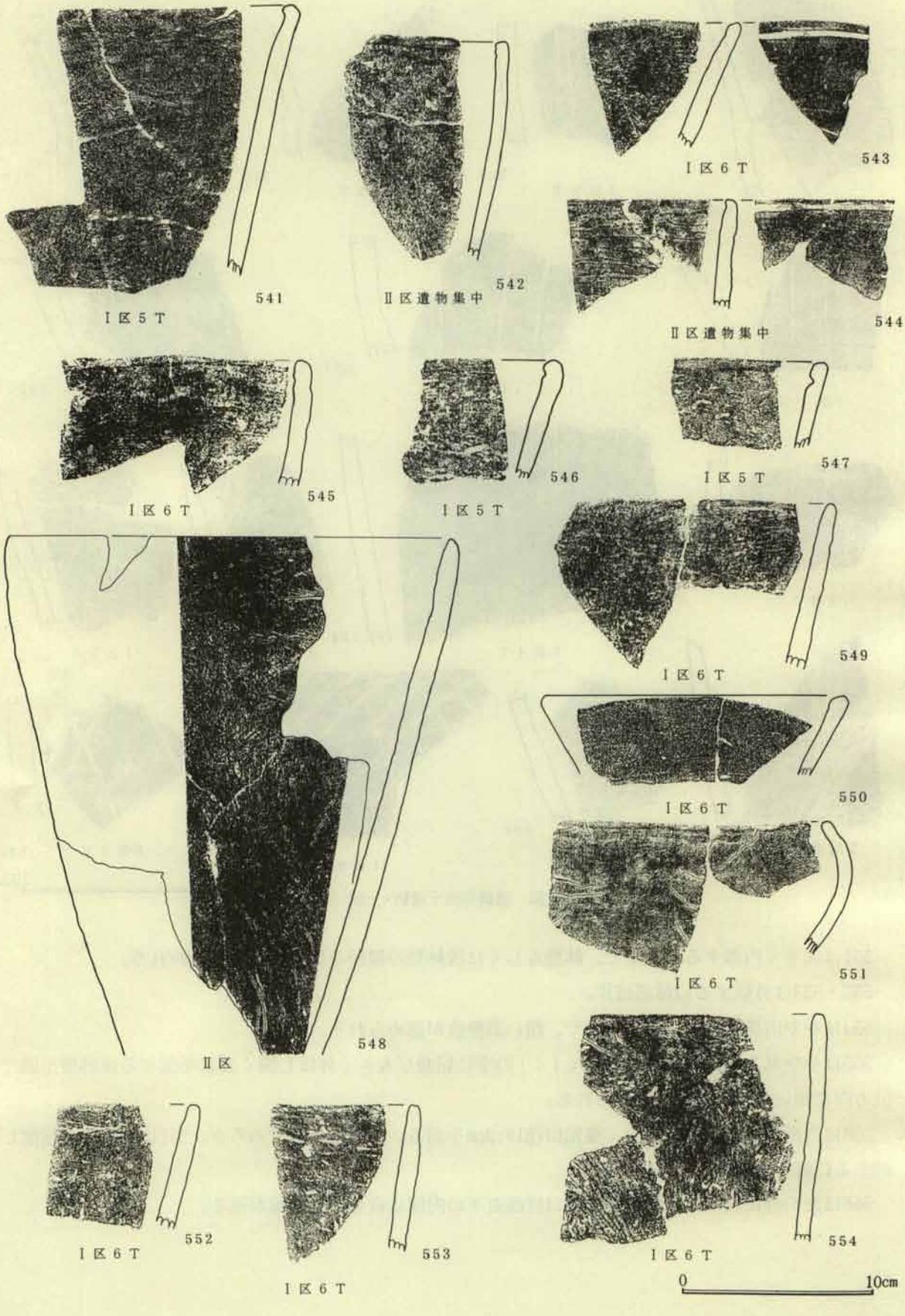
552・553は外傾する口縁部破片。

554はやや内湾気味の口縁部破片で、粗い調整痕が認められる。

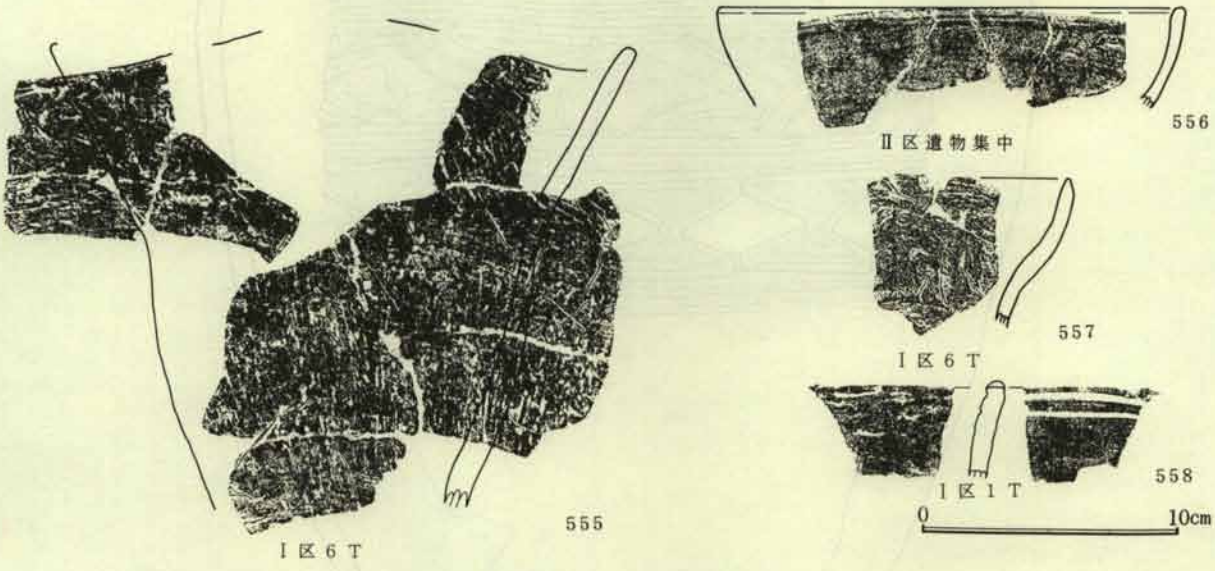
555はやや丸みのある胴部から緩く「く」の字に屈曲し大きく外傾し開く波状を呈する深鉢型土器で縦位方向に粗い削りの調整が認められる。

556は内湾する口縁部破片で、復元口径18.2cmを測る。浅鉢型土器であろう。557は胴部から屈曲し内湾する口縁部を有する土器片である。

558はやや外反気味の口縁部破片で口唇部直下の内面には2条の沈線が巡る。



第43図　遺構外出土遺物・土器（29）



第44図　遺構外出土遺物・土器（30）

8類（第45図559）　第Ⅴ群に併行すると思われる異系統の土器。

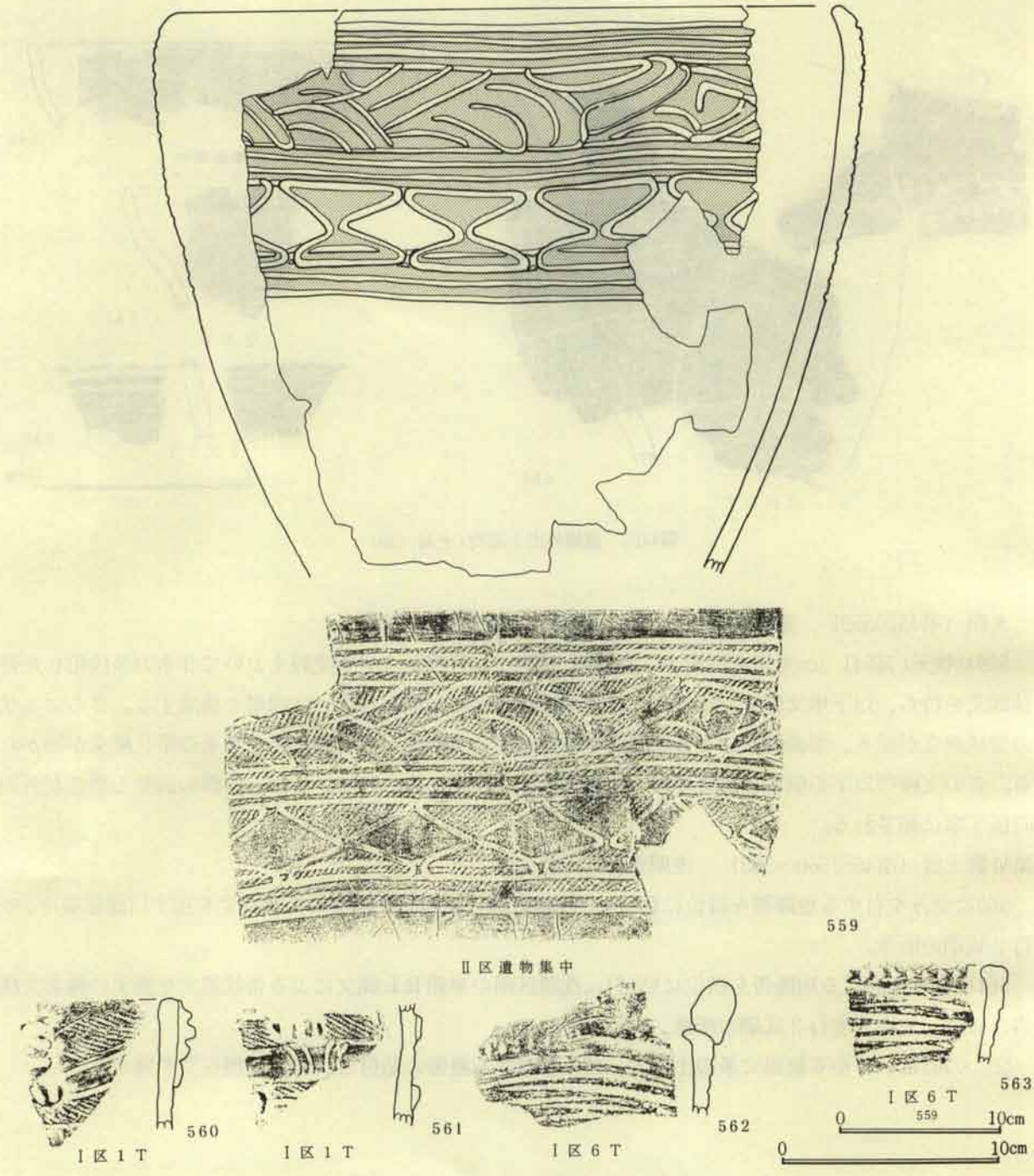
559は復元口径41.2cmを測る内湾する深鉢型土器で、口唇部からやや間隔をおいて3本の多段化した帯状縄文を持ち、以下地文縄文で沈線による青海波状の文様が描かれ第一文様帯を構成する。さらに3状の帯状縄文が続き、磨消縄文による対弧文が描かれ第2文様帯が構成され再び2条の帯状縄文が描かれる。この文様帯以下の胴部は無文であるが磨き調整が丁寧に施される。また、内面の調整も磨きが外面同様丁寧に施される。

第Ⅵ群土器（第45図560～563）　後期安行式土器

560は刻みを有する短隆帯を縦位に貼付し、沈線区画の単節ＬＲ縄文の帯状縄文を施す口縁部破片。安行2式期の所産。

561は刻みを有する短隆帯を横位に貼付し、沈線区画の単節ＲＬ縄文による帯状縄文を施す口縁部文様帯の破片。やはり安行2式期の所産。

562・563はいわゆる紐線文系の土器で、刻みを有する隆帯の貼付と、斜位の擦痕文を施す。

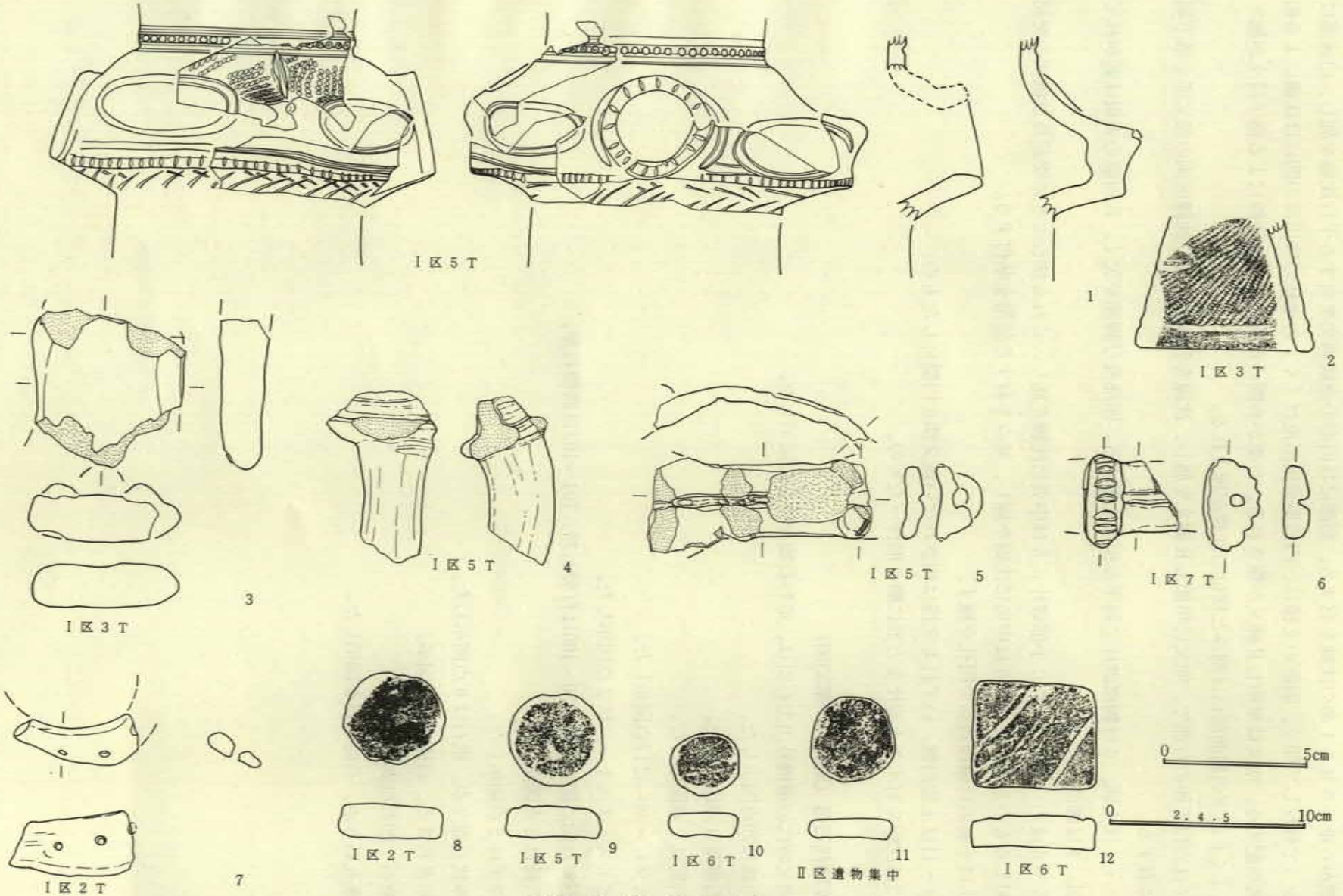


第45図　遺構外出土遺物・土器（31）

縄文時代土製品（第44図）

その他土製品として、異形台付型土器、台付土器(台部)、土偶、釣手土器、土製貝輪模造品、土製円盤等を図示した。

1は異形台付型土器で、台部からは大きく「く」の字に屈曲して開きさらに「く」の字に屈曲し内湾気味に立ち上がり胴部を形作る。胴部には円形の大きな窓状の円筒形突出部が対角に2個作られ、口唇部には刻みが施される。この1組の円形の突出部の間は「く」の字に突出し、中央に円形刺突を施し、



第46図　遺構外出土遺物・土製品

頚部から垂下させる１条の沈線を有する。頚部には円形の連続刺突を有する平行沈線を施し、口縁部に向かって外反して開く。胴部の文様は、円筒型突出部及び「く」の字状の突出部の間には沈線による楕円文を配する。地文は単節ＬＲ縄文が施される。台部から開いた胴部下半は沈線による格子目文が施され、「く」の字の屈曲部には刻みと横位の沈線が施される。

２は台付土器の台部で、地文に単節ＬＲ縄文を施し、沈線を弧状に配し、沈線区画の無文部を最下端部に有する。

３・４は土偶。３は胴部破片で扁平な板状を呈する。頭部及び脚部を欠く。乳房部の表現は剝がれて不明。４は脚部破片。

５・６は釣り手土器の釣り手部破片。５は中央に沈線を施し、これを挟むように突起及び橋状の突起を配するものと思われる。６は中央に沈線を施し、刻みを有する隆帯を貼付する。

７は土製の貝輪模造品で円孔を施す。

８～11は土製円盤。いずれも文様は施されない無文部を円盤にしたもの。

12は沈線を有する土器片を方形に磨り形作ったもの。

縄文時代石器（第47図～第53図）

縄文時代の遺構外出土石器は、定形石器を中心に図示した。

石鏃は29点図示した。

石錐は９点図示した。

石匙は２点図示した。

スクレーパーは17点図示した。

ピエス・エスキーユは２点図示した。

石斧は53点図示した。50～100は打製石斧。101～102は磨製石斧。

石錘は２点図示した。

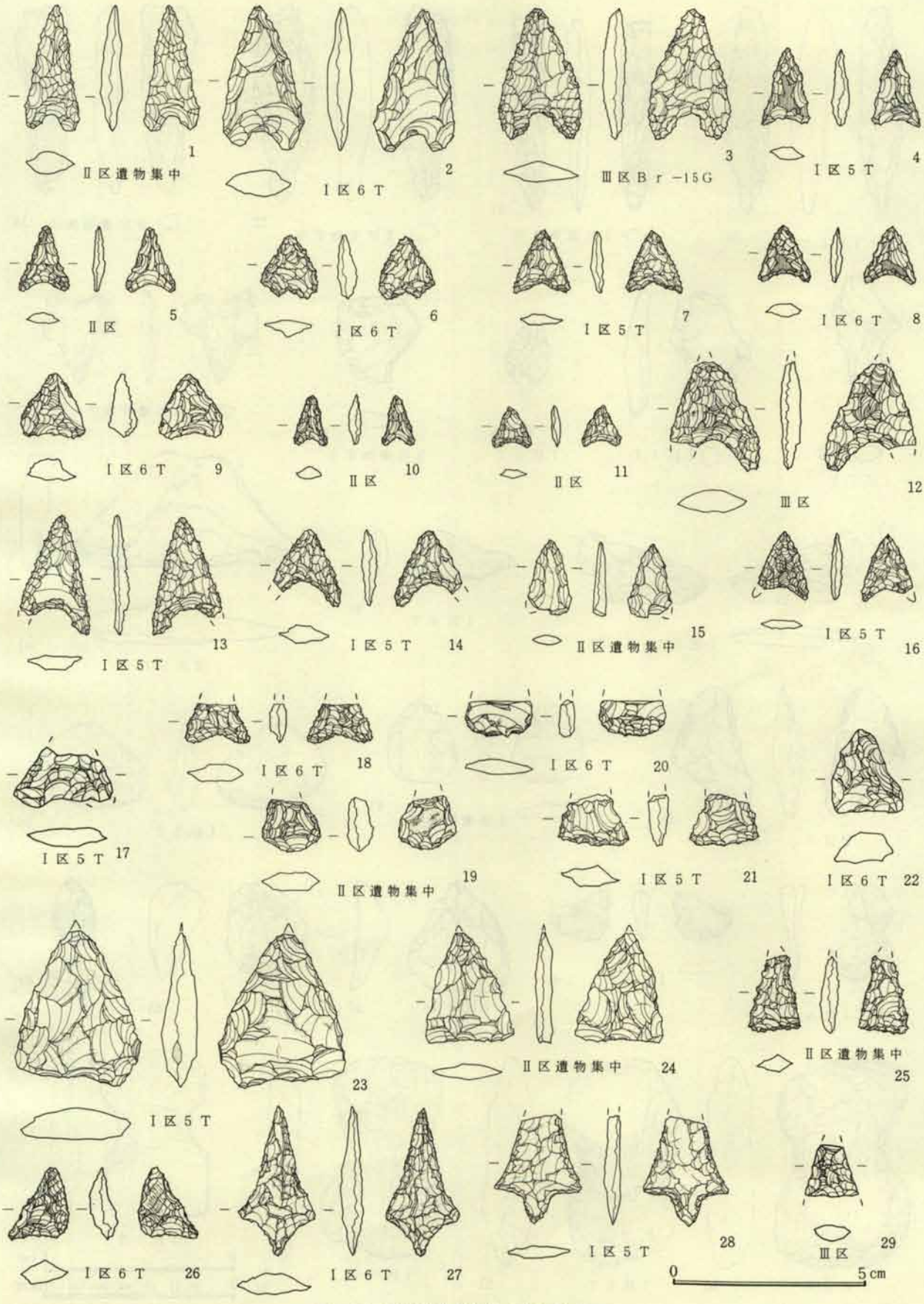
浮子は２点図示した。

棒状石器２点。砥石は６点図示した。

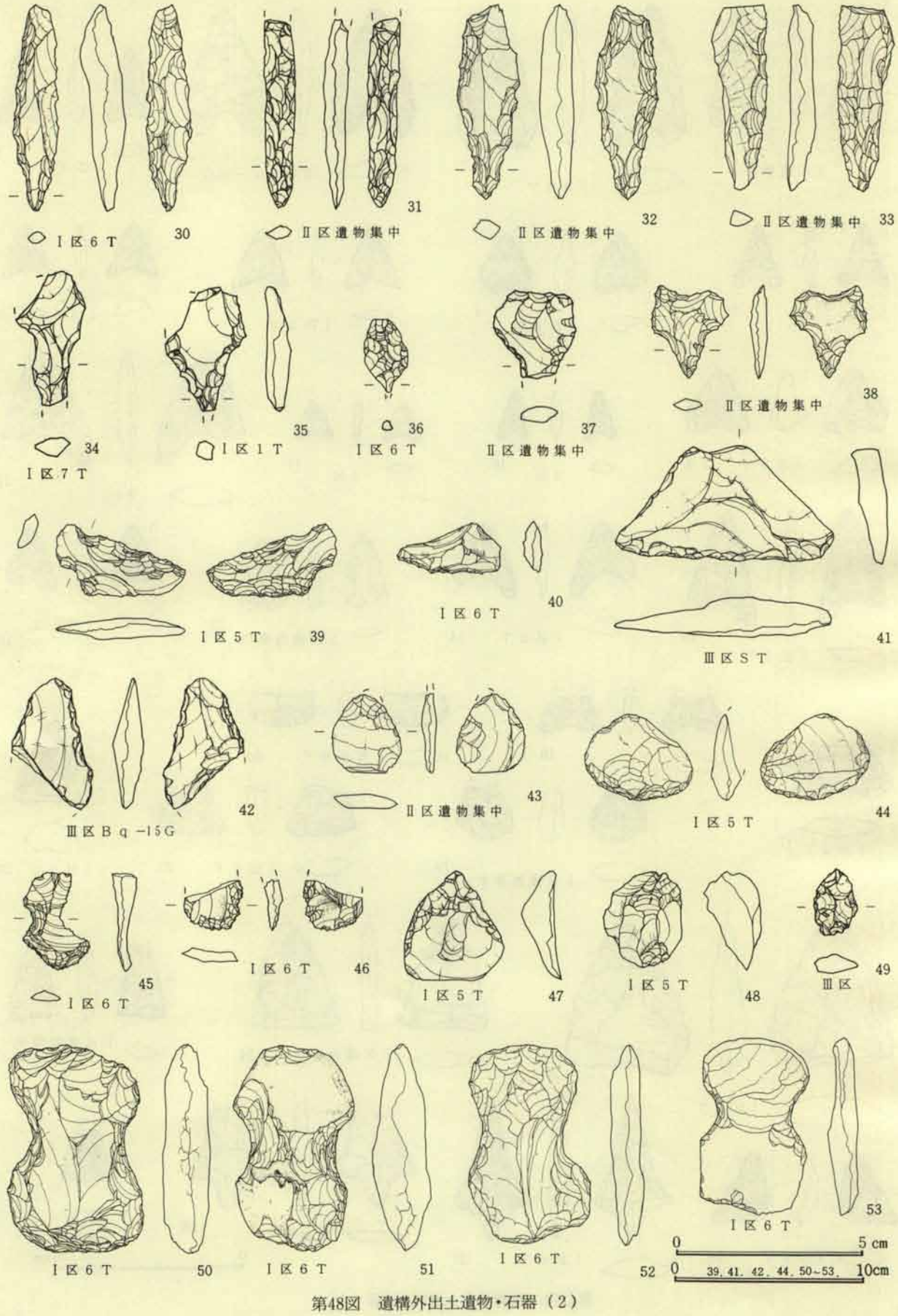
叩き石３点。石棒１点を図示。

磨石・凹石は20点図示。

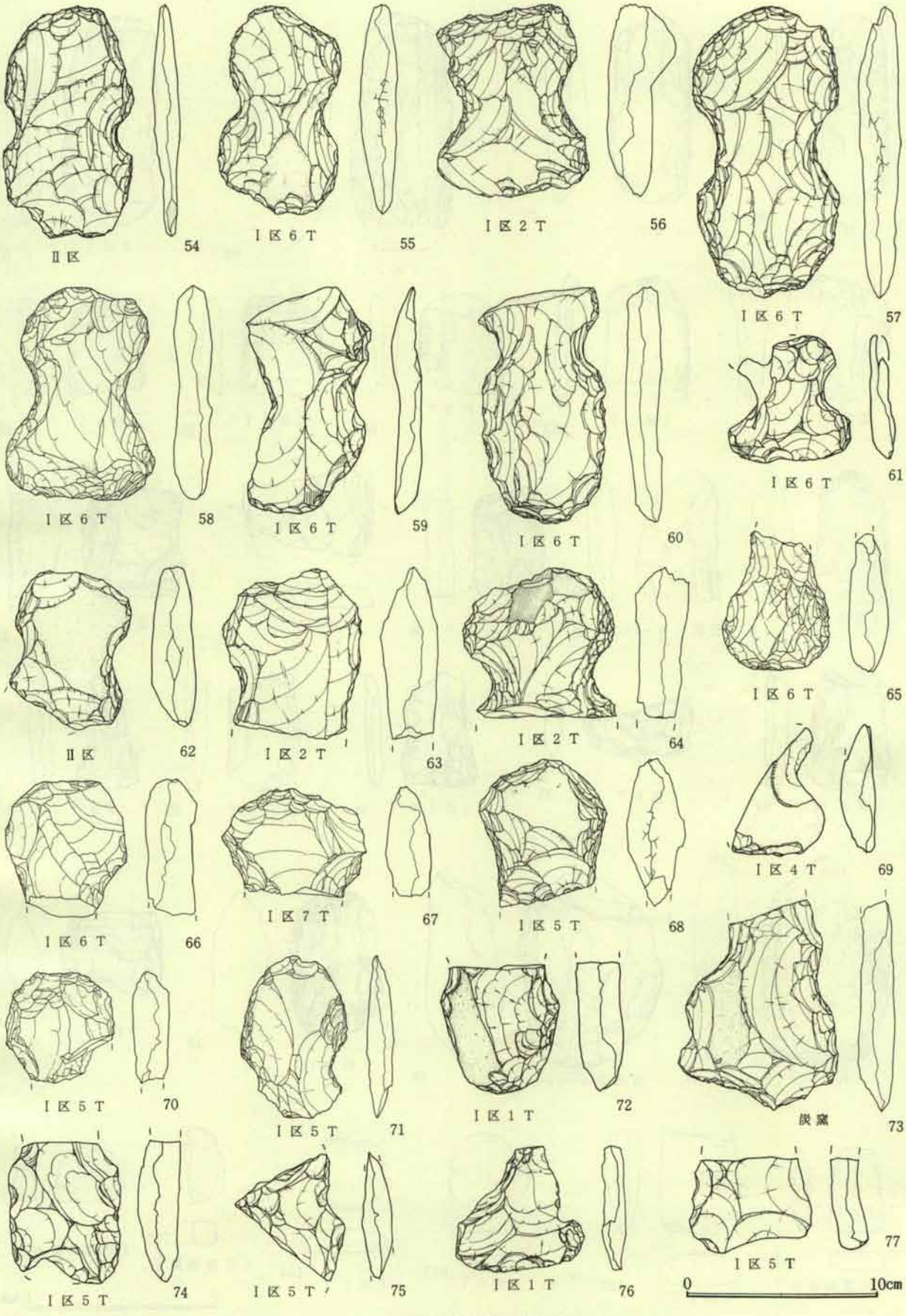
多孔石５点。石皿３点を図示した。



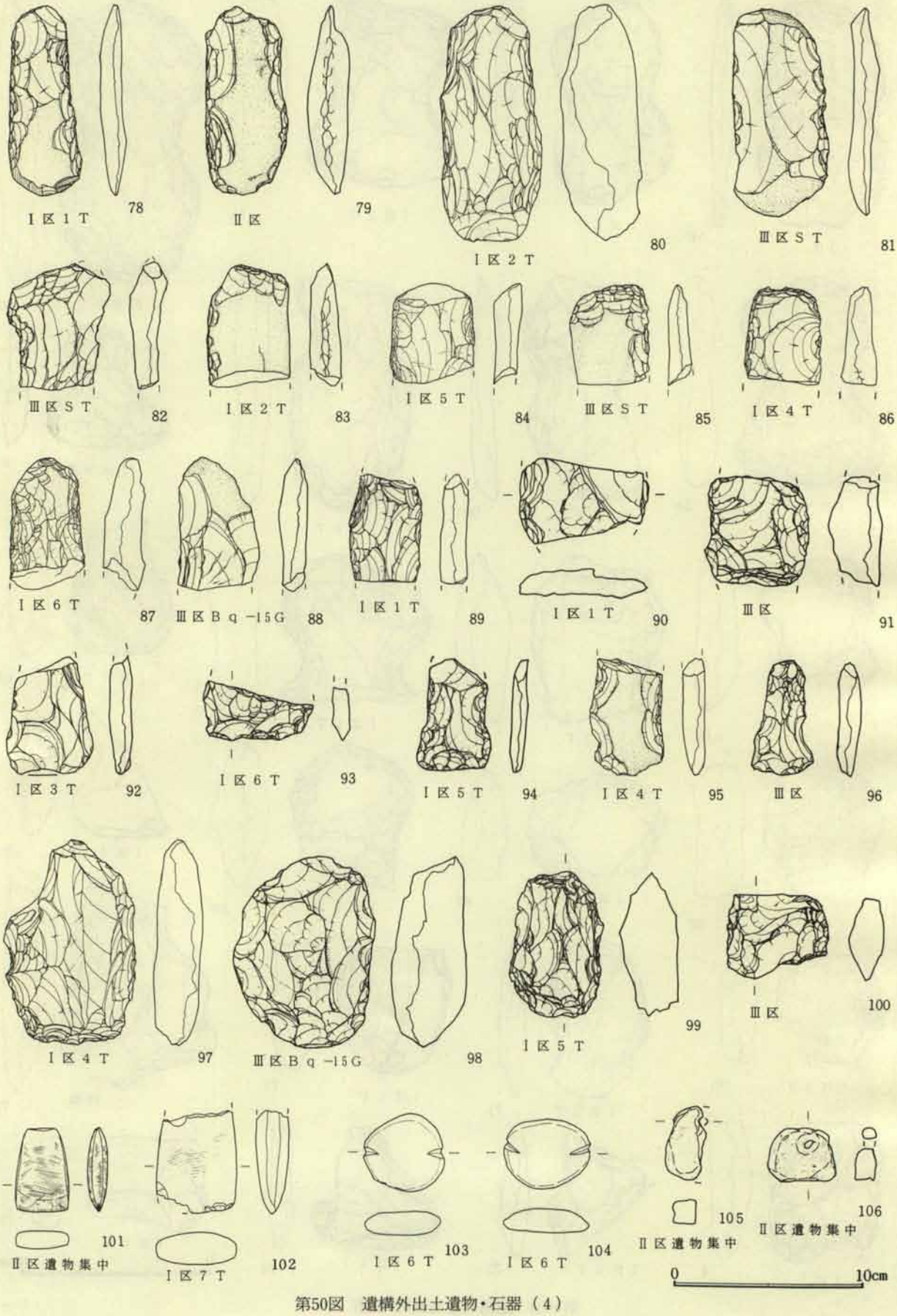
第47図　遺構外出土遺物・石器（1）



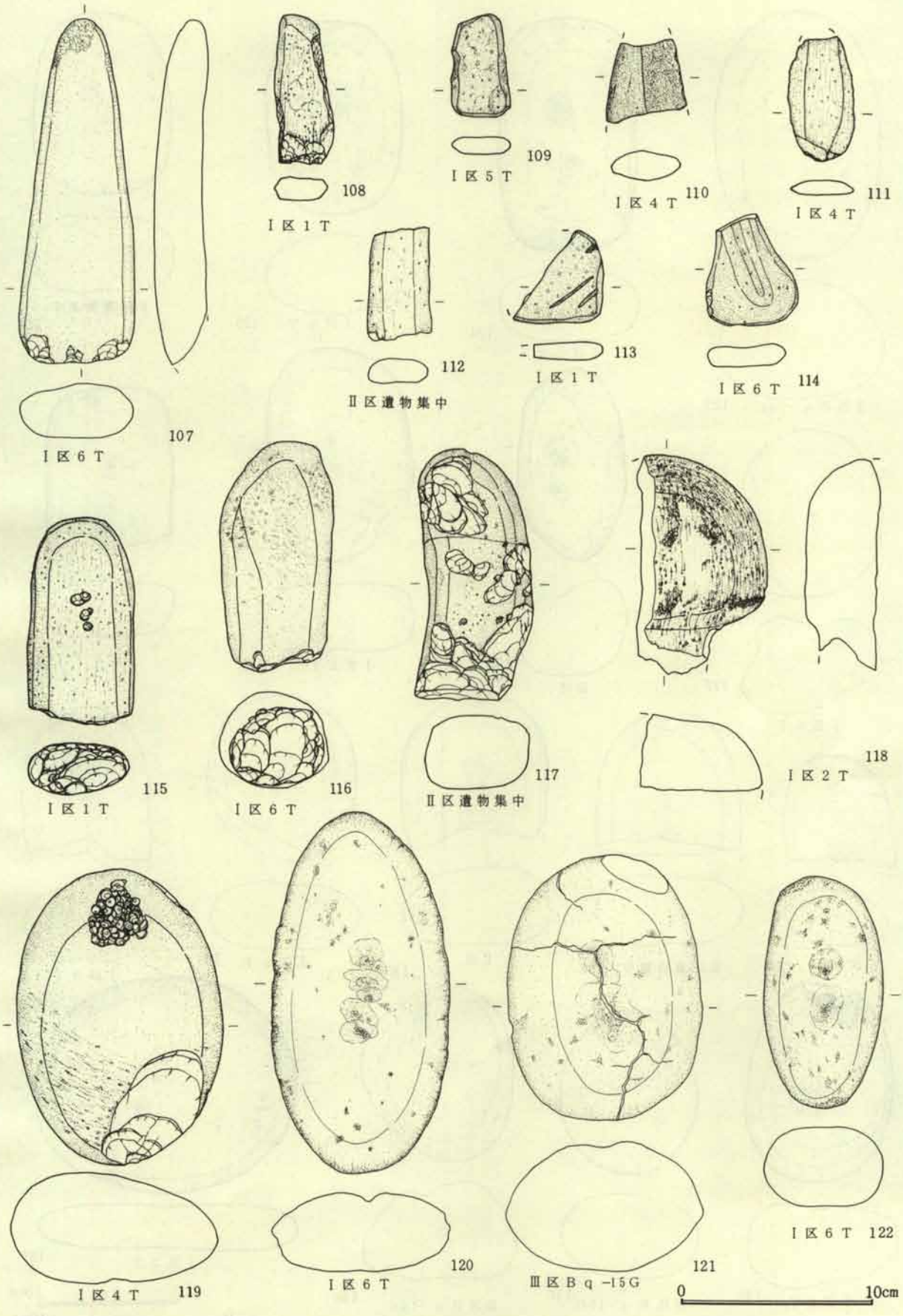
第48図　遺構外出土遺物・石器（2）



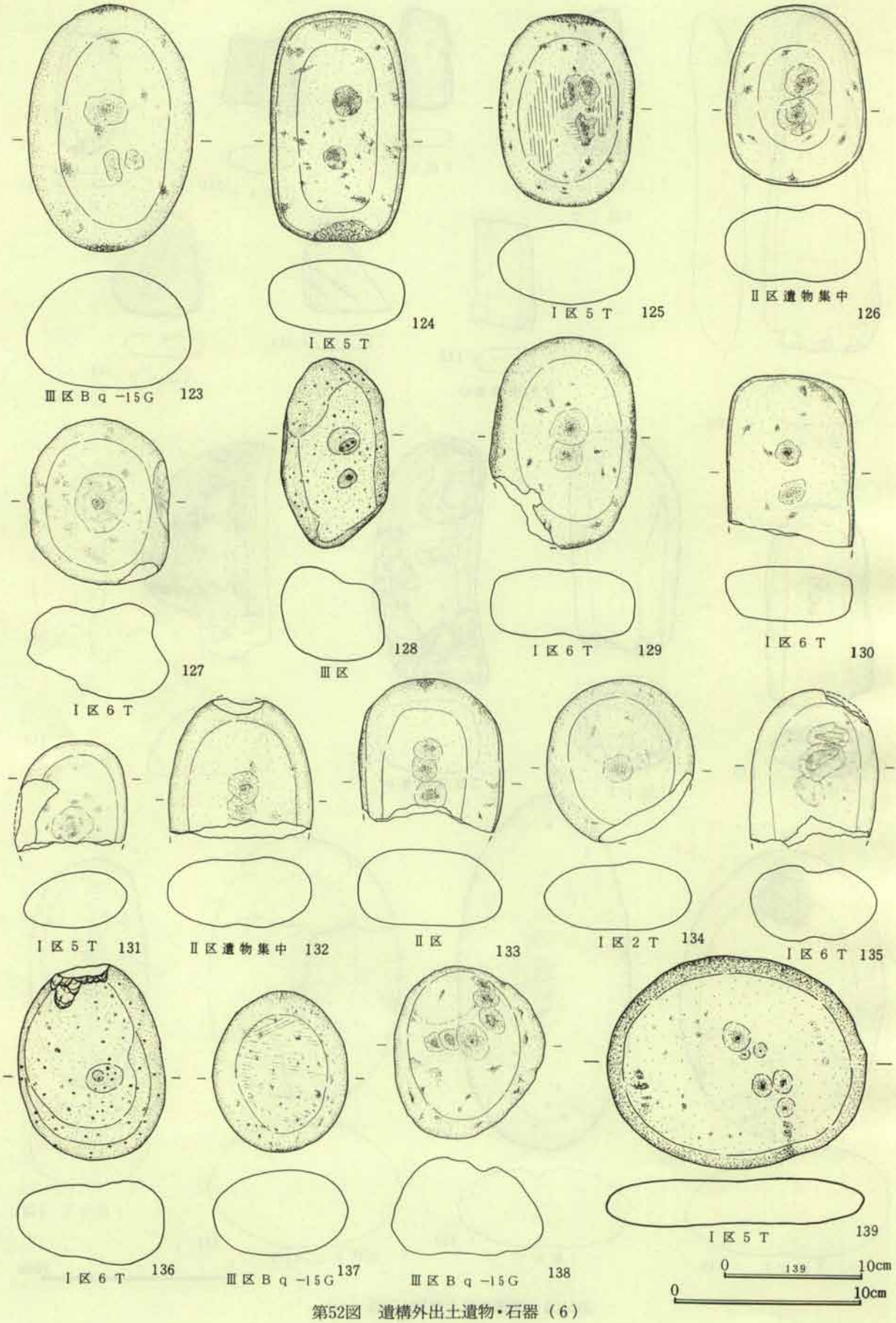
第49図　遺構外出土遺物・石器（3）



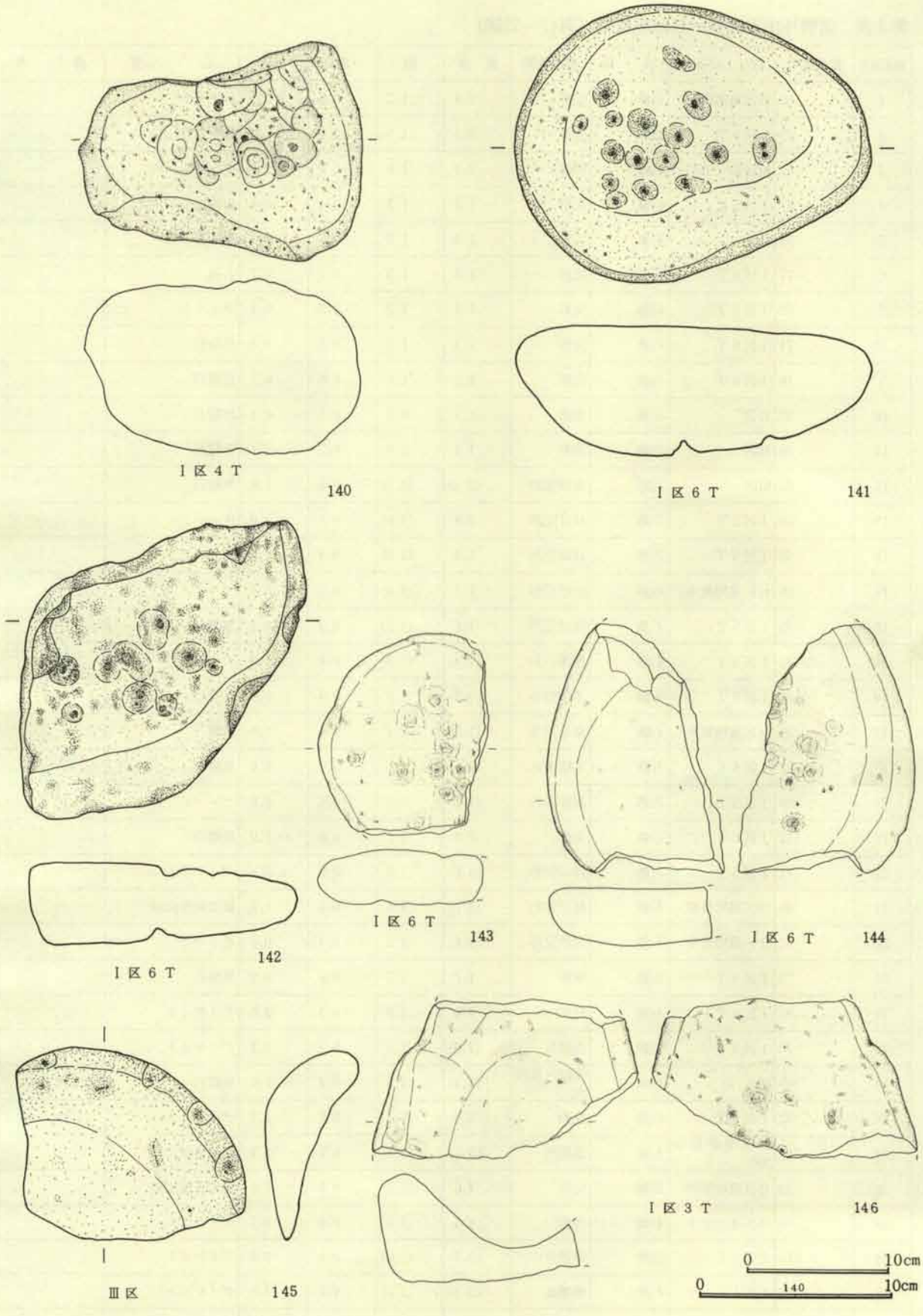
第50図　遺構外出土遺物・石器（4）



第51図　遺構外出土遺物・石器（5）



第52図　遺構外出土遺物・石器（6）



第53図　遺構外出土遺物・石器（7）

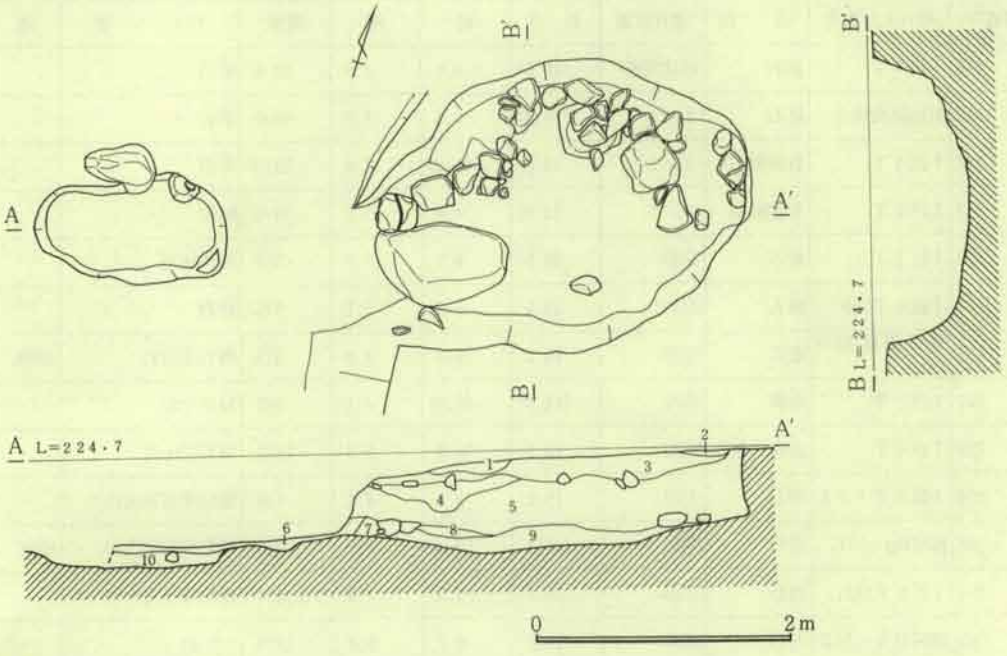
第3表　遺構外出土遺物・石器観察表（第47～53図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重量	石　質	備　考
1	60	II区遺物集中	石鏃	完形	2.9	1.2	0.5	1.4	チャート	
2	75	I区6T	石鏃	完形	3.3	1.9	0.6	3.2	緻密質安山岩	
3	62	III区Br−15G	石鏃	完形	3.1	1.9	0.5	2.5	チャート	
4	67	I区5T	石鏃	完形	1.8	1.2	0.4	0.4	黒曜石	
5	51	II区	石鏃	完形	1.5	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
6	77	I区6T	石鏃	完形	1.5	1.3	0.4	0.7	石英	
7	69	I区5T	石鏃	完形	1.4	1.3	0.3	0.4	チャート	
8	74	I区6T	石鏃	完形	1.3	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
9	76	I区6T	石鏃	完形	1.5	1.5	0.6	0.9	黒曜石	
10	52	II区	石鏃	完形	1.2	0.8	0.3	0.1	黒曜石	
11	50	II区	石鏃	完形	1.2	0.9	0.2	0.1	黒曜石	
12	63	III区	石鏃	ほぼ完形	(2.5)	(2.1)	0.5	1.8	黒曜石	
13	64	I区5T	石鏃	ほぼ完形	2.8	(1.6)	0.3	1.0	チャート	
14	68	I区5T	石鏃	ほぼ完形	1.9	(1.5)	0.4	0.6	チャート	
15	56	II区遺物集中	石鏃	ほぼ完形	1.7	(10.0)	0.3	0.5	デイサイト	
16	65	I区5T	石鏃	ほぼ完形	1.6	(1.2)	0.3	0.2	黒曜石	
17	111	I区5T	石鏃	基部のみ	(1.4)	(2.3)	0.4	1.3	チャート	
18	80	I区6T	石鏃	基部のみ	(0.9)	1.5	0.4	0.5	黒曜石	
19	57	II区遺物集中	石鏃	基部のみ	(1.2)	1.4	0.6	1.0	黒曜石	
20	78	I区6T	石鏃	基部のみ	(0.8)	1.6	0.4	0.6	黒曜石	
21	66	I区5T	石鏃	基部のみ	(1.2)	1.7	0.5	0.9	チャート	
22	112	I区6T	石鏃	完形	2.0	1.7	0.6	1.9	黒曜石	
23	71	I区5T	石鏃	ほぼ完形	(3.6)	2.9	0.8	8.4	デイサイト	
24	55	II区遺物集中	石鏃	ほぼ完形	(2.7)	2.1	0.4	1.8	緻密質安山岩	
25	61	II区遺物集中	石鏃	ほぼ完形	(1.8)	1.2	0.4	0.8	チャート	
26	73	I区6T	石鏃	完形	1.7	1.3	0.7	0.9	黒曜石	
27	84	I区6T	石鏃	完形	3.6	1.8	0.5	2.0	デイサイト	
28	70	I区5T	石鏃	先端欠	(2.6)	2.0	0.4	2.1	デイサイト	
29	109	III区140	石鏃	先端・基部欠	(1.3)	1.3	0.4	0.6	黒曜石	
30	82	I区6T	石錐	完形	4.9	1.1	0.9	4.7	デイサイト	
31	159	II区遺物集中200	石錐	基部欠	(5.1)	(0.8)	0.7	3.1	硝子質安山岩	
32	53	II区遺物集中	石錐	完形	4.6	1.4	0.8	5.6	緻密質安山岩	
33	54	II区遺物集中	石錐	完形	4.3	1.2	0.6	3.7	デイサイト	
34	113	I区7T	石錐	錐部欠	(3.2)	(1.6)	0.5	2.5	デイサイト	
35	125	I区1T	石錐	錐部欠	(3.3)	(2.2)	0.7	4.6	デイサイト	
36	117	I区6T	石錐	錐部欠	(1.8)	1.0	0.7	0.9	黒曜石	

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器種	遺存状態	長さ	幅	厚	重量	石質	備考
37	110	II区遺物集中	石錐	錐部欠	(2.1)	1.9	0.6	2.7	硝子質安山岩	
38	59	II区遺物集中	石錐	完形	2.2	1.9	0.4	1.3	緻密質安山岩	
39	72	I区5T	石匙	完形	3.3	6.2	0.9	16.6	デイサイト	
40	81	I区6T	石匙	完形	1.2	2.5	0.5	0.8	黒曜石	
41	156	III区ST	スクレーパー	完形	6.2	11.7	2.1	116	デイサイト	
42	11	III区Bq−15G	スクレーパー	ほぼ完形	(7.3)	(3.8)	1.5	37.0	緻密質安山岩	
43	58	II区遺物集中	スクレーパー	ほぼ完形	(1.9)	1.6	0.3	1.1	デイサイト	
44	29	I区5T	スクレーパー	完形	4.6	5.8	1.6	37.0	緻密質安山岩	
45	83	I区6T	スクレーパー	完形	2.3	1.6	0.4	1.0	黒曜石	
46	79	I区6T	スクレーパー	完形	1.4	1.4	0.4	0.6	黒曜石	
47	116	I区5T	スクレーパー	完形	2.6	2.4	0.8	3.8	珪質頁岩	
48	115	I区5T	ピエス・エスキーユ	完形	2.2	1.9	1.4	3.8	黒曜石	
49	150	III区	ピエス・エスキーユ	完形	2.3	3.5	1.1	8.5	チャート	
50	32	I区6T260	打製石斧	完形	11.4	7.4	2.5	260	緻密質安山岩	
51	36	I区6T	打製石斧	完形	11.3	6.5	3.0	216	緻密質安山岩	
52	31	I区6T247	打製石斧	完形	10.9	6.6	1.6	145	デイサイト	
53	38	I区6T	打製石斧	完形	9.5	5.8	1.6	97	緻密質安山岩	
54	7	II区	打製石斧	完形	12.2	7.0	1.4	128	デイサイト	
55	37	I区6T	打製石斧	完形	11.0	6.4	1.9	156	デイサイト	
56	21	I区2T	打製石斧	完形	9.8	7.9	3.4	269	デイサイト	
57	33	I区6T265	打製石斧	完形	15.4	7.8	2.1	271	デイサイト	
58	34	I区6T270	打製石斧	完形	11.3	8.0	1.9	206	デイサイト	
59	145	I区6T275	打製石斧	完形	12.0	6.5	1.7	110	緻密質安山岩	
60	35	I区6T271	打製石斧	完形	12.5	9.4	1.7	186	デイサイト	
61	146	I区6T	打製石斧	ほぼ完形	6.6	6.5	1.3	43.2	粘版岩	
62	8	II区	打製石斧	ほぼ完形	(8.1)	6.1	2.3	144	デイサイト	
63	19	I区2T	打製石斧	刃部欠	(9.0)	(7.0)	3.0	222	安山岩	
64	20	I区2T	打製石斧	刃部欠	(7.9)	(8.1)	2.7	185	緻密質安山岩	
65	39	I区6T	打製石斧	基部欠	(7.3)	5.8	2.1	92	デイサイト	
66	40	I区6T	打製石斧	刃部欠	(7.3)	(6.4)	2.9	146	デイサイト	
67	42	I区7T14	打製石斧	刃部欠	(5.7)	(7.7)	2.3	113	緻密質安山岩	
68	26	I区5T	打製石斧	1／2	(7.3)	(6.8)	3.0	166	緻密質安山岩	
69	131	I区4T	打製石斧	1／2	(6.8)	(5.0)	1.8	44.0	粘板岩	
70	28	I区5T	打製石斧	1／2	(6.0)	(5.8)	1.9	80	デイサイト	
71	25	I区5T	打製石斧	2／3	(8.6.	(5.4)	1.4	67	緻密質安山岩	
72	121	I区1T	打製石斧	基部欠	(6.8)	6.3	2.4	133	ホルンフェルス	
73	9	炭窯覆土	打製石斧	基部欠	(10.0)	4.4	2.2	186	緻密質安山岩	

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重量	石　質	備　考
74	134	I区5T	打製石斧	1／2	(7.6)	6.0	2.4	118	ホルンフェルス	
75	133	I区5T	打製石斧	1／2	(6.8)	(5.7)	1.7	48.0	ホルンフェルス	
76	124	I区1T	打製石斧	2／3	(6.7)	6.8	1.2	41.0	デイサイト	
77	114	I区5T	打製石斧	刃部のみ	(2.2)	2.9	0.8	7.3	安山岩質凝灰岩	
78	15	I区1T	打製石斧	完形	10.1	3.8	1.2	57	緻密質安山岩	
79	6	II区	打製石斧	完形	11.2	8.7	1.9	121	デイサイト	
80	18	I区2T	打製石斧	完形	12.6	5.5	4.1	392	デイサイト	
81	13	III区ST	打製石斧	完形	11.2	5.0	1.4	89	デイサイト	
82	14	III区ST	打製石斧	1／2	(6.8)	(5.7)	1.8	66	硝子質安山岩	
83	17	I区2T	打製石斧	基部のみ	(6.6)	(4.4)	1.6	72	デイサイト	
84	30	I区5T	打製石斧	基部のみ	(5.4)	(5.6)	1.5	47.0	デイサイト	
85	12	III区ST	打製石斧	基部のみ	(5.3)	(4.2)	1.2	41.0	デイサイト	
86	22	I区4T	打製石斧	基部のみ	(5.1)	(4.2)	1.7	49.0	緻密質安山岩	
87	41	I区6T	打製石斧	刃部欠	(7.1)	(4.0)	2.3	75	緻密質安山岩	
88	10	III区Bq－15G	打製石斧	基部のみ	(7.1)	(4.5)	1.4	52	デイサイト	
89	16	I区1T	打製石斧	基部・刃部欠	(5.8)	(3.7)	1.5	50	緻密質安山岩	
90	122	I区1T	打製石斧	基部・刃部欠	(4.6)	(6.9)	1.5	57	凝灰岩	
91	148	III区遺物集中93	打製石斧	基部・刃部欠	(5.8)	5.5	2.9	102	緻密質安山岩	
92	128	I区3T	打製石斧	基部欠	(6.2)	4.6	1.1	42.8	凝灰岩	
93	147	I区6T	打製石斧	刃部	(3.2)	5.9	1.0	20.2	ホルンフェルス	
94	135	I区5T	打製石斧	基部欠	(6.0)	4.0	0.9	27.8	安山岩質凝灰岩	
95	24	I区4T	打製石斧	基部欠	(6.2)	3.9	1.2	45.0	デイサイト	
96	158	III区176	打製石斧	完形	6.1	3.3	1.1	22.4	デイサイト	
97	23	I区4T	打製石斧	完形	11.0	7.0	2.6	239	デイサイト	
98	155	III区Bq－15G	打製石斧	完形	10.2	7.5	4.0	337	デイサイト	
99	132	I区5T1	打製石斧	完形	7.8	5.0	3.2	144	緻密質安山岩	
100	149	III区	打製石斧	基部のみ	(4.4)	5.4	1.9	62	安山岩質凝灰岩	
101	44	II区遺物集中44	磨製石斧	完形	4.5	3.0	1.1	24.0	滑石	
102	45	I区7T	磨製石斧	刃部のみ	(5.5)	4.4	1.8	77	斑励岩	
103	47	I区6T	石錘	完形	4.3	4.4	1.4	35.0	緻密質安山岩	
104	46	I区6T	石錘	完形	4.7	3.9	1.3	34.0	緻密質安山岩	
105	161	II区遺物集中	垂飾	1／2	(4.1)	(2.1)	1.3	3.3	軽石（角閃石含む）	
106	160	II区遺物集中	垂飾	完形	3.0	3.6	1.1	3.7	軽石（角閃石含む）	
107	43	I区6T67	棒状石器	完形	11.8	6.2	2.9	516	珪長岩	
108	123	I区1T	棒状石器	完形	7.9	3.1	1.2	49.0	緑色片岩	
109	140	I区5T	砥石	完形	5.4	3.1	0.9	19.4	砂岩	
110	139	I区4T	砥石	1／2	(4.4)	(4.3)	1.5	27.2	砂岩	

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重量	石　質	備　考
111	138	I区4T	砥石	ほぼ完形	(6.6)	3.6	0.8	22.6	砂岩	
112	143	II区遺物集中	砥石	1／2	(6.0)	3.4	1.3	35.0	砂岩	
113	141	I区1T	有溝砥石	2／3	(4.9)	(4.8)	1.0	22.0	砂岩	
114	142	I区6T	有溝砥石	4／5	(5.9)	4.8	1.2	33.0	砂岩	
115	120	I区1T	敲石	完形	10.9	5.7	2.8	324	石英斑岩	
116	144	I区6T269	敲石	完形	12.1	5.9	5.1	575	砂岩	
117	157	II区遺物集中141	敲石	完形	13.2	6.2	3.9	529	輝石安山岩	被熱
118	127	I区2T	石棒	破片	(11.6)	(6.9)	4.1	485	緑色片岩	
119	129	I区4T	磨石・敲石	完形	15.7	10.9	5.9	1492	輝石安山岩	
120	104	I区6T181	凹石	完形	19.2	9.4	4.4	758	粗粒輝石安山岩	
121	92	III区Bq－15G	凹石	完形	14.1	10.3	7.2	996	粗粒輝石安山岩	被熱
122	101	I区6T103	凹石	完形	12.2	6.5	4.4	494	粗粒輝石安山岩	
123	93	III区Bq－15G	凹石	完形	13.2	8.7	6.4	1078	ヒン岩	
124	99	I区5T	凹石	完形	12.5	7.3	3.9	606	粗粒輝石安山岩	
125	98	I区5T	凹石	完形	10.4	7.2	4.5	452	粗粒輝石安山岩	
126	89	II区遺物集中	凹石	完形	9.8	7.4	4.3	472	粗粒輝石安山岩	
127	107	I区6T268	凹石	完形	8.9	7.6	5.6	364	粗粒輝石安山岩	
128	154	III区遺物集中217	凹石	完形	10.1	5.7	5.0	366	粗粒輝石安山岩	
129	105	I区6T218	凹石	ほぼ完形	11.3	7.8	3.8	531	粗粒輝石安山岩	
130	106	I区6T228	凹石	3／4	(9.2)	6.9	3.2	278	粗粒輝石安山岩	
131	100	I区5T	凹石	1／2	(6.1)	5.7	3.1	144	粗粒輝石安山岩	
132	90	II区遺物集中	凹石	1／2	(7.8)	7.8	3.5	279	粗粒輝石安山岩	
133	91	II区	凹石	2／3	(8.0)	8.7	4.1	401	粗粒輝石安山岩	
134	96	I区2T	凹石	ほぼ完形	9.0	8.0	3.7	335	粗粒輝石安山岩	
135	108	I区6T	凹石	2／3	(8.5)	6.8	4.4	373	粗粒輝石安山岩	
136	137	I区6T13	凹石	完形	10.5	7.9	4.6	542	輝石安山岩	
137	94	III区Bq－15G	磨石	完形	8.8	7.3	4.8	418	粗粒輝石安山岩	
138	95	III区Bq－15G	凹石	完形	9.4	8.1	6.1	517	粗粒輝石安山岩	
139	167	I区5T120	凹石	完形	18.1	15.0	3.0	1439	粗粒輝石安山岩	
140	130	I区4T	多孔石	完形	11.3	14.8	9.1	1582	軽石	
141	164	I区6T307	多孔石	完形	25.0	19.4	9.2	4489	粗粒輝石安山岩	
142	166	I区6T226	多孔石	完形	19.4	20.6	5.6	2456	粗粒輝石安山岩	
143	102	I区6T144	多孔石	完形	14.0	11.4	4.4	931	粗粒輝石安山岩	
144	103	I区6T151	石皿	1／3	(17.4)	(11.5)	4.0	1128	粗粒輝石安山岩	
145	163	III区223	石皿	1／4	(13.2)	(18.0)	5.4	1220	粗粒輝石安山岩	
146	97	I区3T	石皿	1／4	(19.4)	(11.6)	2.0	1355	粗粒輝石安山岩	



炭窯土層説明

1層　暗褐色土層　ローム粒子、焼土粒子、黄白色軽石混入。
2層　赤褐色土層　焼土粒子混入。
3層　暗褐色土層　炭化物、ローム粒子、焼土ブロック・粒子、黄白色軽石混入。
4層　赤褐色土層　焼土ブロック・粒子と黄白色軽石混入暗褐色土の混土（ラミナを呈する）。
5層　赤褐色土層　焼土ブロック・粒子、粘土ブロック混入。
6層　暗褐色土層　ローム粒子、黄白色軽石混入。
7層　暗褐色土層　炭化物混入。
8層　黒褐色土層　炭化物混入。
9層　黄褐色土層　焼土化した黄白色軽石、ローム粒子の層。
10層　黒褐色土層　ローム粒子、炭化物混入（ラミナを呈する）。

第54図　炭窯平・断面図

第Ⅴ章　近世以降の遺構

第1節　炭窯

本遺構は、II区の北部(Bb—13•14G)、標高223.8～224.7mに位置する。確認面は表土を除去したローム面であった。

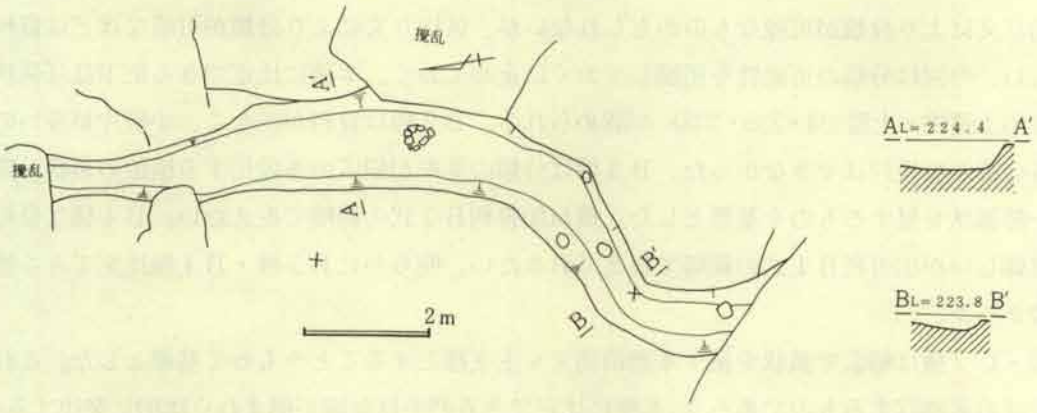
平面形態は、楕円を長軸方向で2つ接合したようなやや間延びしたダルマ形を呈し、全長5.82m、燃成室の最大幅は2.30m、燃焼室の最大幅は0.80mを測るが、焚き口部の形状等は道状遺構によって切られ不明。主軸方向はN—36°—Eである。

燃成室・燃焼室ともに床面は中央部が皿状に窪むが、レベルはほぼ水平を呈する。また、燃成室北部の床面には扁平な礫を敷き詰めた状況で残される。操業の際には床全面に敷かれていた可能性もある。

天井部は確認できない。壁は奥壁がオーバーハング気味に垂直な立ち上がりを呈するが、他の壁はやや緩やかに立ち上がる。壁高は燃成室で45～54cmを測るが、燃焼室は道状遺構に切られ6～15cmと低い。

覆土は焼土粒子を含む黄褐色土や暗褐色土が堆積し、分層できるが、堆積状況から操業回数の比定はできない。

煙道部は確認できなかった。出土遺物も本遺構に伴うものは皆無であり、出土遺物からは時期を比定できないが、その形状から近世以降の所産と思われる。



第55図　道状遺構平・断面図

第２節　道状遺構

本遺構は、II区の中央部（At・Ba・Bb—13・14G）に位置する。竈の北の標高224.2m付近を先端部として蛇行しながら南進する。溝状の形態をとり、断面形は西部の立ち上がりが斜面に吸収され不明瞭ではあるが箱状を呈する。底部はやや堅緻であるので道として機能したものと判断する。確認された全長は約６m、幅は最大で78cm、深さは18cmを測る。地籍図の地割りと一部で一致するが、詳細は不明。

第VI章　調査のまとめ

第１節　縄文時代後期前葉から中葉の土器について

本遺跡の出土遺物の中心は、縄文時代後期の前葉から中葉の土器であることは、言うまでもない。この時期は土器形式で言うと堀之内１式・同２式、加曽利Ｂ１式・同２式・同３式の各土器形式に当たる。また、本報告書作成の際用いた縄文土器の分類は、これらの形式による分類でなく、整理のための分類であり、本報告書では第Ｖ群として記載した土器群がこれにあたる。

ここでは、これら第Ｖ群として分類した土器群のうち本文中で土器形式に当てはめなかった当該期のの土器のうち３類とした精製土器について、土器形式の検討を行う。

第４表に、この第Ｖ群３類の土器についてまとめてみた。これを参考にして以下個々に検討を加えてみたい。

３類Ａ１種については分類の基準としたものは隆線及び「８」の字状の貼付で、これらから堀之内２式に比定できよう。Ａ２種については堀之内１式の終わりから２式の初期の範疇でよかろう。Ａ３種とした土器はＡ１種・Ａ２種のいずれか判断しかねる破片があるが、概ね堀之内２式の範疇に収まるものと考えていいであろう。なお、本種に比定できる把手は多くないが、低く小さめの把手及び円筒状の把手（遺構外出土遺物・土器の326～329、331～333）が認められる。

Ｂ１種とした土器は多段化した横位の帯状の縄文帯をもってその分類の基準とした。よって、加曽利

B１式に相当するものと考えて良いものと思われる。また、本種は、各種の区切り文がみられ、さらにこの区切り文により分類が可能なものかもしれないが、区切り文により分類が可能なほどは資料に恵まれていない、今回は分類の可能性を指摘しておくに止めておく。本種に比定できる把手は耳朶状の把手（遺構外出土遺物・土器334・336・338）が認められる。Ｂ２種は資料が少なく、小破片が多いので、文様構成等の細かな検討はできなかった。Ｂ３種は分類の基準が幅広の多段化する横位の帯状の縄文帯を持ち、一部弧状を呈するものを基準とした。概ね加曽利Ｂ２式の範疇で捉えたい。Ｂ４種は資料が少なく比定は難しいが加曽利Ｂ１式の範疇で捉えておきたい。明らかにＢ３種・Ｂ４種比定できる把手は見当たらなかった。

Ｃ１種・Ｃ２種は幅広で弧状を呈する磨消縄文を主文様とすることをもって基準とした。これらは加曽利Ｂ２式の範疇収まるものであろう。本種に比定できる把手は両脇が摘まれ立体的に突出する把手（遺構外出土遺物・土器339～344・346～351）が認められる。なお、Ｃ３種とした胴部破片の中には加曽利Ｂ３式の範疇に含まれる可能性もある。

Ｄ種と分類したものはほとんどが矢羽根状の沈線を種文様とするＤ１種で、加曽利Ｂ２式の範疇に収まるものと思われる。Ｄ２種・Ｄ３種については、出土量が少ないので今回は形式の比定は見合わせる。

加曽利Ｂ３式については遺構外出土遺物・土器345の把手が相当するかもしれない。

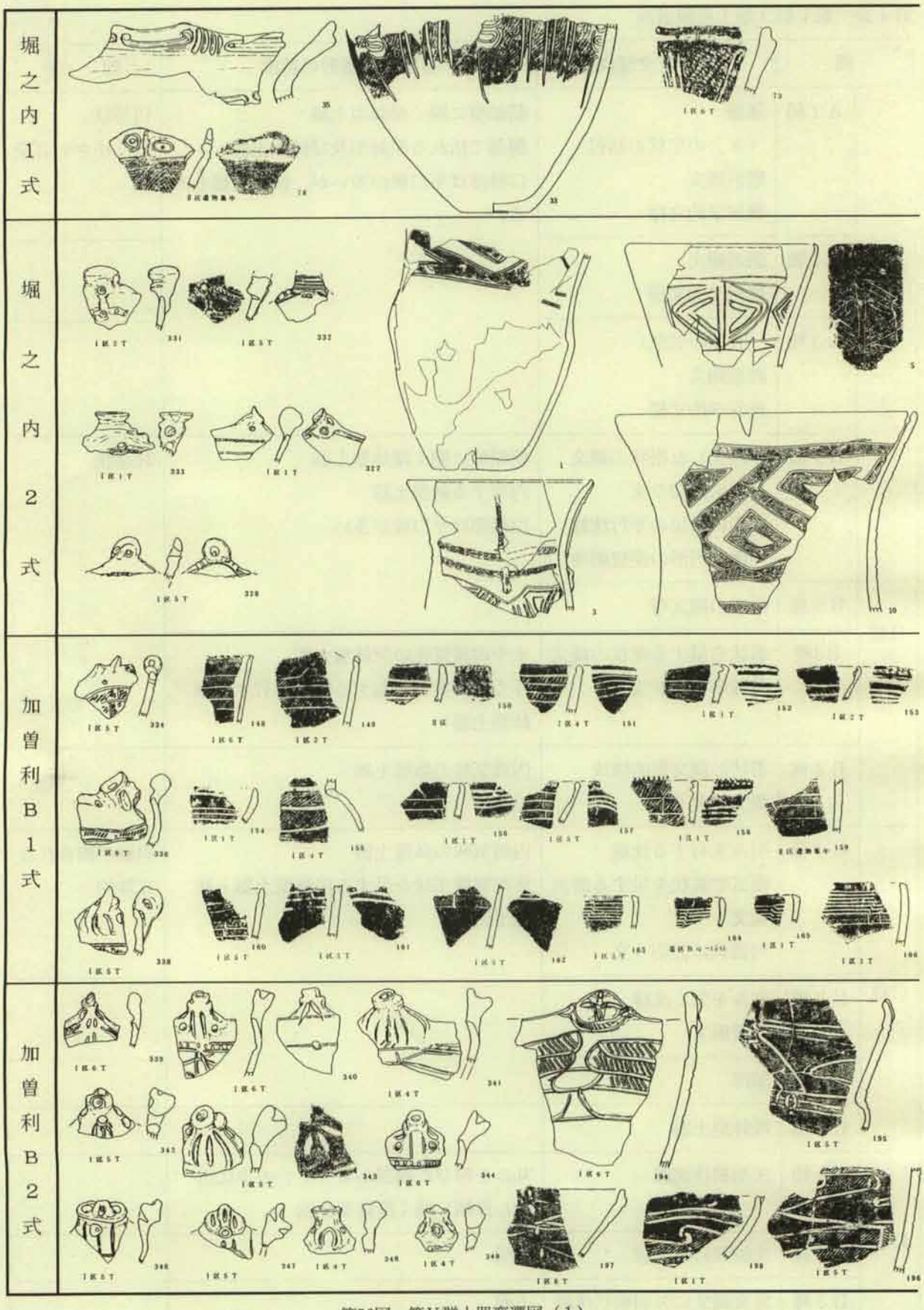
以上、大まかではあるが本遺跡の土器について検討を行った。これらから本遺跡の形成時期は住居址を検出した堀之内１式・同２式及び出土量において他に秀でる加曽利Ｂ１式・同２式を主とする遺跡であることが判明する。

参考文献

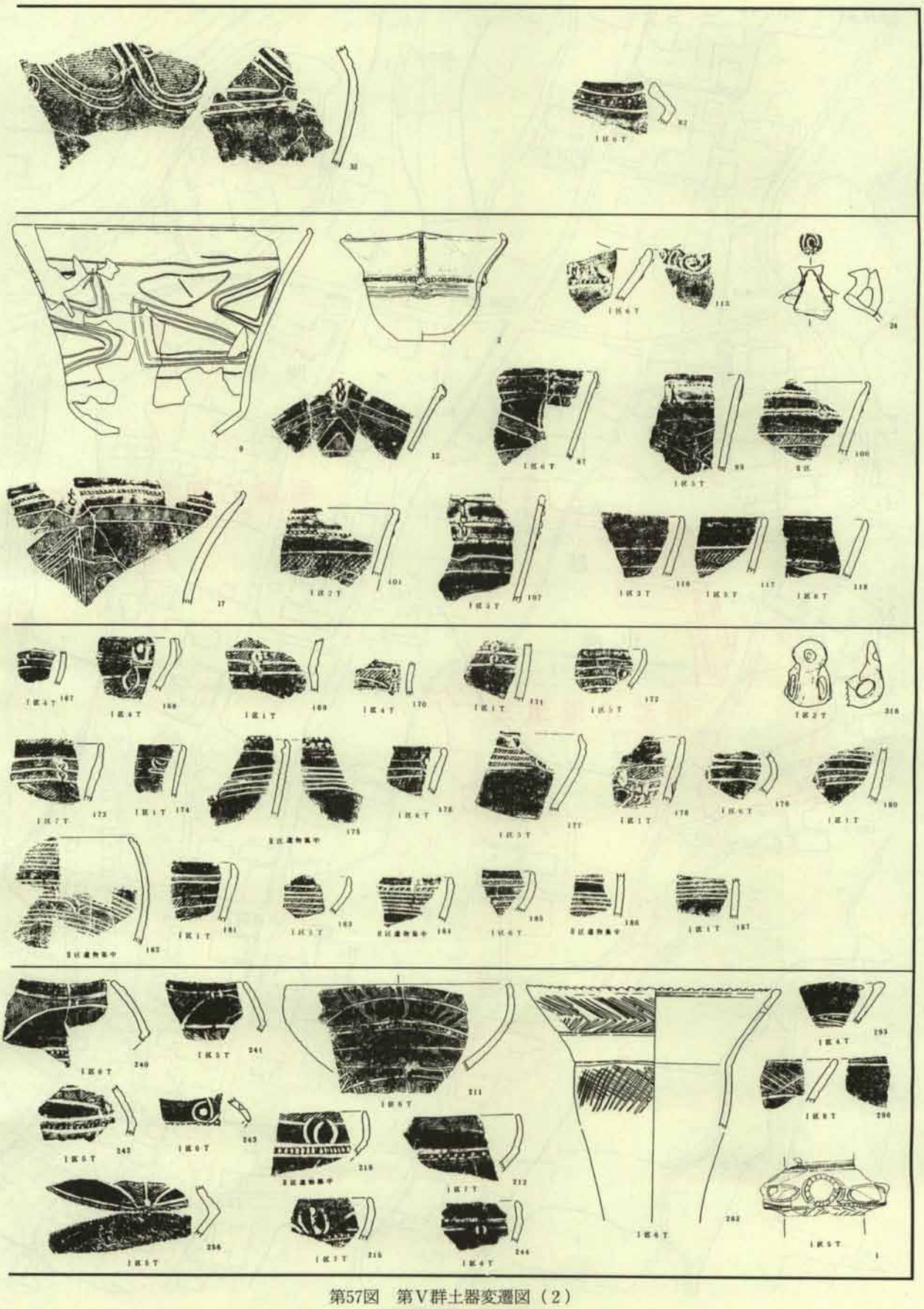
初山孝行ほか　1984　『伯仲遺跡』　（財）栃木県文化振興事業団
藤巻幸男・能登健　1988　「布施遺跡」　「群馬県史　資料編１」
下城正　1988　『深沢遺跡　前田原遺跡』　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
我孫子昭二　1988　「加曽利Ｂ様式土器の変遷と年代（上）」　『東京考古』６
我孫子昭二　1989　「加曽利Ｂ様式土器の変遷と年代（下）」　『東京考古』７
西田泰民　1989　「堀之内・加曽利Ｂ式土器様式」　『縄文土器大観４』　小学館
外山和夫ほか　1989　「板倉遺跡」　『板倉町史　別巻９　資料編板倉町の遺跡と遺物』
橋本勉ほか　1990　『雅楽谷遺跡』　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
近江屋成陽ほか　1991　『横俵遺跡群Ⅱ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
領塚正浩　1992　「堀之内貝塚出土の堀之内式土器」　『堀之内貝塚資料図譜』　私立市川考古博物館
鈴木公雄ほか　1994　『国指定史跡　上高津貝塚Ａ地点』　茨城県土浦市教育委員会
大工原豊ほか　1994　『中野谷地区遺跡群』　安中市教育委員会
近野正幸ほか　1995　『宮ケ瀬遺跡群Ⅴ　馬場（No.6）遺跡』　（財）かながわ考古学財団
小川和博ほか　1995　『中妻貝塚』　取手市教育委員会
秋田かな子ほか　1996　『第９回　縄文セミナー　後期中葉の諸様相』　縄文セミナーの会

第4表　第V群3類土器観察表

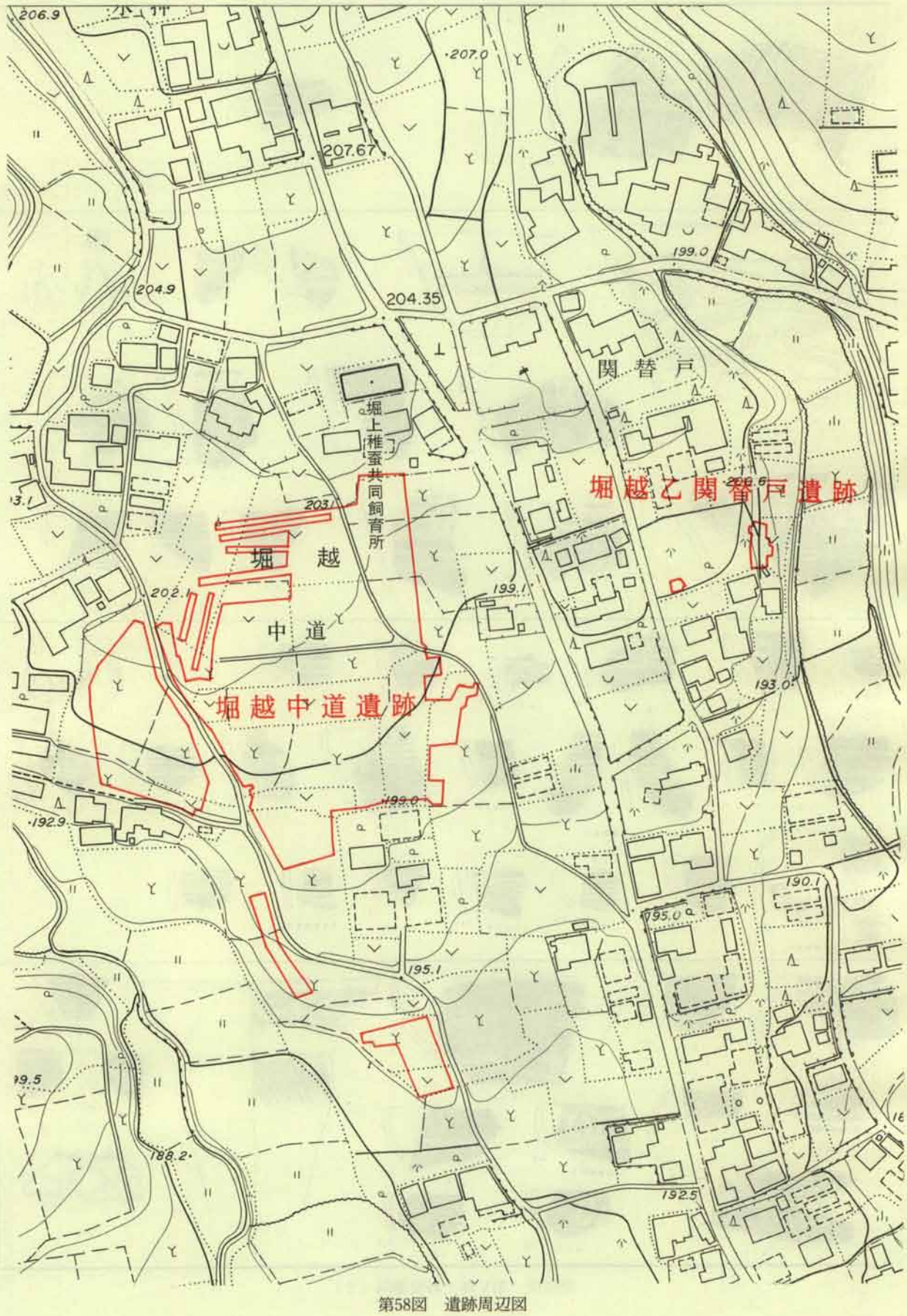
種		文様及び文様構成	器形及び器形の特徴	把　手
A種	A1種	隆線 「8」の字状の貼付 磨消縄文 幾何学的文様	朝顔型に開く深鉢型土器 胴部で括れる深鉢型及び鉢形土器 口縁部は平口縁が多いが、波状口縁もある。	円筒状 低く小さい耳朶状
	A2種	磨消縄文 幾何学的文様		
	A3種	（A種の胴部） 磨消縄文 幾何学的文様		
B種	B1種	多段化した帯状の縄文 各種の区切り文 内面に横位の平行沈線 内面に円形の連続刺突	朝顔型に開く深鉢型土器 内湾する鉢型土器 口縁部は平口縁が多い	耳朶状
	B2種	幅広の縄文帯		
	B3種	弧状を呈する帯状の縄文 各種の区切り文	やや内湾気味の深鉢型土器 「く」の字に屈曲する体部を有する深鉢型土器	
	B4種	帯状の縄文帯的構成 縄文を欠く	内湾気味の鉢型土器	
C種	C1種	刻みを有する沈線 幅広で弧状を呈する磨消縄文 対弧状の区切り文	内湾気味の鉢型土器 体部算盤玉状を呈する深鉢型土器・鉢型土器	両脇が摘まれる立体的
	C2種	刻みを欠く沈線 磨消縄文		
	C3種	胴部		
	C4種	浅鉢型土器		
D種	D1種	矢羽根状沈線	丸みを帯びた胴部から「く」の字に屈曲し外傾し開く深鉢型土器	
	D2種	沈線間に短沈線	不明	
	D3種	地文縄文に矢羽根状沈線	不明	



第56図　第Ⅴ群土器変遷図（1）



第57図　第Ⅴ群土器変遷図（2）



206.9
207.0
207.67
204.9
204.35
199.0
関替戸
堀上稚蚕共同飼育所
203.1
堀越乙関替戸遺跡
堀越
中道
202.1
199.1
193.0
堀越中道遺跡
199.0
192.9
190.1
195.0
195.1
188.2
192.5

第58図　遺跡周辺図

堀越乙関替戸遺跡

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過

堀越乙関替戸遺跡は、平成5年度の工事実施予定地区の内の大字堀越字乙関替戸において実施した事前の試掘・確認調査において発見・確認された遺跡である。現地の状況は、本調査においてⅠ区と呼称した地区は竹林で、工事実施に先立ち竹の伐採・抜根終了後に試掘・確認調査を実施し1軒の竪穴住居址を検出し、引き続いて本調査を実施した。また、本調査においてII区と呼称した地区は畑であったが前年度である平成4年度に試掘・確認調査を実施し、1軒の竪穴住居址を確認しており、平成5年度に入り本調査を実施したものである。

平成5年度事業の実施に当たり、工事の内容が明らかとなった段階で、本遺跡はⅠ区には東の低地へ降りるための農道が作られることが判明、また、II区はⅠ区および東の低地との間に極端な比高差があり、ほ場整備にあたっては、土地の大幅な改変が計画されていることが判明した。そこで、教育委員会は発掘調査を実施し記録保存を図ることで前橋土地改良事務所と協議の結果を見た。

本調査は前橋土地改良事務所との間に調査委託契約を締結、横沢新屋敷・横沢宇持遺跡に引き続いて調査を開始した。

現地での発掘調査は11月11日の土木重機による表土除去で開始され横沢新屋敷遺跡・横沢宇持遺跡の一部の作業と平行して平成6年1月27日まで実施した。引き続き3月25日まで遺物洗浄・遺物注記等の基本整理を実施し平成5年度の事業は終了した。本書の刊行および出土遺物の整理・保管・記録資料の整理は、断続的であるが平成6年度から平成9年度にわたり実施し、本遺跡に係わる事業のすべては完了した。

第II章　遺跡の立地と環境

第1節　遺跡の位置

本遺跡は、大胡町の北西部の大字堀越字乙関替戸に所在し、上毛電鉄大胡駅の北北西約1.65km、大胡町立大胡小学校の北北西約1.10kmに当たる。遺跡地は、南に長く延びる舌状台地の東側に位置する。遺跡を載せる台地は、開析谷によって東西を分断される南北に長い舌状台地で東西幅約375mを遺跡地で測る。

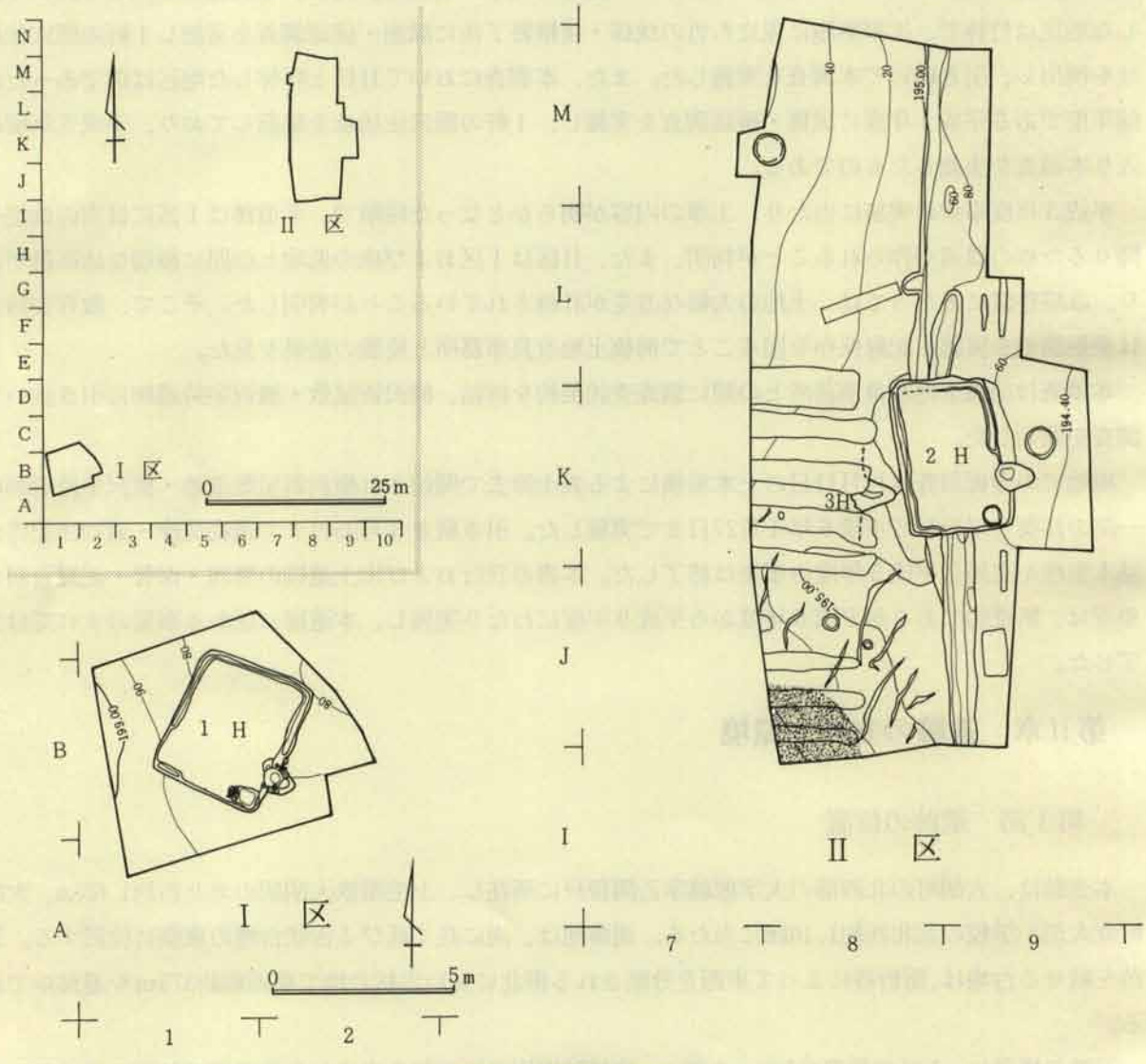
遺跡の標高は、Ⅰ区で最高の199mを測り、住居跡周辺で平坦部を構成し台地沿辺でII区の平坦部に向かって急激に傾斜する。II区との比高差は約4m、東部の開析谷との標高差はさらに3mを測る。

第２節　周辺の遺跡

本遺跡の周辺において、周知・確認されている遺跡としては堀越中道遺跡（17）が南西方約200mに所在する。この堀越中道遺跡とは同一の洪積台地上に位置するが、やや浅い谷地により分断される。

また、遺跡を載せる洪積台地は舌状を呈し南北に長く伸びる。そして、この舌状の台地上には、他に堀越西一丁田遺跡・甲諏訪遺跡（３）が所在する。

第Ⅲ章　調査の方法及び遺跡の層序



第59図　遺跡区全体図

第１節　調査の方法

調査にあたっては、国家座標Ⅸ系（X＝47270.0、Y＝－60700.0）を基準とする５m×５mのグリッドを設定した。グリッド名は南北方向に南からA～Nの14区、東西方向に１～10の10区を設定し、南西

コーナーの杭をもって呼称した。したがって、(大文字アルファベット)－(算用数字)、A－5Gのように表現した。

調査は、土木重機による表土除去後ジョレンがけにより遺構検出・プラン確認を図り、必要に応じ土層確認用のベルトを設定し各遺構の精査を実施した。

遺跡の記録図面は、遺構図がS＝1：20を基本として、必要に応じS＝1：10の詳細図で記録した。調査区の全体図はS＝1：100で記録した。

記録写真は35㎜の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い逐次撮影した。

第2節　遺跡の層序

遺跡における、基本土層の把握のための調査は実施しなかった。

I区においては、竹の根による撹乱土を除去するとやや軟らかいローム質土となり、この面が遺構確認となる。II区においては、耕作土を除去すると均質でやや軟質な暗褐色土となり、この面が遺構確認面となる。また、II区の南西部では、耕作土を除去すると大胡軽石層が露呈し、過去において土地が大きく改変されたことが窺える。

第Ⅳ章　縄文時代の遺物

本遺跡において検出された当該期の以降はなく、遺物の出土を見たのみである。遺物は前期から中期に渉る。

第1節　遺構外出土縄文時代遺物

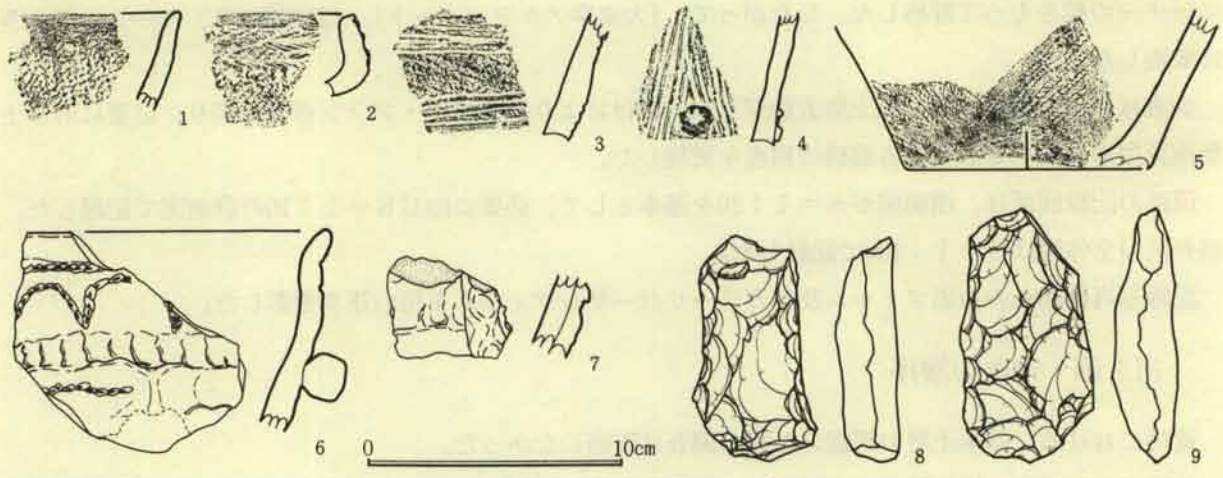
遺構外からは縄文時代前期から中期にかけての土器が数点出土している。

1～3は、前期諸磯B式土器。1は単節RL縄文を施す口縁部破片。2は地文に単節LR縄文を施し浮線文を横位に施す口縁部破片。3は地文に単節LR縄文を施し、平行沈線を横走させる胴部破片。4は諸磯C式土器で集合沈線を施し、ボタン状の貼付文を施す。5は底部破片で、底部からやや外反して開く器形を呈する。地文は単節RL縄文。6・7は中期阿玉台式土器で同一の個体と思われる。輪積み痕を残す口縁部に隆帯を連続に押し当て、細目のペン先状の工具により横位及び連続弧状の押し引き沈線を施す。7は、胎土等の特徴から中期に比定する。

縄文時代の石器の出土は少なく、打製石斧2点を図示した。

第5表　遺構外出土縄文時代遺物・石器観察表（第60図）

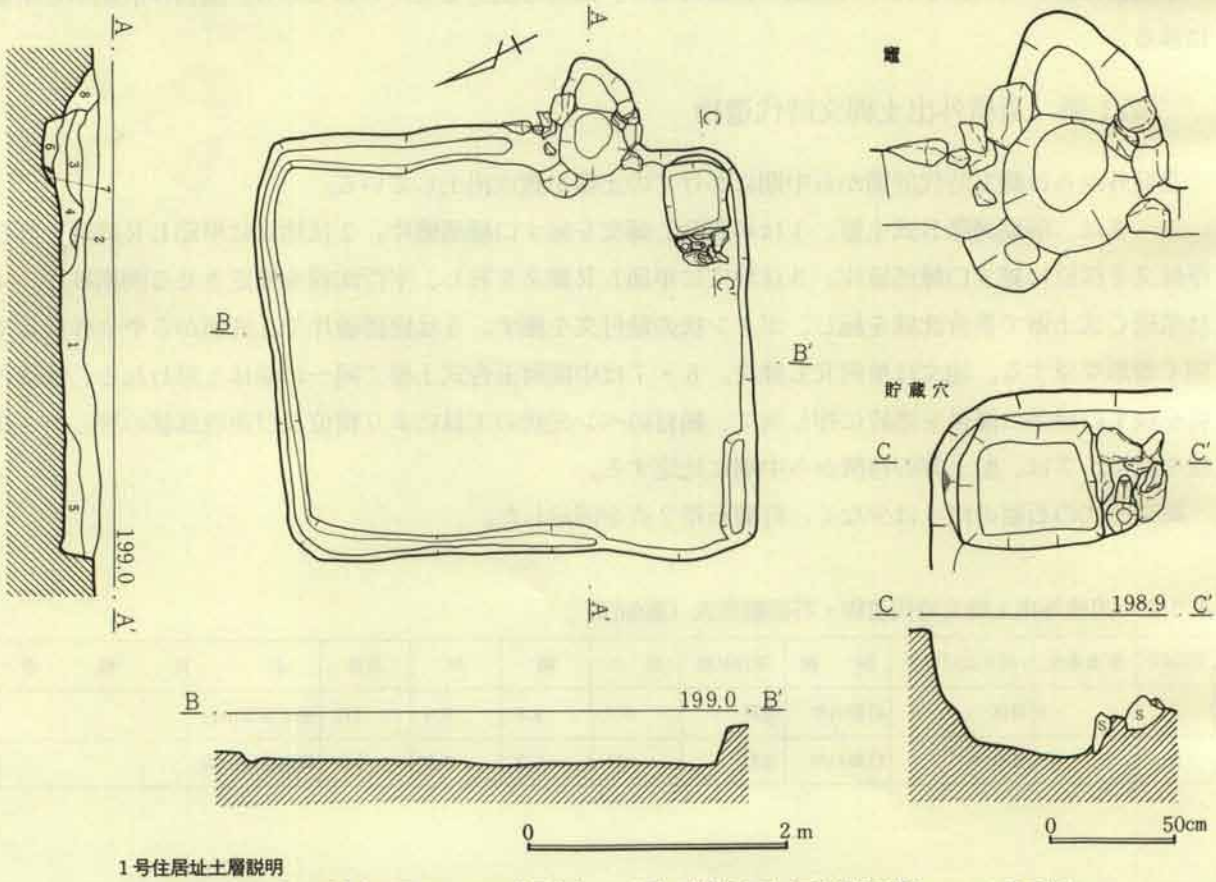
挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重量	石　質	備　考
8	9	II区	打製石斧	完形	8.9	4.8	2.5	117	硝子質安山岩	
9	8	6G	打製石斧	完形	11	5.2	2.1	146	緻密質安山岩	



第60図　遺構外出土縄文時代遺物

第Ⅳ章　歴史時代の遺構と遺物

第１節　第１号住居址



１号住居址土層説明

1層	黒褐色土層	灰白色軽石混入。ローム粒子点在。	5層	暗褐色土層	灰白色軽石混入。ローム粒子点在。
2層	暗褐色土層	灰褐色粘質土ブロック混入。	6層	暗褐色土層	焼土粒子点在。
3層	黒褐色土層	灰白色軽石混入。焼土粒子点在。	7層	灰褐色土層	竈構築の粘質土のブロック。
4層	暗褐色土層	焼成灰混入。焼土粒子点在。	8層	灰褐色土層	焼土粒子混入。

第61図　第１号住居址平・断面図

遺構（第61図、ＰＬ－６）

本住居址は、Ｉ区（Ａ・Ｂ－１・２Ｇ）、標高198.80～199.00mに位置する。

平面形態は南北にやや長い隅丸長方形を呈し、南北3.9m、東西3.4mを測る。主軸方向はＮ－64°－Ｗ。壁高は６～31cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は北壁と東壁・西壁・南壁のそれぞれ一部で確認でき、幅14～29cm、深さ３～７cmを測る。柱穴は確認できなかった。床面はほぼ平坦で住居址中央がやや堅緻である。

竈は東壁の中央やや南寄りに付設する。袖は人頭大の礫を組んで作られたものと思われる。焚き口幅50cm、焚き口から煙道まで94cmを測る。燃焼部は円形を呈し、径54cmを測る。燃焼部から煙道部にかかては緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴は住居址の南東に付設され、東西に長い長方形を呈し、東西56cm、南北52cmを測る。床面からの掘り込みの深さは24～36cmを測る。掘り込みの西側壁は扁平な礫を張り付けさらに数個の礫を組む。

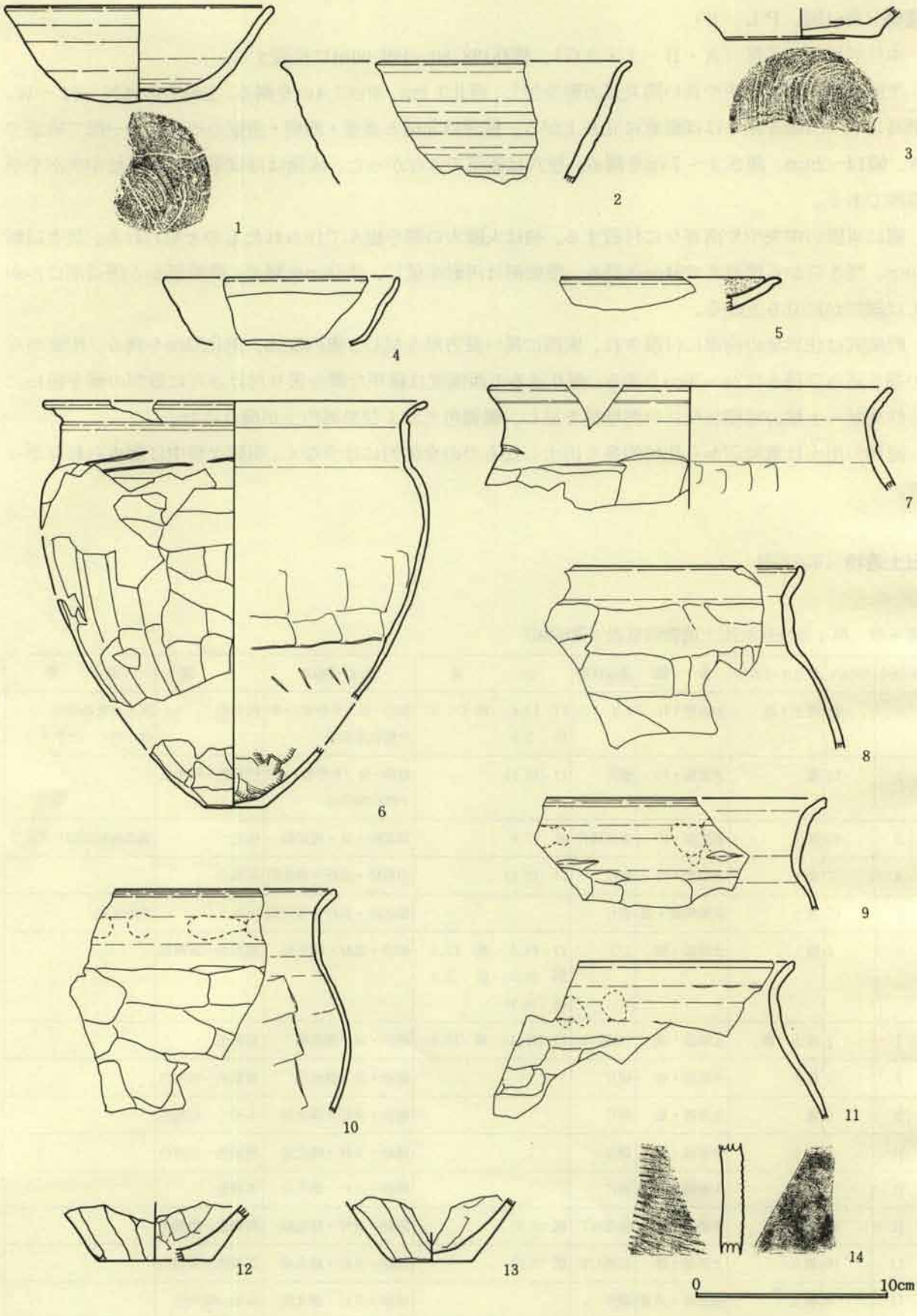
住居址へ土壌の堆積状況は自然堆積を呈し、暗褐色土および黒褐色土が流れ込む。

遺物の出土は竈周辺から比較的多く出土したものの全体的には少なく、明確な集中は認められなかった。

出土遺物（第62図）

第６表　第１号住居址出土遺物観察表（第62図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	法　量	胎土・焼成	色　調	備　考
1	12	覆土・竈	須恵器・坏	1/2	口 13.6　底〈7.4〉 高 5.0	細砂・良（やや軟）・やや酸化焔気味	灰褐色	底部回転糸切り 後手持ちヘラケズリ
2	13	竈	須恵器・坏	破片	口（18.0）	細砂・良（やや軟）・やや酸化焔気味	灰褐色～暗褐色	
3	14	覆土	須恵器・坏	底部破片	底 7.6	微細砂・良・還元焔	灰色	底部回転糸切り未調整
4	7	覆土	土師器・坏	破片	口（12.0）	中粒砂・良好・酸化焔	茶褐色	
5	15	覆土	灰釉陶器・皿	破片		微細砂・良好・還元焔	灰色	内面灰釉
6	1	竈	土師器・甕	2/3	口 19.6　頸 17.8 胴 20.2　底 3.0 高（20.9）	細砂・良好・酸化焔	橙褐色～茶褐色	
7	4	覆土・竈	土師器・甕	口縁2/3	口〈20.4〉　頸〈19.0〉	細砂・良・酸化焔	橙褐色	
8	2	覆土	土師器・甕	破片		細砂・良・酸化焔	黄褐色～橙褐色	
9	6	竈	土師器・甕	破片		細砂・良好・酸化焔	茶褐色～暗褐色	
10	5	覆土	土師器・甕	破片		細砂・良好・酸化焔	橙褐色～茶褐色	
11	3	覆土	土師器・甕	破片		細砂・良好・酸化焔	茶褐色	
12	11	覆土	土師器・甕	底部1/2	底〈4.2〉	細砂・良好・酸化焔	橙褐色～暗褐色	
13	10	覆土	土師器・甕	底部1/2	底〈5.8〉	細砂・良好・酸化焔	茶褐色～黒褐色	
14	8	覆土	須恵器・大甕	破片		細砂・良好・還元焔	灰色～暗灰色	



第62図　第１号住居址出土遺物

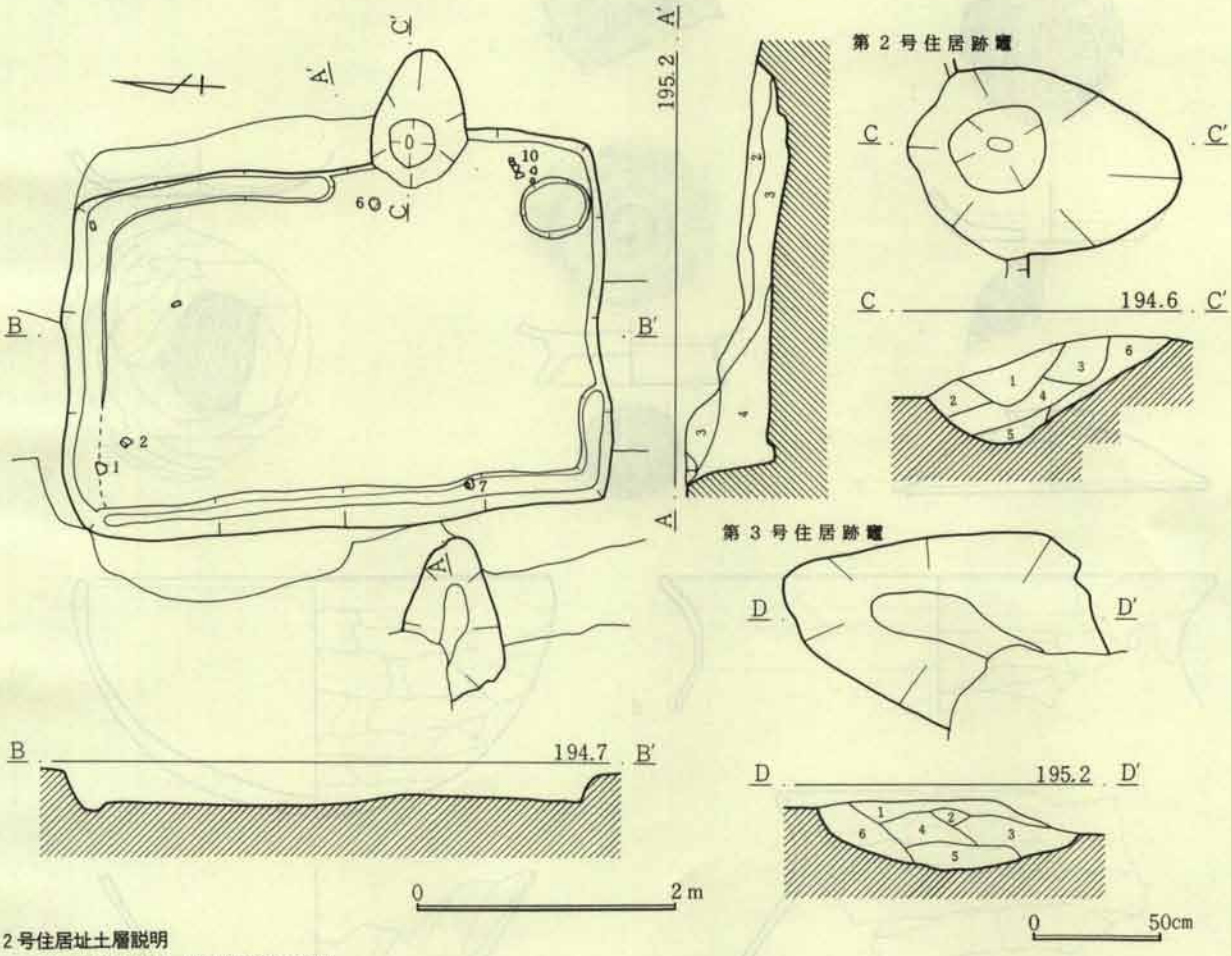
第２節　第２号住居址

遺構（第64図、ＰＬ－６）

本住居址は、Ⅱ区（Ｋ・Ｌ－８・9Ｇ）、標高194.50～195.10ｍに位置する。

平面形態は南北にやや長い長方形を呈し、南北4.2ｍ、東西3.0ｍを測る。主軸方向はＮ－０°－Ｗ。壁高は23～61㎝を測りほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は西壁と北壁・東壁・南壁の一部で確認でき、幅24～33㎝、深さ２～５㎝を測る。柱穴の確認はなかった。床面はほぼ平坦であるが、明確な堅緻面は確認できなかった。

竈は東壁の中央やや南寄りに付設する。袖は確認できなかった。燃焼部と煙道部の境は明確に区別できず、住居外に向かって緩やかに立ち上がる。焚き口幅74㎝、焚き口から煙道まで108㎝を測る。



２号住居址土層説明

１層　灰褐色土層　焼土粒子多量混入。
２層　暗褐色土層　灰白色軽石均質混入。
３層　暗褐色土層　２層に酷似。２層よりやや明るく混入物も少ない。
４層　暗褐色土層　覆土中もっとも明るい。遺物以外の目立った混入物もない。

２号住居址・竈土層説明

１層　黒褐色土層　焼土粒子、ローム粒子少量混入。
２層　焼土ブロック混入層。
３層　灰褐色土層　焼成灰混入。
４層　焼土粒子多量混入。
５層　黒褐色土層　焼土粒子微量混入。

３号住居址・竈土層説明

１層　焼土ブロック・粒子混入。炭化物粒子点在。
２層　焼土粒子多量混入層。
３層　焼土粒子、炭化物粒子混入。暗灰色粘土粒子点在。
４層　焼土粒子・暗灰色粘土ブロック点在。
５層　焼土粒子・暗灰色粘土粒子点在。
６層　焼土ブロック・粒子混入。

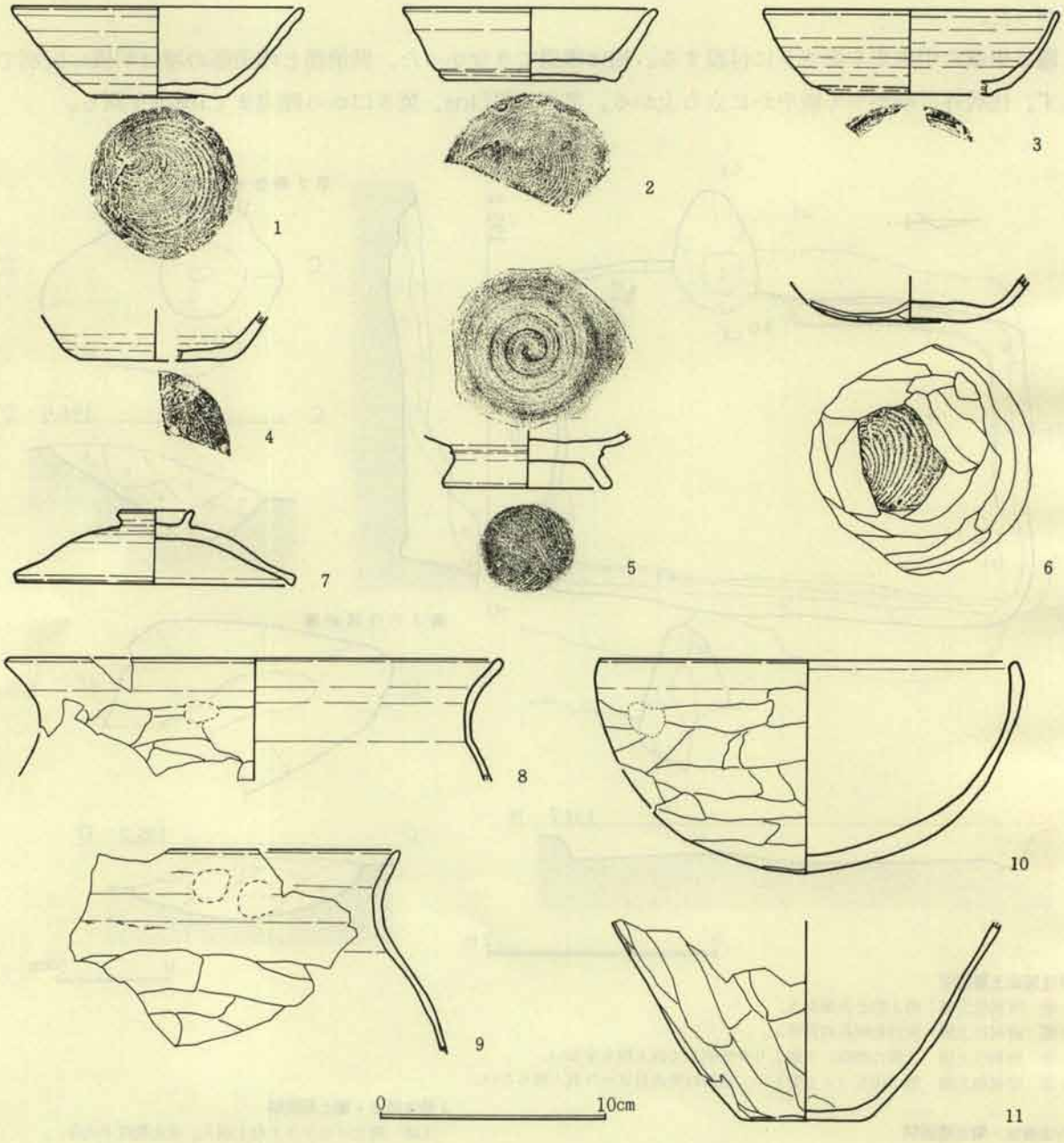
第63図　第２・３号住居址平・断面図

貯蔵穴は住居址の南東の隅に付設され、南北にやや長い楕円形を呈する。規模は長軸長54cm、短軸長46cmを測る。床面からの掘り込みの深さは約24cmを測る。

住居への覆土の堆積は自然堆積を呈し、暗褐色土が流れ込む。

遺物の出土は比較的少なく、明確な集中は認められなかった。

出土遺物（第64図）



第64図　第２号住居址出土遺物

第7表　第2号住居址出土遺物観察表

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	法　量	胎土・焼成	色　調	備　考
1	9	1・覆土・II区	須恵器・坏	1／2	口 12.8　底 6.2 高 4.0	細砂・中粒砂・良好・還元焔	灰褐色～暗灰色	底部回転糸切り未調整
2	3	2	須恵器・坏	1／2	口 11.0　底 7.4 高 3.2	細砂・良好・還元焔	灰色～暗灰色	底部回転糸切り未調整
3	7	覆土・II区	須恵器・坏	1／3	口〈12.8〉　底〈7.0〉 高 3.7	細砂・粗砂・良好・還元焔	暗灰色	
4	8	覆土	須恵器・坏	破片		細砂・良好・還元焔	灰色～暗灰色	底部回転糸切り後手持ちヘラ調整
5	4	覆土	須恵器・椀	底部	底 7.5	細砂・良好・還元焔	明灰色	底部回転糸切り後付高台
6	6	4	須恵器・坏	底部	底 5.0	微細砂・良好・還元焔	灰色～暗灰色	底部回転糸切り後手持ちヘラ調整
7	10	3	須恵器・蓋	1／2	口 12.2　高 3.2 鈕 3.4	細砂・良好・還元焔	灰色	
8	5	覆土・II区	土師器・甕	口縁1/2	口 21.6　頸 19.0	細砂・良好・酸化焔	橙褐色～暗褐色	
9	2	覆土	土師器・甕	破片		細砂・良好・酸化焔	橙褐色～茶褐色	
10	11	覆土・II区	土師器・鉢	1／3	口 18.2　高 9.5	細砂・良好・酸化焔	茶褐色	内面に煮沸痕あり
11	1	覆土・竈・II区	土師器・甕	底部	底 5.0	細砂・良好・酸化焔	茶褐色～黒褐色	

第3節　第3号住居址

遺構（第63図、ＰＬ－６）

本住居址はII区（K－18G）に位置する。後世の耕作による撹乱が住居址のほとんどを破壊しており、竈のみが確認できた。

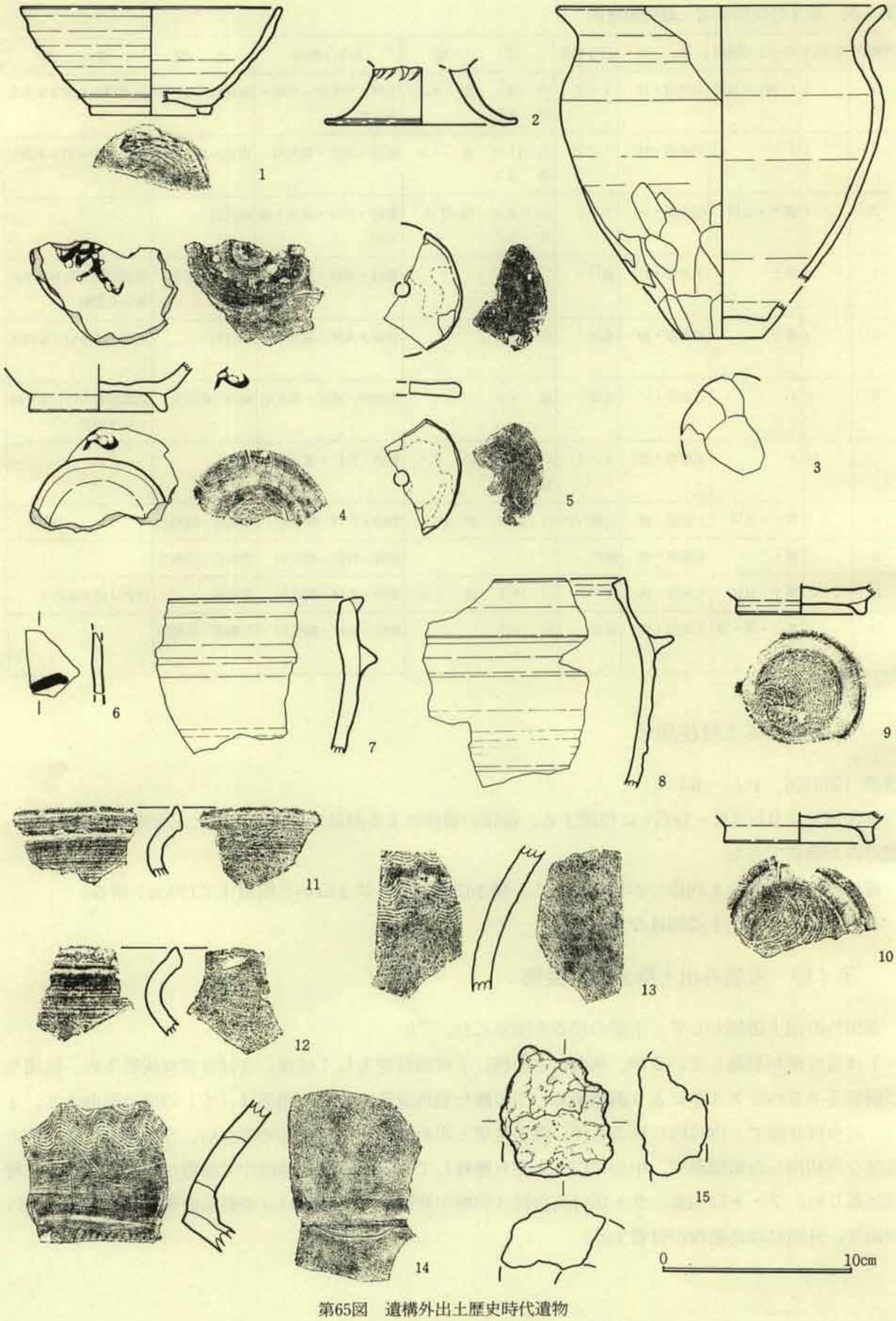
竈は第2号住居址と同様の形状を呈する。焚き口幅84cm、焚き口から煙道まで130cmを測る。

本住居址からの出土遺物はなかった。

第4節　遺構外出土歴史時代遺物

遺構外の出土遺物として、下記の15点を図示した。

1は高台部が剝離しているが、高台付きの椀。2は台付甕もしくは壷。3はロクロ成形され、底部及び胴部下半をヘラケズリにより調整する、やや酸化焔焼成気味の甕で頸部は「く」の字に屈曲する。4は、高台付き椀で、内外面に墨書を伴い同じ文字と思われるが、判読はできない。5は椀もしくは杯の底部を再利用した紡錘車で、中央に円孔を穿ち摩耗している。6は土師器片で墨書が認められるが、判読は難しい。7・8は羽釜。9・10は高台付きの椀の底部破片。11～14は須恵器の甕の破片。15は羽口の破片。外面には流動滓が付着する。



第65図　遺構外出土歴史時代遺物

第8表　遺構外出土歴史時代遺物観察表

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	法　量	胎土・焼成	色　調	備　考
1	4	4 G	須恵器・椀	1／4	口 13.8　高〈5.4〉	細砂・良好・還元焔	灰色	底部回転糸切り後付高台
2	5	II区	土師器・台付甕	台部1/2	底 10.0　高〈3.0〉	細砂・良好・酸化焔	茶褐色	
3	2	II区	須恵器・甕	1／3	口 17.4　頸 15.4 底 4.4　高 17.7	細砂・良好・酸化焔焼成気味	灰褐色	轆轤成形・底部から胴部下半ヘラケズリ
4	14	4 G	須恵器・椀	底部1/2	底 7.2	細砂・良好・還元焔	灰色～暗灰色	底部回転糸切り後付高台・墨書あり
5	7	II区	須恵器・紡錘車	1／3		細砂・良好・還元焔	灰色	須恵器・坏底部破片の再利用
6	8	II区	土師器・坏	破片		細砂・良好・酸化焔	茶褐色	墨書あり
7	6	II区	須恵器・羽釜	破片		粗砂・良好・やや酸化焔焼成気味	灰褐色～黒褐色	
8	3	II区	須恵器・羽釜	破片		中粒砂・良好・やや酸化焔焼成気味	明灰色～灰褐色	
9	9	I区	須恵器・椀	底部	底 6.8	細砂・良好・酸化焔焼成気味	灰褐色～黒褐色	底部回転糸切り後付高台
10	10	4 G	須恵器・椀	底部1/2	底 7.8	細砂・良好・還元焔	灰色	底部回転糸切り後付高台
11	12	6 G	須恵器・甕	口縁破片		細砂・良好・還元焔	暗灰色	
12	13	II区	須恵器・甕	口縁破片		細砂・良好・還元焔	暗灰色	
13	1	I区	須恵器・大甕	破片		細砂・良好・還元焔	灰色～灰褐色	
14	11	II区	須恵器・大甕	頚部破片		細砂・良好・還元焔	灰色～暗灰色	
15	15	6 G	羽口	破片		細砂・良・酸化焔	明褐色	流動滓付着

第Ⅴ章　調査のまとめ

本遺跡の発掘調査は調査面積も184㎡と狭く、また工事により大幅な土地改変が予定された地域のみの発掘調査であり、その成果については断片的な資料しか得られなかった。

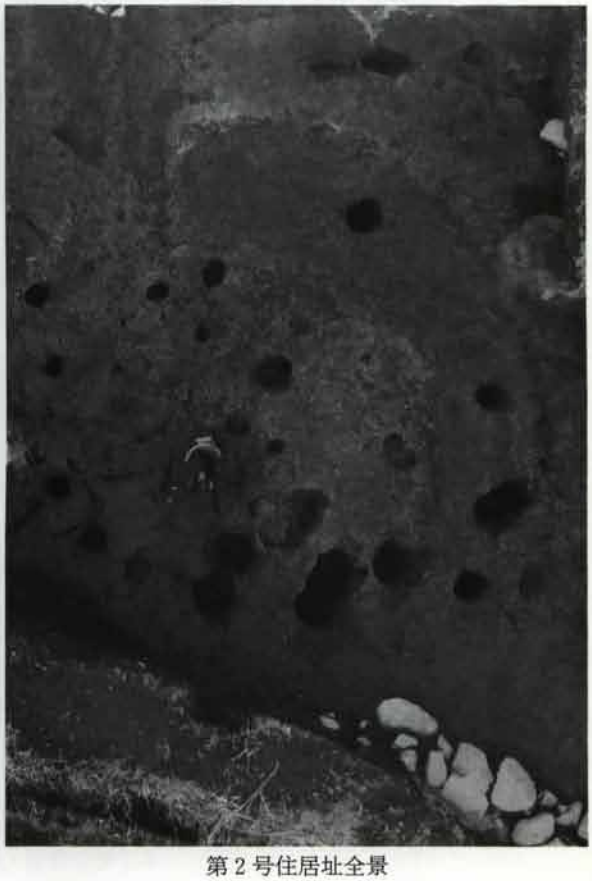
本遺跡南西には調査面積で15,000㎡に及ぶ大規模な遺跡「堀越中道遺跡」が所在し、平安時代における地方の中心的集落として位置づけられる。本遺跡も出土遺物からは「堀越中道遺跡」と同時期にあたり、堀越中道遺跡を中心とした、当時の集落の立地を考える上で参考になるものと思われる。

特に遺構の検出がなかったものの、ややまとまって出土した鉄滓及び羽口の検出は、当時の鉄生産及びその集積・流通を考える上で、多種・多様な鉄製品を多く出土した堀越中道遺跡や、鉄の生産が行われた乙西尾引遺跡等の周辺の遺跡との関係を充分考察する必要があろう。今後の周辺遺跡の調査も含め課題としたい。

調査区（Ⅰ区）全景

調査区（Ⅱ区）全景

調査区（Ⅲ区）全景



第２号住居址全景

第１号住居址・炉及び遺物出土状態

第１号住居址・炉及び第２号住居址

第１号住居址・炉

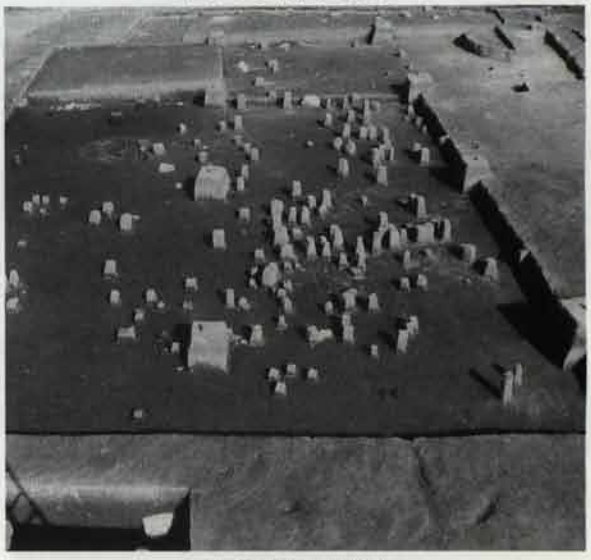
第１号住居址遺物出土状態

II区遺物集中箇所遺物出土状態

I区1T遺物出土状態

I区5T遺物出土状態

I区6T遺物出土状態



III区遺物出土状態

III区土層状況

炭窯全景

住居址 1

住居址 2

住居址 9

住居址33

遺構外出土遺物・土器78、194

遺構外出土遺物・土器559

遺構外出土遺物・土器262

遺構外出土遺物・土製品 1

第１号住居址全景

第１号住居址・竈全景

第１号住居址・貯蔵穴全景

第２号住居址及び第３号住居址・竈

大胡西北部遺跡群発掘調査報告書　第4集

堀越西一丁田遺跡
堀越乙関替戸遺跡

平成10年3月20日発行

編　集　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　行　群馬県勢多郡大胡町教育委員会
〒371-0292　群馬県勢多郡大胡町堀越1115
☎027（283）1111

印刷製本　朝日印刷工業株式会社

©1998　Printed in Japan